

歯学部ニュース

令和3年度第1号（通算139号）



特集 入学を祝して
歯学部生の活動
コロナ禍での学生ケア

目 次

特集1 入学を祝して	1
歯学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
入学者のことば	4
歯学科1年 難波 秀昭	
歯学科1年 塩原 匠翔	
歯学科 2年次編入生 平岡 望々	
口腔生命福祉学科1年 佐々木朱里	
口腔生命福祉学科1年 大畠 夢生	
口腔生命福祉学科 3年次編入生 佐々木史佳	
組織再建口腔外科学分野 大学院1年 笠原 公輝	
歯科麻酔学分野 大学院1年 枝村 美和	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年 平原 茉結	
口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年 石山茉佑佳	
入学おめでとう 入学者名簿	12
令和3年度 歯学部歯学科	
令和3年度 歯学部口腔生命福祉学科	
令和3年度 歯学部歯学科 2年次編入生	
令和3年度 歯学部口腔生命福祉学科 3年次編入生	
令和3年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻（博士課程）	
令和3年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士前期課程）	
令和3年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻（博士後期課程）	
特集2 歯学部生の活動	14
コロナ禍を超えて 歯学科 2年 稲葉 達也／歯学科 2年 松田 琉璃	
歯学科 3年 野村 陽菜／歯学科 3年 田中 千尋／歯学科 4年 山内 瑞起	
歯学科 4年 山田みどり／歯学科 5年 小貫 安紀／歯学科 5年 片山 詩乃	
歯学科 6年 小山 怜鷹／歯学科 6年 生田 絵里／口腔生命福祉学科 2年 大塚 もも	
口腔生命福祉学科 3年 桜井 花菜／口腔生命福祉学科 4年 川瀬菜々香	
留学生紹介 Titi Chotirungsan・Nyein Nyein Chan・Hnin Yu Lwin	
部活動紹介	33
軟式テニス部 大西 雅人・軽音楽部 武井奏一郎	
講座紹介	35
生体歯科補綴学分野教授 魚島 勝美	
大学院へ行こう	39
羽賀 健太・磯野 俊仁・山崎 恭子	
学会受賞報告	42
前川 知樹・都野さやか・鈴木 絢子・Razi Saifullah Ibn Belal	
田村 光・野口 雅史・目黒 史也・日吉 巧	
特集3 コロナ禍での学生ケア	51
山村 健介・藤井 規孝・中村 健	
教授に就任して	59
濃野 要	
素顔拝見	61
高 昇将・佐久間英伸・須田 大亮・齋藤 タ子	
中村 太・井田 貴子・外園 真規	
総務委員会だより	67
前田 健康	
医歯学総合病院臨床研究推進センターから	69
宮沢 春菜	
同窓会だより	72
野内 昭宏・棟方 隆一・杉田 佳織	
ミニコラム	76
山崎 和彦	
新潟歯学会報告	77
辻村 恭憲	
教職員異動	78
令和3年度歯学部内委員会	83
歯学部各種委員会	86
編集後記	87



入学を祝して

歯学部長 前 田 健 康

晴れやかに入学の日を迎えられたみなさん、そして保護者ならびにご家族の皆様、ご入学、誠にありがとうございます。新潟大学歯学部に入された皆さんに、教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。新潟大学歯学部で新入生の皆さんの能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

みなさんは新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大という厳しい環境の中、熾烈な競争を勝ち抜き、入学の喜びを噛みしめていると思います。受験勉強が人生を燃焼させて抜け殻を生んでしまう、いわゆる燃え尽き症候群という言葉聞いたことがあるかと思いますが、もちろん、休憩や充電期間が必要なのは当然ですが、みなさんが入学した歯学部を卒業したあかつきには、国家試験に合格しなければなりません。そのためには、常日頃の精進が必要です。嘶家が真打ちに昇進し、お披露目の会を開く際に、師匠連は必ず、「本人、これからも勉強致しまして」とお祝いの披露口上を述べます。受験戦争を勝ち抜いたあとも、勉強は続きます。また、卒業しても勉強は一生つづきます。

新潟大学歯学部の教育目標は、「包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成」であり、「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。諸君がこれから大学で学ぶ講義、実習の内容は社会に出るときのスタートラインに立つための内容でしかありません。人生100年時代といわれる長い人生を過ごしていくには、日々進歩する学問を常に修得する必要がある

ます。そのためには自ら学んでいくという態度が不可欠です。また、医療・福祉を目指す者は、問題を発見し、自ら学習し、問題を解決していかなければなりません。

COVID-19の拡大により、教育活動も含め、日常生活にも大幅な制限が加えられています。昨年度は、私ども歯学部でも、オンライン講義等による非対面型講義が実施され、実習・演習の開始時期が延期となるとともに、数々の行事が中止となりました。このような中、私ども教職員は通常と同じ教育効果をあげるべく努力しているわけですが、教員の力だけで今まで以上の教育効果をあげることができるかは、はなはだ疑問です。教育とは教員から学生に知識を授けることと思いがちが、辞書をひもとくと「教育とは知識・技能を修得させたり、人間形成を図ったりする目的で人に様々なことを教えること」とあります。一方、教育を成功させるには教育を受ける者の重要性も指摘され、「教育は教えられる者がその教える者の行為やその内容を受け入れることによって、はじめて成り立つ」と記しているように、教育とは教員と学生の共同作業です。我々教職員と共に、日々進歩する歯科医学、口腔保健医療・福祉を学び、自分の将来の夢を実現できるよう、努力しましょう。

このコロナ禍の中、歯学部専門科目では、教職員はもとより、学生の高い自覚により、いち早く対面型講義、実習を再開し、新学期からもこの方針を貫いていきます。コロナ禍での大学教育は学生諸君の良識ある行動によって支えられています。制限のある時期ですが、勉強だけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教

養のある社会人となるよう人間性を磨いてほしい
と思います。

新しい生活様式の下、これらの活動は現時点で
はこれまでのようにできないかもしれません。簡
単ではないからこそ、皆さんの柔軟な発想が求め

られ、アイデアが活かされる貴重な経験となりま
す。そして、社会の期待に応える医療人を目指
し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時
に今年度新入生および保護者の皆様全員で喜びを
分かち合いたいと思っています。





歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院 副病院長 小林 正 治

令和3年度の新入生の皆さん、ご入学誠におめでとうございます。また、ご親族の皆様にも心よりお祝いを申し上げます。

昨年より1年余りにわたる新型コロナウイルス感染症の拡大というパンデミックに、世界中が振り回されてきました。皆さんも、通常の授業や生活が送れないという特殊な状況の中で、苦労やストレスは相当のものだったと思います。そうした辛い思いの中、不安と闘いながら、逆境をはねのけ、克服されての入学ですので、その喜びも一入かと思います。

皆さんは学びの新たなステージに入られました。この節目の時に、今一度皆さんがこれから学ぶ学問について、どのように対峙してモチベーションを高めていくべきかを考えてみてください。学問の面白味や醍醐味は、その入り口では見出しにくいものです。学び、そして探究するためのエネルギーは、皆さん自身の志や信念から生み出されるものです。そして、そのエネルギーの質と量こそが、皆さんの大学での学びを飛躍させる決定的要因となります。知的好奇心と貪欲な探究心をもって、そのエネルギーをわれわれが提供する教育プログラムへの挑戦に注ぎ、その過程で新たな興味を引き起こす循環を作ってもらいたいと思います。

私が好きな本に「14歳からの哲学 考えるための教科書」というものがあります。著者は池田晶子さんという哲学者で、中学や高校での副読本にも採用されているようですので、読まれた方もいるかもしれませんが、私は残念ながら14歳ではな

く44歳の時にこの本に出会いました。答えを教えてくださいの本ではありませんが、人生の考え方を教えてくれる本です。大学での生活は、皆さんがこれからの人生を生きていくためのアイデンティティを確立する時期になります。皆さん自身の様々な経験の中で、いろいろなことを考え、知性と感性を育んでいただきたいと思います。また、いろいろなことにチャレンジをしてください。失敗や挫折も、人として成長するための糧となります。そして、人間性豊かな医療人としてのアイデンティティを確立していただきたいと思います。

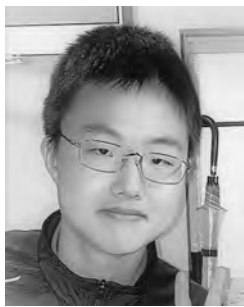
皆さんが、新潟大学歯学部での学業を順調に進まれますと、新潟大学医歯学総合病院において臨床実習を受けていただくことになります。新潟大学医歯学総合病院は、我が国有数の伝統をもつ基幹病院でありますとともに歯学部・医学部の教育病院でもあり、多くの医療人を輩出してきました。本院の理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」というものであります。われわれは、優秀な医療人を育てたいと考え、診療参加型の教育プログラムを用意して皆さんを待っています。

新潟は、豊かな自然に囲まれ、豊富な食材とその美味しさは目を見張るものがあります。また、様々な伝統文化も根付いた魅力ある街でもあります。皆さんのこれからの活躍に期待するとともに、皆さんが新潟の地で楽しく充実した学生生活を送ってくれることを願っています。

入学者のことば

大学生になって

歯学科1年 難波 秀 昭



2002年生まれは不幸である
と聞いたことはあるだろう
か。小中高の修学旅行で
の目玉を見ることが出来な
かったという話だ。私の場
合、日光東照宮や清水寺の
工事、首里城の消失といっ

たものに当たってしまい、思えば、修学旅行の思
い出の中には常に工事現場の足場の風景があっ
た。だから、私の代で大学入試が変わったこと
も、緊急事態宣言から始まった受験生活も2002年
生まれのせいなのかと思わせた。

はじめての共通テストに対し、自信をもって指
導をできる先生は少なかった。情報がほとんどな
かったからである。孤独と不安は常に背後にあっ
た。あんなに一年を長く感じたのは初めてであっ
た。

そんな毎日が合格通知によって大きく変化し
た。受験勉強が終わった事を自覚したとき、した
いと思っていたことが何もなかったことに驚い
た。早く受験が終わればいいのにと、どれだけ
思った事だろうか。しかし、その先の生活につい
ては全く考えていなかった。まさか一人暮らしが
始まるとは思ひもしなかった。地図で見た新潟
は、思っていたよりも東京から離れていた。

一人暮らしは大変である。自分のことはすべて
自分でしなければならない。今までどれだけ母に
頼っていたのか思い知らされる。一人だけの家に

残された使った食器たちほど嫌なものはない。し
かし、一人暮らしは楽しい。夜遅くまで友達と遊
んでいても、好きなものを買っても、すべては法
の下に自己責任の上で許されている。これぞ大学
生活だ。

コロナ禍で不完全燃焼に終わった高校の部活動
の経験から、大学では2つの部活に参加し、今度
こそは思い切り楽しみたいと考えている。そし
て、良い友達や先輩方との出会いに感謝したい。
また、様々な交流の中で、自分の価値観も大きく
変わった。丁度、男子校の環境が如何に異質だっ
たのかを感じているところである。

自分の中で大きく変わったものといえば、歯科
医師に対する認識である。高校までは、親や親戚
が身近な歯医者として居た。ただ、実家から離れ
た新しい環境で、先輩やOBの先生方の話を聞い
たり、早期臨床実習での講義を聞いたりするうち
に、より具体的な未来を考えるようになった。そ
して、歯科医師としての両親が大変に偉大に感じ
るようになり、改めて誇りに思うようになった。

ポストコロナの日本は不透明で、不安なところ
も多い。そこで私は、これからの医療がどのよう
な変化を遂げるのか、新しい歯科医の在り方とは
何かについて新潟大学で学び、友と語り合う中で
見定めていきたいと思う。この先、多くの山谷を
乗り越えていこう。ただ、それを運命として
受け入れるのではなく、自らの手でつかみ取った
未来にしたいと思っている。

だから私は、もう2002年生まれを不幸だとは思
わない。ピンチはチャンスという言葉を胸に前に
進む。

歯学部に入塾して

歯学科1年 塩原匠翔

私が、新潟大学の歯学部に入塾してからおよそ3ヶ月が経過しました。まだまだ新型コロナウイルスも猛威を奮っており、様々な行動が制限されています。私達も去年と同様に早期臨床実習で実際に病院内に入るといことが叶いませんでした。しかし、去年の先輩方よりも対面型の授業が増えているため、同期と少しずつではありますが仲良くなることができていると感じます。これから6年間ずっと一緒に学んでいく仲間たちとも仲良くなれるように努力していこうと思います。

さて、時節柄まだまだ非対面型の授業が多く、一週間のうちの約半分をお家で引きこもっているような私ですが、最近熱中していることがあります。それはお料理です。こんなご時世柄ですから外食に頼ることも憚られるので、なるべく自分で簡単なものは作ろうと思ってインターネットを見ながら試行錯誤して作っています。なんやかんや失敗もしながらですが少しずつ作れるものが増えてきて、とても達成感を感じています。自粛生活もマンネリ化してきてしまった方はお料理してみるのはどうでしょう？案外私のように楽しくなってしまうかもしれませんよ？（笑）

私が、この3ヶ月ちょっとの間で一番心に残った授業は早期臨床実習です。数少ない対面の授業で、同期と一緒に同じ空間で同じ目標に向かって進んでいけるというのはモチベーションにも繋がりますし、何より楽しく感じます。また、もともと興味のある分野のさらに詳しいところまで教えていただけることもあり、普段のGコードの授業よりも真剣に聞いてしまっている気がします。自分がこれまで知らなかった専門の科のプロフェッショナルから歯学の専門科についての深い知識を学ぶことができるのでとても参考になるし、何より新しい知識を得ることはとても楽しいです。自分の将来に直接生きるものになってくるので、これからもっとより真剣に授業に取り組んでいき

いと思います。

歯学科の幹事にノリとテンションだけでなってしまう私ですが、仕事を引き受けたからには全力で自分にできることをやっていきたいと思っています。もっと同期のみんなや先輩方と学部内外関係なく仲良くなって大学生ライフをエンジョイすると共に、今後6年間同じ志を持つ仲間たちとともにしっかりと学習を重ねていき、将来立派な歯科医師になって多くの人の役に立てる人間になれるように全力で頑張っていこうと思います。まだまだ未熟なところの多い私ですが、「コツコツ努力することができる」という自分の長所を生かして様々な部分をカバーしていこうと思います。同期のみんなや先輩方、そして教授の皆様方、これからどうぞよろしくお願いします。

入学者のことば

歯学科2年次編入生 平岡望々



新潟大学の歯学科に編入し、早くも三ヶ月が過ぎました。編入学が決まってからは、歯科医師を志す学生として始まる新生活に期待がふくらみました。一方で、岡山県出身である私は瀬戸内海の温暖な気候で暮らしたことしかなかったのも、気候も異なる遠く離れた新潟での生活にうまくやっていけるのか、知り合いも頼る人もいないけれど大丈夫なのかとコロナ禍での勉強や学校のこと以外にも不安が多くありました。しかし今では友達もでき、オンラインと対面で行われている授業の勉強や課題に追われつつも、充実した日々を過ごしています。

私は、高齢化が進む日本において、縁の下の力持ちとなって口腔の健康やQOLの向上を支える歯科技工士に魅力を感じ、以前の大学では歯科技工を学び、免許を取得しました。しかし歯科技工を専攻する中で、自分が想像していたものと現実では大きなギャップがあり、歯科技工士が減少している事や労働環境が良くない事に私は大きな衝

撃を受けました。そしてベトナムでの海外研修に参加し、現地で働く日本人歯科技工士の方から、「体制や環境が整っていなければ医療従事者は免許があっても無力だ」という話を伺い、強く印象に残りました。以来、私は「患者さんにとっての幸せは何なのか」「働きやすい環境・体制とは何なのか」考えるようになり、将来は医療従事者を取り巻く環境を整え、安心安全かつ高度な医療を提供することで人々の健康を支えたいと思うようになりました。編入学を決意したのは、「自分の専門分野の臨床現場で働くだけでは見えてこない、歯科に限らず医科も含めた医療行政の全体像を把握し、医療従事者と患者さんの双方に寄り添うような医系技官になることで、日本の保健医療の方向性を先導できるような人になりたい」と考えるようになったからです。とても壮大な目標を立てていますが、歯科技工を学んでみたいと思っていた頃には全く想像もしていませんでした。ですが、編入学が決まり、改めて自分自身の思いを形にできる機会を得られて感謝しています。

私は現在2年生で、主に基礎科目を学んでいます。未だ詳細に解明されていないような分野もあるため、やはり難しい学問だということもありますが、臨床現場と結びつくような点も多く、実際に歯科医師として働くときにどのようにそれらの知識が活用されているのかを考えるととても興味深いです。また、私は主に技工サイドでの知識を学んでいたのですが、これから徐々に臨床科目が増え、特にチェアサイドでの知識や技術を学ぶことをとても楽しみにしています。卒業まであと5年ありますが、まずは医療従事者と患者さんから信頼される良い歯科医師になれるよう、スタートラインに立てるまで新潟での長い学生生活を楽しみつつ、目標に向かって粘り強く取り組みたいと思います。

より充実した生活を送るために

口腔生命福祉学科1年 佐々木 朱 里



新潟大学に入学して早いもので、もう3か月が経ちました。去年ほどは新型コロナウイルスの影響を受けていないとはいえ、やはり今年もすべて対面授業にはなりませんでした。休みの

日は友人との予定がなければ家でゆっくり過ごす私にとっては、平日学校に行くことが運動不足解消の手助けとなるので対面授業がどのくらい入るのか気になっていました。実際は、1年時は一般教養科目が入るので五十嵐キャンパスに2回、旭町キャンパスに1回の合計週3回でした。これから毎日学校に行かなくてはならなくなるのかと思うと正直今くらいの外出頻度が丁度いいと感じます。このように思っている人は案外多いのではないのでしょうか。そして、口腔生命福祉学科は20人しかいないことや学科の先生方が開いてくださった新入生交流会のおかげですぐに顔と名前を覚えることが出来ました。まだクラスというものがないので、まだ曖昧だったりどんな特徴なのかはこれから知ることになっていくと思いますが、それも含めて楽しみです。部活動についてですが、私は全学部ではなく、医歯学ダンス部にはいることにしました。もともとクラシックバレエを習っていたのですが、辞めてから何年もたっていたのでアップや柔軟で既にブランクを感じました。今まで習ったことの無いキレのあるダンスを習得すべく、ヒップホップのグループに入り、いまは先輩たちに優しく指導してもらい、同学年の仲間と一緒に楽しく部活に勤しんでいます。次に、入学し

た際に、個人的に気になっていたことが、バイトをする暇があるのか？という事でした。私は受験生時代にお世話になっていた塾でバイトをさせてもらっていますが週2回入れて丁度いいか、もう少し余裕があるくらいです。これから後期になるにあたってどのくらい授業が入るのか分かりませんが、臨機応変に対応する力、周りを見て気を使えるようになるために社会に少し出て、自分で働いてお金を稼いでみる、という経験が出来ることにとても充実感を得ています。私は生まれも育ちも新潟なので実家から大学へ通っています。ですので、ひとり暮らしをすることによって得られる知恵や体験をすることが出来ません。そこで、お皿洗いや洗濯、掃除に料理など、実家を出てから必ず必要になる家事を家ですることになっています。しかし、ずっと家に私だけがいる訳ではなく、親が日中の間にやってくれることがほとんどで、なかなか1人で全てをこなすことが難しいです。これを考えると今実際に一人暮らしをして、バイトや部活、もちろん学校生活もしっかりやりくりしている友人たちや先輩をとても尊敬します。最後になりましたが、大学生活を楽しく送るにあたって、自分の心の余裕を持つことがとても大切だと思いました。人に思いやりを持って接する、時間に余裕を持てるように課題をすぐに終わらせる、金銭的に余裕ができるようにバイトに勤しむ、これを着々とこなしていくことが充実した生活を送る秘訣だと思うので、私もこれを念頭に日々過ごしていきたいです。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 大 畠 夢 生

新潟大学に入学してから、あっという間に3か月が経ちました。合格した時の嬉しさや、大学生活への期待と不安とともに迎えた入学式を今でも覚えています。これを機に、これまでの大学生活を振り返りたいと思います。初めの頃は履修登録やパソコンの操作に苦戦し、不安の多い毎日を送っていました。また、対面型と非対面型の講義が混在しているので、初めは慣れなかったのです

が、今では大学生活にも慣れて、友達もでき、充実した日々を送っています。

早期臨床実習は、例年、医歯学総合病院で患者付き添い実習、患者役実習、治療見学実習が行われていますが、新型コロナウイルスの影響で、病院内に入れず、対面型の講義と非対面型のグループワークが行われています。対面型の講義では、医歯学総合病院の各診療科の先生方から専門診療室の説明をしていただきます。1年生のうちから各診療科について知ること、歯学に対する興味がさらに増しました。そして、理想の歯科衛生士、社会福祉士像を想像することができました。非対面型のグループワークでは、「歯科における専門診療科の必要性を考察する」ために、議論をし、最終的に全体発表をします。グループワークを通して、自分の意見を持ち、しっかりと伝える重要性や、お互いの意見をまとめる難しさを実感しました。このようなコミュニケーション能力は医療現場でも必要不可欠だと思うので、普段の生活でも積極的に多くの人とコミュニケーションをとっていきたいです。

5月には、先生方に口腔生命福祉学科1年生の交流会を開催していただきました。口腔生命福祉学科1年生は20人と少ないため、仲の良い関係をつくれるか不安でした。しかし、アイスブレイクなどを通して、これから4年間を共に過ごす仲間との友好を深められたと思います。先生方、このような場を作っていただきありがとうございます。

歯学部部の部活動はとても充実しています。魅力的な部活動が多くあり、入部する部活を決めるのにとても迷いました。最終的に、私は歯学部バスケットボール部に入部しました。私は約3年間バスケットボールから離れていたため、体力がなく、すぐに疲れ果ててしまいます。体力を取り戻して、少しでも上達できるようになりたいです。先輩方が優しく教えてくださり、楽しく活動しているので、入部して良かったと感じています。

これからの大学生活では、様々なことを自主的に学びたいと思います。大学生だからこそ経験できることや新しいことにも積極的に挑戦していきたいです。そして、大学での学びを通して、将来

どのような歯科衛生士、社会福祉士になっていきたいのかを考え、理想とする姿に成長できるように努力していきたいと思っています。これからの4年間は楽しいことばかりではなく、様々な困難にも直面すると思いますが、応援してくれる家族、支えてくださる先生方への感謝の気持ちを忘れずに、仲間と切磋琢磨し、4年間の大学生活を過ごしていきたいです。

入学者のことば

口腔生命福祉学科 3年次編入生 佐々木 史 佳



私は短期大学で3年間歯科衛生士の勉強をし、今年の3月に国家試験を受けて免許を取得後、口腔生命福祉学科に編入しました。

実は私の出身短期大学からは卒業後すぐに進学する人は私が初めてだったため、同級生からは「なぜまた大学に行くのか」「どうしてすぐ働かないのか」などよく聞かれました。私が編入を考えたきっかけには、短期大学での様々な実習の経験が関わっていると思います。地域の歯科診療所、小学校、保育所、大学病院、障害者施設などで多くの患者様や利用者様と触れ合い、気付いたことや見えてきたことがありました。対象者との会話や口腔内の状況から、普段どのような暮らしをしているのか、何を生活課題としているのかなども見えてくるようでした。歯科衛生士はすべての年代の方を対象にお口の健康をサポートします。そのために、より人々の生活に密着した支援ができるようになりたいと思い、編入して社会福祉の勉強も始めました。

口腔生命福祉学科の編入生は英語などのGコー

ド科目や福祉系の科目を主に勉強しています。英語の授業は英語での会話がメインであることに驚き、初めはついていくのに精一杯でした。最近では少し慣れてきて、会話を楽めるようになってきたように思えます。また、4月の何もわからないうちに福祉施設の見学実習が3回あったことにも戸惑いました。しかし自分の頭の中がまっさらな状態で福祉の現場を見たことで、それぞれが印象に残り、学習するうえで注目すべきところが見えてきたと感じました。そして、6月からは福祉系の各科目でPBLも始まりしました。提示されたシナリオの中から事実や疑問点を抽出し、自分たちで設定した学習課題に取り組むという勉強の仕方は初めてで、入学前から楽しみにしていたことのひとつでした。まだ数回しか行っていませんが、グループ討議では他の人の発表を聴いて毎回刺激を受けます。自分が気付かなかったことを補足してもらえたり、理解できるように一緒に考えたりできることがPBLの醍醐味なのではないかと感じているので、それを一層楽しめるようにこれからも取り組んでいきたいと思っています。

こうして入学前に想像していたよりも忙しい生活を送っていますが、第2のキャンパスライフを満喫しようと思って始めたこともいくつかあります。敢えて全学の部活に入ったこと、必修ではない科目を受講していること、ボランティア活動を始めたこと、バイクの免許を取ったことなどです。細かく話すと長くなるので割愛しますが、いずれも今まで自分がいた世界とは全く違うところに飛び込んだことになります。そこで色々なタイプの人と出会い、確実に自分の世界は広がりました。自分の知らない自分に出会えることも、将来を考えるうえで必要になってきます。2年間と短い学生生活ですが、多くの経験を積んで様々なものに触れ、学生として学べる機会を大切に過ごしていきたいと思っています。

入学者のことば

組織再建口腔外科学分野 大学院1年
笠原公輝



今年度より、新潟大学大学院医歯学総合研究科の組織再建口腔外科学分野へ入学した笠原公輝です。“かさはらまさき”と読みます。よろしくお願いします。この度入学者として、

歯学部ニュースへの執筆の機会をいただきましたので、僭越ながら寄稿いたします。

出身は新潟県で、新潟大学歯学部を卒業しました。学生時代は口腔外科に興味があり、大学院に進学するなら口腔外科かなと漠然と考えていました。しかし優柔不断な私は、卒業直前に王道である補綴科もいいかもなと思い、研修は新潟大学医歯学総合病院のBコースを選択し、前期が新潟市民病院、後半が本学クラウンブリッジ診療科で研修しました。

そんな優柔不断な私ですが、前期の2人の指導医に勧められ最終的に組織再建口腔外科学分野への進学を決めました。超高齢社会である日本ではなんらかの全身疾患を持っている方がほとんどです。全身疾患や処方されている薬剤について理解し、どこまでの処置が可能か判断するトレーニングを大学院でやりたいなら口腔外科に進むのがよいとおすすめされました。そんなお世話になった先生から頂いたスクラブを紛失したことが今でも悔やまれます。

口腔外科の大学院は、1年目は教養科目とともに8か月間外来と病棟、4か月間麻酔科で臨床を学びます。

2年目からは基礎研究と臨床研究に分かれ、基礎研究の場合は基礎の教室で動物や細胞等を対象に3年間研究に専念します。臨床研究の場合は臨床を続けながら、患者さんを対象とした研究を行います。私は今のところMRONJに興味があるので、MRONJ関連の研究ができればと考えています。

現在は1年目の外来・病棟期間ですので、外来で先生方の診療の見学、アシストを行い手技のポイントを学び、新患を配当されたときには、実際に診察・処置をおこなっております。

また病棟では入院患者さんの診察・処置、必要に応じて処方や注射などをオーダーします。

研修医のときには、埋伏歯抜歯や生検などの外科処置を経験することがなかったので、思うように手が動かず頭を抱える毎日です。指導医や上級医の先生方には大変ご迷惑をおかけしておりますが、おかげで充実した大学院生活を送ることができています。

抜歯一つとっても1時間の予約枠をフルに使ってしまい、患者さんにはかなり負担をかけてしまっていますが、診療の後に「先生にみてもらって良かったです。」といったいただけることがあり、仕事冥利に尽きます。

大学院4年間という貴重な期間でできるだけ多くのことを吸収し、将来お世話になった先生方に恩返しできればと思います。以上、稚拙な文章でしたが目を通していただき誠にありがとうございました。

入学者のことば

歯科麻酔学分野 大学院1年
枝村美和

2021年4月より、新潟大学大学院医歯学総合研究科歯科麻酔学分野に入局しました枝村美和です。

私は東北大学歯学部卒業後、地元である新潟に戻り、新潟大学のAコースで1年間歯科臨床研修を行い、この春に歯科麻酔学分野に入局させていただくことになりました。

私が歯科麻酔に興味を持ったのは大学生のときでした。患者さんの全身状態を把握し、なにかあれば迅速に対応して手術のサポートをする姿がかっこいいなと思ったのがきっかけでした。その頃はまだ憧れ程度でしたが、1年間一般歯科を学んでいく中で、自分の患者さんの中には高齢で大変な病気を患っている方がたくさんおり、そのよ

うな方たちが歯科治療をより安全にできるように全身管理を学びたいと思うようになりました。また、学生時代に憧れた歯科麻酔の先生の姿が忘れられず、大学院へ進学することを決断しました。

入学してすぐ、実際に患者さんの全身麻酔、静脈内鎮静をやらせていただくことになりました。自分で麻酔計画をたて、患者さんに説明し、手術の際は点滴をとったり、挿管、薬の投与も指導医の先生の指示のもと行わせていただきました。麻酔計画を立てる際には患者さんそれぞれの全身状態の問題点を把握し、どんな疾患でどんな薬を内服しているのかを調べ、どのように対応したらいいのかを考え、先生方と検討させていただいており、全身管理の大切さを日々強く実感しています。また、麻酔のかけ方もそれぞれの先生で考え方が異なり、実際の現場で教科書ではわからないさまざまな視点を学ばせていただいています。

1年生の教養科目に続いて2年生からは研究がはじまりますが、歯科麻酔科では痛みが生じるメカニズムや末梢神経の再生に関する研究を行っています。現在週に1日外来のペインクリニックをみさせていただいていますが、神経が損傷され唇などに麻痺や痛みが残った方などがたくさんいらっしゃるのを見て、こうした方たちを救う研究に自分が少しでも力になればいいなと思っています。

入学してから約2か月が経過し、さまざまな症例を経験させていただいていますが、今も手術室という独特の環境に緊張しっぱなしです。器具や薬ひとつとっても分からないことばかりで、毎回あたふたしていますが、実際に自分で麻酔をかけていく中で、日々学ばせていただいています。

最後に、こんな私を指導してくださる医局の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。これからご迷惑をたくさんおかけすると思いますが、臨床・研究共に学ぶ姿勢を大切に、日々努力していこうと思いますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年

平原 茉 結

4月より口腔生命福祉学専攻前期課程に入学致しました平原茉結です。私は今年の3月に口腔生命福祉学科14期生として卒業し、学びの環境の整った新潟大学で引き続きお世話になっております。

私は4年間、口腔生命福祉学科で歯科と福祉の2分野を学んできました。入学当初、なぜこの2つの分野を一緒に学ぶ必要があるのだろうと、関係性が結び付きませんでした。今後ますます加速する超高齢社会に対応し、健康の維持・向上のためには医療と福祉の連携が不可欠であるということ講義や臨床実習を通して学び、必要性を実感しました。

正直、口腔生命福祉学科への進学はもともと私が高校時代に志望していた進路ではなかったのですが、この学科で学んできた分野の面白さや仕事のやりがいに惹かれ、気づいたら大学院にまで進んでいました。4年間の大学時代から熱心に指導してくださり、大学院への進学を勧めてくださった学科の先生方、そして進学を快諾してくれた両親には感謝でいっぱいです。

大学院に入学してあっという間に3か月が経ちました。日々様々な論文を読んだり、慣れない統計ソフトに悪戦苦闘したりしています。先生方にご指導をいただき、アドバイスを受けながら少しずつ研究を進め始めているところです。2年間、間違いなくあっという間に過ぎていくと思うので、今しかできないことに貪欲に挑戦していきたいと思います。

そして、私は大学院に通いながら新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士として勤務しています。臨床現場で先生方や先輩方から多くのことを教えていただき、まだまだ未熟であることを痛感し

ながら学んでいる毎日です。自分が実習生だった頃、先輩方にしていただいたこと、教えていただき嬉しかったことを、今度は自分が後輩たちにできるように、積極的に教育にも関わっていきたいです。大学院での勉強と研究、仕事の両立は大変だと思いますが、学んだことが自分自身の糧になると信じ、この進路を選択してよかったと思えるように頑張ります。

このような世の中の状況が続いておりますので、口腔生命福祉学科14期生の仲間や修士課程の同期にもなかなか会うことが出来ずさみしく思いますが、直接会って近況報告ができる日を楽しみに、離れたところで頑張るみんなに負けないように日々成長していくことが出来ればと思います。

臨床現場での学び、そして研究での学びを今後患者様に還元していくことができるように、何事も日々一生懸命頑張りたいと思います。これからよろしくお願い致します。

大学院に入学して

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年

石山 茉佑佳



今年度より口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学しました石山茉佑佳と申します。

私は口腔生命福祉学科を11期生で卒業しました。卒業後はがんセンターに就職し、2年間勤務していました。がんセンターでは、手術、抗がん剤治療、放射線治療を受けられるがん患者の口腔ケアを行っていました。大学を卒業してすぐにがんセンターで働くことは、知識も経験も不十分であった当時の私にとって非常に大変でした。全身疾患を患っている患者の診療に

おいては、口腔内の知識だけではなく、口腔内以外の知識も必要とされます。そのため、がんセンターでの勤務は常に勉強の毎日でした。2年間でもとても貴重な経験をさせていただいたと感じています。

がんセンターで満期終了を迎えようとしている時に、新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士を募集するという話を耳にしました。そして、配属先は周術期の歯科管理を行なっている医療連携口腔管理治療部と聞き、「なんとしても働きたい!」と思いました。そして、有難いことにご縁があり、今では希望の部署で勤務させていただいています。

現在は、がん患者のみならず、循環器内科や整形外科の手術を控えている患者、大量ステロイド療法を控えている患者など、様々な疾患を抱えている患者の歯科管理を行っています。症例数も非常に多く、まだまだ勉強が足りないと感じる日々であり、先生方や先輩衛生士さんの指導のもと、業務に励んでいます。

そんな私が大学院への進学を決めた理由は、学会発表を行ったことがきっかけです。私自身、今まで学会発表の経験はほとんどありませんでした。どのような手順で研究を進めていいかわからない中、周りの方々の力を借りてなんとか発表を終えることができました。その際に、もっと知識を身につけたい、研究方法について学びたいと強く思うようになり、大学院への進学を決めました。現在はコロナ渦であり、対面での授業はできないため、先生方とメールで課題のやり取りを行ったり、Zoomで講義を受講しています。仕事との両立は想像以上に大変で、今は課題をひとつひとつ取り組むことに精一杯ですが、大学院で多くのことを学んでいきたいと思っています。歯科衛生士としてもまだ4年目であり、技術も知識も未熟ですが、これから3年間で成長していきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

コロナ禍を超えて

歯学部生の活動～コロナ禍を越えて～

歯学科2年 稲葉達也

はじめまして、歯学科2年稲葉達也と申します。私たち第56期が2年生に進級してから早いもので3か月が経とうとしています。気づけば梅雨入りの季節となり、夏休みを待ち遠しく感じる今日この頃です。多くの人が勉学や部活動に打ち込み、充実した学生生活を過ごしていると思いますが、最近でこそ落ち着いた生活に戻りつつありますが、コロナ禍においての生活は大変だったことも多かったように感じます。コロナ禍という状況を踏まえて、去年から現在に至るまでの生活を振り返ってみます。

私たちは去年の春、コロナの感染が増え始めているという状況下で入学しました。入学式は行えるはずもなく、運動会や学校祭などの行事も軒並み中止となり、大学の授業もすべて非対面という形式になってしまいました。入学当初は大学に関して知らないことが多く、漠然とした不安に駆られた人も多かったのではないかと思います。また、緊急事態宣言下で自粛生活を余儀なくされたため遊びだけでなく部活動やバイトなども制限されてしまいました。このように友人との交流の場がほとんどなく、思い描いていたキャンパスライフとは少し異なる形の大学生活が始まりました。

このように大変な状況の中で、初めて交流の場が設けられたのが1年後期のガイダンスでした。私自身、これがきっかけで友人関係が広がった気がします。これ以降感染対策に十分留意しつつ遊ぶ機会が増えていき、楽しい大学生活がようやく始まったという実感がありました。こうして1年

生としての一年間があっという間に過ぎていきました。

そして今年の春、私たち第56期は無事に2年生に進級することが出来ました。2年生からは授業内容が専門的になり皆が勉学に追われる多忙な日々を過ごしています。試験においても1年生の時とは比にならない難しさですが、学年で誰一人として弱音を吐く人はいません。それは皆で支え合おうとする意識が強いからだと思います。これはコロナ禍で入学した私たちの学年特有の良さだと思います。これからもお互いに刺激を与えあって、より学年の団結力が深まっていければいいなと思います。

この原稿を書きながら今一度振り返ってみると本当にあっという間に時間が過ぎていることを実感しました。コロナ禍を越えて私たちはお互いに信頼しあえる、高めあうことのできる仲間の大切さに気付きました。今日という一日を無駄にしないように友人と切磋琢磨しながらこれからの学生生活を過ごしていきたいと思います。また、これから学年が上がるにつれ大変なことや辛いことが増えていくかもしれませんが学年全員で協力し合って乗り越えていきたいと思います。



写真撮影時のみマスクを外しました

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～

歯学科2年 松田 琉璃

コロナが世界を変えた。2019年12月、突如現れたCOVID-19により我々の生活は変化を強いられた。お店に入れば消毒薬、町を歩けば皆マスク。蒸し暑い夏にもマスク着用とあればコロナよりも熱中症による身の危険を感じるのも無理はない。“有為転変は世の習い”と雖もこれはあまりの大転変であった。大学の講義も例外でなく、モニター越しにしか先生の顔はおろか同級生の顔も知らないまま2学年に進級した。さてこんな異常事態も当たり前になった今日この頃、非常にありがたいことに私は大学に通わせていただいている。

一年次の教養科目から一転、二年次ではいよいよ本格的に基礎医学的な科目を学ぶことになった。全講義のうち半数が対面で実施されることとなり、勉強においても人間関係においても大学生生活の新たなスタート地点に立ったばかりの4月はそのギャップに当惑したものである。一年生の時に先生方から話に聞き、先輩方から脅されていた二年生前期の忙しさは私の想像を容易に超え、学校の勉強に追われると一日が本当に24時間あるのか疑いたくなるくらい、毎日が儚くも一瞬で過ぎてゆく。しかし不思議とその忙しさが心地よい。昨年度の新型コロナウイルスの爆発的な感染拡大により学生である私の生活にも大いに影響が及んだ。ステイホームを余儀なくされ、授業は全てオンライン、部活動は言うまでもなく活動停止で新歓もない。早期臨床実習、歯学部運動会など楽しみにしていた大学イベントのことごとくが止むを得ず中止となり、起伏なくどこか物足りない日々を送っていた。そのため、何事にも思い切り打ち込める今が私にとってはとても有意義な時間となっている。最近、私にとって大学では初めてとなる対面でのテストが実施され二科目の理解度を試された。高校までの勉強は問題集を解いて授業内容の理解を深めるというのが普通だった。しかし大学の勉強は全く異なり、問題集がないため主体的な勉強が求められる。そんな勉強方法の違い

に戸惑いを覚えつつも自分なりの方法を模索し、確立しているさなかである。また、私は高校時代物理選択であったため生物学の知識が幅広く要求される科目には中々骨が折れた。初見の用語のオンパレードで脳はオーバーヒート寸前。そのようなときは周囲の友人と教え合い、理解度を確かめ合うことで何とか試験という山をひとつ乗り越えることができた。未だ新型コロナウイルス感染拡大を危惧して授業が主に非対面形式となり、大学に通えていない学生さんが全国に大勢いる中、このように友人と勉強の苦勞を分かち合い、たわいない会話で笑い合う、という当たり前のようで当たり前でない日常が掛け替えのないものだということを実感しなくてはならないと感じている。

新型コロナウイルスのワクチン接種が急速に拡大しコロナ終息に期待がかかる中、ワクチン接種では終息しない可能性も指摘されている。私自身も二回の接種を完了したものの、世間には新型コロナワクチンに関する情報が錯綜しており、その氾濫する情報の洪水に溺れかかって果たしてそれが英断であったかどうかの判断はつかない。コロナがいつになったら終息するのか、いつになったら以前の生活を取り戻せるのか、そんなことを言えばただ鬼が笑う。明日コロナ感染者の数を急に0人にすることはできないが、私の明日は私の意志でどうとでも変わる。そんな心持ちで今日もまた精一杯生きる。



令和2年度バレーボール部新入生歓迎会
及び卒業生送別会にて
現2年生メンバーで談笑
(写真撮影時のみマスクを外しました)

歯学部生の活動

歯学科3年 野村陽菜

2年生から3年生に進級して、およそ3か月たちました。昨年は、コロナ禍ということで、オンライン授業ばかりでした。しかし、今年はコロナ禍という状況に変わりはありませんが、対面授業や実習が増え、専門的なことを学び始めました。旭町キャンパスに移動して、ちゃんとした対面授業は今年がほぼ初めてといった感じでした。そのため、まずは「登校して、授業を受ける」ということに慣れることからスタートしました。

ようやく慣れた現在において、最も印象的であることは、人体解剖学実習です。解剖学実習が“3年生と言えば”という授業だと思います。まだすべての工程が終了したわけではないのですが、想像以上に大変で、驚きました。私にとってご遺体を見るという経験は、ほぼない状態であったため、一番初めの「ご献体との対面」は衝撃的なものでした。また、初めて生身の人間を解剖するため、メスを入れることやピンセットで結合組織を除去する作業にも抵抗がありました。実習が進むにつれて器具の使い方（メスの使う場面やピンセットを使用するときの力加減など）に慣れていきました。実習において、驚くことはご献体での構造と教科書や資料での構造は全く異なるということです。神経の太さや血管の走り方、筋の厚みは本当に人それぞれで、左右で血管や神経の走り方が異なったときは驚くと同時に面白みを感じました。また、実際の構造と教科書の構造には、ずれがあるものの予習を行ってから臨むことは重

要だと感じました。予習を行ったうえで、ご献体を解剖していくことで、どのあたりにどんな神経、血管が出てくるのか予想できたり、筋はどのように走行しているのかを考えたりすることができます。これにより、座学で学んだ知識の理解を深めることや、座学ではうまく理解できない内容を理解することができると感じました。人間の体がどんな構造をしていて、どのように働いているのかを知ることができるため、人体の構造に興味を持ちました。さらに、自分の体の構造にも興味を持ち始めました。

実習は、頭と体をフル稼働させて進めたり、とても緊張感のある口頭試問が行われたりするため、とてもハードです。しかし、内容は興味深く、濃いものです。実際に体を見るということは今後できない経験であるため、これからも予習復習を欠かさず、自分の知識を深めていきたいと考えました。

今年もコロナ禍ということもあり、対面授業があったり、オンライン授業があったりと授業形態が様々ということなどもあり、毎日があっという間に過ぎていきました。6年間の学生生活は、長いと思っていましたが、思っている以上にあっという間に過ぎていくのではないかと感じました。そう思うと、専門的な知識を学び、身に付けるまでには時間の猶予があまりありません。また、コロナの影響により、できることに制限があるかもしれません。しかし、専門分野の学習が始まる今年、将来の自分について考え始める必要があるとともに、これまで以上に気を引き締めて授業に臨んでいくことが重要だと感じました。

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～

歯学科3年 田 中 千 尋

昨年は新型コロナウイルス感染症の拡大により、ほとんどの授業がZoomや自習になりました。五十嵐キャンパスでの一般教養を終え、これから専門の勉強が始まるというタイミングでそのような状況になり、不安でいっぱいでした。慣れないオンライン授業、想像以上に膨大な学習量、同級生とも会えない中で続く数々のテスト。乗り切るのが大変でした。だからこそ今、対面授業に解剖実習、早期臨床実習Ⅱなど、色々対策しながらですが普段通りに学ばせていただいていることを嬉しく思うとともにとても感謝しています。仲間と共に学ぶことは、楽しいだけでなくモチベーションも高まり充実しています。

3年生といったらやはり解剖実習だと思います。一生の中でも滅多に経験することのできない貴重な経験をさせていただいております。身体の隅々まで解剖して、教科書では見るることのできない実際の人体の構造を観察しています。二次元的な教科書とは異なり、ご献体は三次元的で、それに加え、個体差もあり、より複雑性が増していました。解剖実習も残るところあと数回となり、ご献体を解剖することで自分は医療者になるのだという責任感が芽生えてきました。最後までしっかりと予習復習をして臨み、一つでも多くの知識を

身につけることはもちろん、人間として、医師として大切にすべきものは何なのかをしっかりと学び取っていきたいと思います。

また、早期臨床実習Ⅱも毎週とても楽しみにしているカリキュラムの一つです。早期臨床実習Ⅱは、1年生の時に行われた早期臨床実習Ⅰとは異なり、基礎科目と臨床科目との関連を強く感じています。各診療科における実習2、3回に一度、基礎科目の講義が行われており、実習においても解剖学や歯科理工学、微生物学などの基礎科目を意識する場面が多くありました。ムーグSimodontデンタルトレーナーや歯科用顕微鏡も体験させていただき、後期から始まる実習にも心躍らされているところです。

最後に、このような状況の中ですが、様々な対策をして私たちに通常通りの経験を与えてくださっている先生方に心から感謝申し上げます。新潟大学では、1年からある早期臨床実習で、歯学の基礎を実際の病院で見学することができたり、5、6年では病院に出て直接患者さんと触れ合えたりと、学生のうちから歯科医師として自分を高めていける環境があります。また、シュミレーターがたくさんあるなど、病院で患者の治療に当たる前により実践的な実習を経験することでも、臨床を学ぶのに最適な環境であると思います。これからも、そのような恵まれた環境で学べることに感謝し、志高い仲間と共に切磋琢磨しながら頑張っていきたいと思います。



人体解剖学実習、解剖班のメンバーと

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～ コロナ禍から得たもの

歯学科4年 山内 瑞起

新型コロナウイルスが私たちの生活に大きな影響を及ぼすのではないかと、私自身が強く不安を感じ始めたのは、2020年2月頃であり、それは私が3年生になる春休みであった。3年生では、実習を除くほとんどの授業が非対面式となった。部活動や学校行事も中止となり、大学生らしい生活を送ることはできなくなってしまった。あれから1年経った今、私たちの生活は少しずつ変わり始めている。

変化した点の一つ目は、授業形式である。4年生前期では、感染対策の徹底の上でほとんどの授業が対面式となった。非対面式授業と比較して思うことは、対面式の方が伝えやすさ・伝わりやすさに優れていることである。これは、先生と生徒間や生徒同士のコミュニケーションの質が良いことを示し、学習を効率的に行うには対面式の方が良いと感じた。また、対面式授業では友達と会うことができる。友達と話をしたり食事をしたりすることは、とても楽しく日々の生活に欠かせないと感じる。二つ目の変化は、部活動の再開である。私はバドミントン部に在籍しており、仲間と運動をしたり会話をしたりすることは、大変楽しく気分がリフレッシュされ、私の生活に欠かせないものとなっている。

以上二つが、大学生活において1年間で大きく変化した点であり、元の生活にかなり近づいたと感じる。そして、コロナ禍の生活は不自由で大変なものであったが、それと同時に自分を成長させてくれる時間でもあったと感じる。

その一つが、医療従事者としての自覚である。コロナ禍の行動は自分や他人の感染に大きく影響を与えてしまう。医療従事者になる上で、移動の自粛やマスク・消毒の徹底などの適切な行動を心

がける中で、どのような行動が必要であるかを考えさせられた。また、医学知識の重要性を認識することができた。今回の新型コロナウイルスでは、どのような感染経路で感染するのか、特徴的な症状はどのようなものであるか、などの知識を得ることで適切な感染対策がわかったり、早期発見が可能となり、患者さんや身近な人の命を守ることができる実感した。二つ目に、自立力である。コロナ禍では授業が非対面式になり、自主学習の割合が増えた。自分でどのように学び、どのような計画を持って進めていくのかを求められた。学習のみに限らず、生活リズムを保つという面でも自分の計画性や自制心が試された。三つ目に、日々の生活に対するありがたみである。授業を受けることや友達と話せること、部活動などの当たり前に行なえていたことが、どれだけありがたいことであったのかを実感することができた。

コロナ禍は人々の命を脅かしたり、楽しい時間を奪ったりと私たちの多くの悪影響をもたらしたのは確かである。しかし、それを乗り越えることで私たちは新しい何かを見つけることができたのではないと思う。コロナ禍から得たものを活かして今後の学生生活を精一杯楽しみ、努力していきたいと思う。



4年生を迎えて バドミントン部の同期と

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～

歯学科4年 山田 みどり

4年生になって早3ヶ月が経とうとしています。課題やテスト、実習に追われた忙しい日々ですが、専門科目が中心になり、歯学の知識が付き、将来歯科医師になるという実感を強く感じている今日この頃です。4年生からは昨年度よりも対面授業が増え、コロナ禍前の生活に戻りつつあるように感じています。コロナ禍での学校生活について詳しく紹介していきたいと思います。

授業について、マスクの着用や換気、アルコール消毒、検温などの感染症対策が十分にされた上での対面授業と、Zoomを利用した非対面授業が併用されています。オンデマンドの講義もあり、わからなかったところを何度も視聴することができたため大変便利でした。Zoomやオンデマンドの講義は自宅で受けることができ、時間を有効に活用することができる一方で、すぐに先生に質問できないことや、集中力が続かないなどデメリットもありました。対面授業が増えた今では、緊張感を持って授業に取り組むことができ、友達と一緒に学べるため講義内容がしっかりと身についているように感じます。

実習について、4月から全部床義歯の実習、6月から予防歯科学の実習が始まっています。全部床義歯の実習では、3年生の歯冠修復の実習で身につけた技術や、カービング実習で身につけた技術が役に立ち、日々の積み重ねの大切さを実感しました。講義では理解しにくかった全部床義歯の製作過程や、口腔内の構造などを実習を通して理解し直すことができました。予防歯科学の実習は始まったばかりですが、リステリンなどの洗口剤の効果について実験をしています。どの実習も基礎知識の重要性を痛感するので、専門科目が増え

た今、気を引き締めて学んでいきたいと思いました。

部活についてですが、幹部学年になったもののデンタルをはじめ、ほとんど全てのイベントが中止となってしまい大変残念に思っています。今年で引退ですが、幸運にも7月の大会に参加できることになったので、今までで一番良い結果が出せるように練習したいと思います。

日常生活について、徐々に今までの生活が戻りはじめ、コロナ禍前と変わらずできるようになりましたが、大学生になったらたくさん海外旅行に行きたいと思い、念願のパスポートを取った矢先に新型コロナウイルスが流行してしまったのが大変残念です。息抜きで1年に何度も行っていたディズニーリゾートへも、チケットが全く取れなくなってしまいかれこれ1年近く行けていません。2023年には新エリアがオープンするので、それまでにワクチン接種が進み、コロナ禍前の生活に戻りつつあることを祈っています。

最後に、4年生まで無事に進級できたのは支えてくれる友達がいたからこそだと思っているので、これからも支え合いながらみんなでCBTや国家試験に合格できるように日々努力していきたいと思っています。



折り返し旅行時の記念写真

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～

歯学科5年 小 貫 安 紀

ついに私たち53期生は5年生になりました。入学当時、自分が5年生になり緑衣を着ている姿を想像できていた人はいるのでしょうか？この原稿を書いているのは6月下旬、CBTが1ヶ月後に迫っているところです。これまで8月に実施されていたCBTは昨年度から7月末に実施されることになり、講義や実習と並行してCBTの勉強をしなければならず、1日が24時間じゃ足りない！と焦りながら生活しているのも私だけではない…はずです。

さて今回、コロナ禍での歯学部生の活動について書いていこうと思います。昨年度はほとんどの講義がオンラインで行われ、実習のために大学に行くという生活を送っていました。しかし今年度の講義はオンライン形式と対面形式が併用して行われ、実習も昨年度と同様に感染対策をした上で行われています。オンライン講義は準備にかかる時間や通学時間が省けるため、その分時間を有意義に使えるというメリットもある一方で、講義で理解できなかったことを友人と話し合いにくかったり、質問しにくいというデメリットもあります。またグループ学習の時間ではオンラインだとなぜか話しにくく、対面の時のように活発な議論をするのが難しいと感じていました。そのような悩みも対面での講義、グループ学習が可能となった現在では少しずつ解消され、有意義な学習ができています。特に今年はグループ学習を行う機会が多く、これらは自分1人が持つ知識では思い付かなかったような考えを挙げてくれる人がいるからこそ、自分達の知識も深まり、グループの学習内容もより充実したものが出来上がります。オンラインを経験したからこそ改めて対面での学習の良さに気がつくことが出来たと思います。

また実習も新型コロナウイルスの影響を受けています。5年生の実習にはポリクリ（臨床予備実

習）と総合模型実習があります。ポリクリはグループで各診療科を周り、模型実習や相互実習を行います。しかしコロナの影響で病棟や外来を使った実習ができなかったり、相互実習も一部が変更され、模型を使って行われるようになったものもあります。ポリクリは10月から始まる臨床実習の前に学ぶことの出来る最後の機会でもあるため、例年通りの実習ができないことは残念であり、不安でもあります。しかし先生方の様々なご配慮、ご協力の上で実習ができていることに本当に感謝しています。

最後に部活動についてです。新潟大学が主管で行われるはずだったオールデンタルは中止になり、当時幹部学年であった私たちは何も無いまま引退した人が多いと思います。そんな中、私の所属する硬式庭球部では後輩たちが計画してくれて、感染対策を行いながら3月に先輩方の卒業試合&引退試合を行いました。久々に部員が集まりテニスをできたことは本当に嬉しく、楽しい時間になりました。今年のデンタルも中止になり、他大学との試合もできずモチベーションを保つのは難しいと思いますが、後輩たちにも少しでも楽しい思い出が残ってくれることを期待しています。

冒頭で述べましたように、私たちにはCBT、そして9月に行われるOSCEが待ち構えています。これらを無事突破して10月からの臨床実習に臨めるよう、みんなで協力し努力しながら残りの時間も勉学、実習に励んでいきたいと思います。



5年生初日 友人と

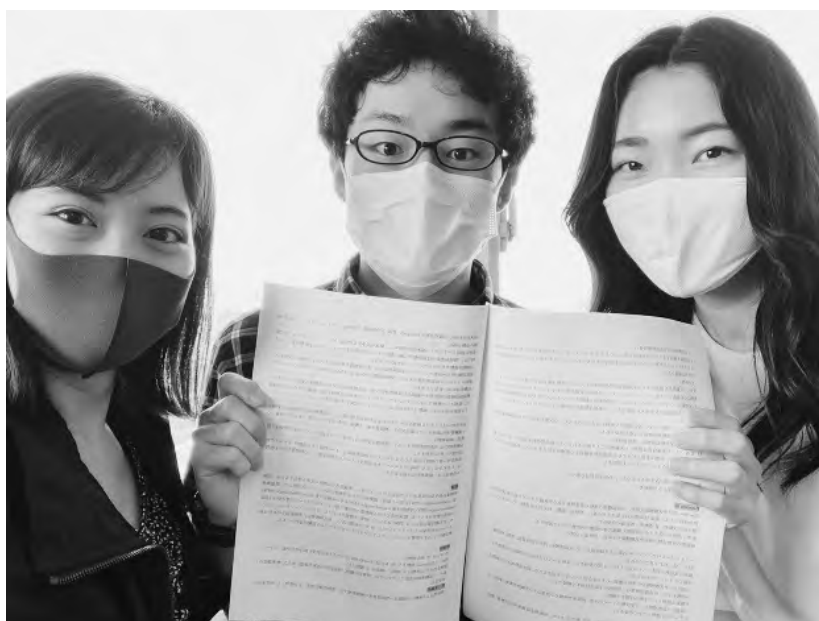
歯学部生の今～コロナ禍を超えて～

歯学科5年 片山詩乃

あっという間に5年生になり自分が新潟に来てからもう5年も経ったのだなあと、しみじみ感じています。5年生では1人で治療計画を立て治療を行っていく総合模型実習や、週2回のポリクリ実習など昨年に比べて今まで習ってきたことが実践としてつながっていく実習が多くなってきました。総合模型実習では自分1人で考えることが多く、さまざまな診療科の内容が混在してごちゃごちゃになりながらも、治療全体の流れが分かるようになり今までより臨症的な模型実習だと感じています。ポリクリ実習では初めて人間の口腔内で器具を扱い、模型との違い、また模型でもやったことがないような手技を行ったりと、着実に臨床の現場に近づいている感じがしました。どちらもまだ途中ですので、今後もっとたくさんのことを吸収していけるように積極的に実習に参加したいと思っています。例年の先輩方の執筆を読ませていただき、ポリクリなどの話を書かれていたと思うので、私からは最近1番印象に残っている授業科目について紹介したいと思います。

5年生の前期の講義に全身管理学という科目があります。この科目の中に麻酔管理計画という実

習があり、全身の様々な疾患を抱えた患者さんの麻酔計画を立てる、といった実習があります。私がなぜこの実習が印象に残っているかというと、単純にものすごく頭を使ったからです。一見、麻酔の計画さえ立てられれば良いのかと思いきや、歯科の教科書に載っていない、調べてもよくわからない、なんてことはザラにありました。よく知らない疾患であったら、そもそも人体の生理学や構造を復習し、学び直さなければならないこともあり、基礎科目のいい復習になったと感じました。新しく学ぶことはもちろん過去に学んだことを思い出すのも思ったよりも大変で、数人のグループで計画を立てましたが話し合いをした後には皆疲れきってしまいます。この作業は本当には大変でしたが、最後のレポートを出す時には大きな達成感がありました。達成感だけでなく、頭を使って調べたものは記憶に残るもので、CBTの勉強に役立つ部分もあり、暗記することが苦手な私にとっては、ありがたいこともたくさんありました。また、調べてもわからないことは、先生に聞くというのも大切だと改めて感じました。この実習だけでなく、他の授業や実習でも積極的に聞いていくように心がけたいと思いました。コロナ禍と呼ばれ、制約されてしまうこともたくさんありますが、その中でも学べることは精一杯学んで行けたら、と思います。



共に麻酔計画を立てたメンバーとの1枚

歯学部生の活動～コロナ禍を超えて～

歯学科6年 小山 怜 鷹

新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちの生活はそれ以前とは大きく変わりました。当たり前だったことが当たり前で無くなり、常にマスクを身につけ、3密を避ける「新しい生活様式」に則って過ごすこととなりました。コロナウイルスの蔓延は私たち歯学部生にも大きな影響を与えました。普段の講義はZoom主体となり、実習も一部縮小して行われることとなりました。

現在、私たち6年生は臨床実習を行なっています。実際の患者さんの治療を中心に、それに伴う技工作業や先生方の診療見学、各科の分散実習など、歯科医師になるために必要な知識、技術を総合的に学んでいます。実際の患者さんの治療では、まだまだ至らない点も多くあり、1回の診療が3時間近くかかってしまうこともあります。そんな時も患者さんは嫌な顔もせず協力して下さいます。この人のために頑張ろうと思える優しい方ばかりです。分からないことだらけな状態から実習が始まり、1日1日が一瞬に感じるほど、充実した日々を過ごしています。そんな実習の中で、先生方はとても熱心にご指導して下さいます。先生とのディスカッションでは、教科書的な話だけではなく、臨床的な意見を交えてアドバイスを下さいます。このような経験ができるのは協力して下さる患者さん、ご指導くださる先生方の支えがあってこそです。そのことを忘れず、残り3ヶ月の臨床実習に臨みたいです。

コロナ禍における臨床実習を通して感じること

は、医療従事者としての責任です。まだ一人前ではないとはいえ、私たちも病院に出て診療を行う医療従事者の一員です。時には自分の行きたい場所、やりたいことを我慢することも強いられます。忙しい日々の中、息抜きとなる休日にも我慢しなくてはならないことは正直なところ、かなり辛く苦しいです。ですが、私たちが無防備にコロナウイルスに感染するようなことがあれば、ご協力いただいている患者さんに対しての裏切りになります。今このような状況の中、臨床実習を行なっていただけることに感謝し、残りの実習を頑張りたいです。

実習を終えると半年も経たずに国家試験の日を迎えます。歯科医師となるため、今までの学生生活を有意義なものにするためには、まずは国家試験に合格することが大前提です。これまでの6年間を共に過ごしてきた52期全員で合格できるよう、お互いに得意な分野、苦手な分野を教え合い、協力していきたいと思います。そして近い将来、コロナ禍を超えたその時には、みんなで集まり、学生生活の思い出を語り合いたいです。



登院式での親友とツーショット

歯学部生の活動

歯学科6年生 田 絵 里

あっという間に最終学年となりました。私たち6年生は現在臨床実習を行っています。新型コロナウイルスの一件により、臨床実習が中止になった大学が多い中、現在臨床実習を行うことができ、とても恵まれた環境にいることを実感しています。臨床実習が始まってから、時間が瞬く間に過ぎていきましたが、一年間を振り返ろうと思います。

10月から臨床実習が始まりました。入学した頃から、早く病院実習に出たいと待ち望んでいましたが、実際に患者さんを治療するとなると楽しめるとともに不安な気持ちもたくさんありました。臨床実習は自分の予想をはるかに超える忙しさで、あっという間に時間が過ぎていきました。臨床実習では、私たちのために協力してくださる暖かい患者さん、また、丁寧に指導してくださる先生方に支えられ、臨床に関する知識・技術はもちろん、医療従事者としての心構えなど多くのことを学びました。実際の臨床現場での学びは多く、教科書からは学ぶことのできないことが多いです。新潟大学で現在臨床実習が行えているのは、先生方が病院に働きかけてくださったからこそのものだと思います。先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。この貴重な機会を最大限活かせるよう、あとわずかな実習にも熱心に取り組んでいきたい

です。

また、臨床実習の半分以上が過ぎた今、52期のみんなが今までよりも、より一層仲良くなったように感じています。学生技工室で互いに先生から教わったことを伝えあったり、つらいことがあった時には励まし合ったり、手先の器用な子が技工操作の苦手な子を助けたりと協力しています。時には、落ち込むこともあります。52期のみんなを支え合いながら、毎日楽しく過ごしているなと感じています。

6年生になってからは技工室内でも、研修先の話など将来に関する話を多くするようになりました。私自身、臨床実習が始まる頃には、将来どんな診療科で働くのか、どんな歯科医師になりたいのかは漠然としたものでした。しかし臨床実習を経験した今、学生の身分ではありますが、やってみたいことが少しずつできてきました。自分のやりたいことができるよう、また、理想の歯科医師になれるよう、あとわずかな臨床実習からできるだけ多くのことを学びたいと思います。臨床実習が終わると、国家試験が待っています。その先には、卒業し、それぞれが自分の目標を達成するための道に進みます。支え合った同期が別々の道に進むのは寂しく感じますが、新潟大学で学んだことを同期のみんながそれぞれの場所で活かし、活躍しているところを見るのが楽しみです。私も同期に負けない素敵な歯科医師になれるよう努力していきたいです。



歯学科6年生でライター米田先生を囲んで

歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 大塚 もも

旭町の歯学部棟に通い始めてから早三ヶ月が過ぎ、目新しかった東中通も今では見慣れた風景の一部になってきました。昨年はコロナ禍の影響を受け、オンライン授業のみの一年を過ごしました。他の歯学部生とも基本は画面を隔てた会話ばかりで、想像していたキャンパスライフとは似ても似つかないような生活も気づけば終わり、今年から本格的に専門科目の勉強がスタートしました。

去年と大きく違う点と言えば、やはりPBLが始まったということだと思います。PBLとは少人数グループの中で一つの事例を元に疑問点を出し、それに対する仮説を立て、各自で行った学習を発表・討論し、仮説を検証するという学習方法です。今までの受け身の講義とは大きく違い、こういった学習課題を立て、どこまで深く学ばかが自分たちに委ねられています。その上、約半年ぶりに会うクラスメイト達といきなり顔を突き合わせて話し合いをするという状況もあり、最初のころはまさに手探り状態でした。今では何回か回数もこなし、講義やPBLで得た知識を参考にしながら活発な話し合いができるようになりました。PBLでは講義より分かりづらい箇所をメンバーと自分たちのペースで理解し合えたり、講義の予習復習も行えるのでとても知識が身に付きます。それだけでなく知識を応用する練習や人にわかりやすく伝える、信憑性のある情報を収集するといった、学習では得られないスキルを同時に鍛えられるため、これからも日々真剣に取り組んでいきたいと思います。

また今年からは徐々に様々な施設や病院を見学

する機会も増えてきました。加えて現役で仕事をしている方々からお話を伺う講義もあり、実際の現場の声を知ることができました。どれも将来のイメージを持つ上でとても参考になるお話でした。中でも全てのお話で共通して触れられていたのがコミュニケーション能力の大切さでした。説明や治療への不安を和らげるだけではなく、再度通院してもらうためにも意思疎通能力は必要不可欠になるため、改めてPBLや普段の生活の中で意識していこうと思いました。今学期は医療センターと児童相談所へ見学に行くことができましたが予定していた施設すべてを訪問することはまだまだ難しい状況にあります。なので今まで以上に一回一回を大切にしながらそういった機会を十二分に活用して知見を深めていきたいと思います。

他にも歯の彫刻をしたり三年生の解剖を見学させていただいたり、初めての体験の連続で毎日新しい発見があり、充実した日々を送れていると感じます。

これから7月を過ぎし夏休みが明け、無事テストを終えると今まで以上に多くの実習が待っています。身につけなければならない知識や課題が増えていくかもしれませんが、その分努力をし、着実に自分の力としてどんどん吸収していきたいと思っています。



新潟市本町にある美味しいかき氷

歯学部生の活動

口腔生命福祉学科3年 桜井花菜

歯学部に入學してからあっという間に2年が経ち、今年の春から3年生になりました。この原稿を書かせていただいている現在はまだ7月に入ろうとしており、時間が経つのは早いなと実感しています。

新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年度はオンラインが中心の授業でしたが、幸い今年は感染対策をしながら大学に通って授業を受けることができています。昨年の今頃は、2年生になって専門科目やPBLが始まり、初めてのことで不安に思っていました。更に、非対面式の授業だったので友達にも会えず戸惑うことが多かったのを覚えています。

今年度はすべて例年通りとはいきませんが、対面形式で授業を受け、実習が出来るのがとても有難いです。特に歯科保健指導をする実習で幼稚園へ行ったことは本当に嬉しく思います。昨年度の3年生はコロナの影響で幼稚園へ行くことが出来ず、自宅で歯科保健指導の内容を考え、目の前に子供がいることを想定して歯科保健指導を行ったそうです。私自身、幼稚園での実習をとて楽しみにしていたので、今年も幼稚園実習は中止かなと残念に思っていたのですが、先生から幼稚園へ行って実習が出来ると聞いた時はとても嬉しかったです。しかし、コロナのために例年通りにならない部分もありました。

例えば、本格的に歯科保健指導の計画や準備を始める前に対象者把握として幼稚園に行くのですが、例年だとその時に園児と触れ合って、どれくらいのことが理解出来るのか、どのくらいの速さで話したら伝わるのかなどを把握し、指導内容を見直します。しかし今年度は感染対策のために園児と触れ合うことは出来ず、担任の先生から話を聞くことしか出来なかったもので、実際の園児がどのような感じなのかをイメージすることが難しかったです。各クラスでの指導も例年は歯みがきを実際にしながら指導が出来ていたのですが、それも今年は出来ませんでした。

今年度は出来ることが限られていて、指導内容を考えたり準備するのが大変でしたが、本番に向けてみんなで試行錯誤したり、先生方にアドバイスを頂いたりしながら準備を進めていきました。当日は、私たちの指導に対して園児が元気に反応し、楽しそうにしてくれたのがとても嬉しかったです。また、みんなで実習をやり遂げることが出来て、大きな達成感を得ることが出来ました。幼稚園実習が出来ていなければ、この達成感を得ることが出来なかったもので、コロナ渦ですが実習を受け入れてくださった幼稚園には感謝しています。

3年生は福祉の授業や様々な実習が始まり、進路についても少しずつ考えていかなければいけない時期です。更に後期からは臨床実習も始まり忙しくなるので、不安なことが多いです。しかし、今まで一緒に頑張ってきたみんなや、今年から一緒に勉強していく編入生と共に、残りの大学生活を精一杯過ごして、充実したものにしていきたいです。



保育園実習での記念撮影

歯学部生の活動

口腔生命福祉学科4年 川瀬 菜々香

月日の流れというものは非常に早いもので、あっという間に4年生となってしまいました。1年後には一体どこでどのような仕事をしているのか、不安と焦りそして少しの期待が入り混じるなか、日々の実習に明け暮れております。

4年生になってからの忙しさというものには、本当に本当に何度驚いても足りないくらいに驚きます。そして、毎日休まず実習に来て、遅くまで残ってポートフォリオを書き、並行して自らの就職活動に全力で取り組むクラスみんなの素晴らしさにも日々驚かされております。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、本当にきつい毎日です。みんなすごいです。真面目で一生懸命な、人間としてできた人達しかいない学年に入ってしまったのだなと改めて感じる毎日です。おかげでこんな私もなんとか頑張れています。

さて、今回は「歯学部生の活動」というタイトルの元、恐縮ながら筆をとらせていただいております。そこで、私がつい1週間前まで行っていた福祉実習について少々お話をさせてください。私は、入学当初から福祉に興味を持っていたため、福祉実習は心待ちにしていた大イベントと言っても過言ではありません。楽しみでワクワクしながら実習オリエンテーションに向かいました。しかし、経験してみてもわかった大変さが山のようにあります。児童自立支援施設にて実習をさせていただいたのですが、まず、スケジュールがきつい、体力的につらい、とにかくこれが第一の感想です。福祉の仕事というものを甘く見ていたと最初の1週間で痛感し、今後やっていけるのか不安に

なったことを覚えております。次に生まれた感想は、児童とのコミュニケーションは想像以上に難しいなということです。私自身人見知りが激しく、人からとっつかれにくい人間であることも関係しているのかもしれませんが、入所児童とのコミュニケーションの取り方については試行錯誤を繰り返しました。児童自立支援施設というものは、何らかの課題がある児童が、年齢相応の行動様式をわきまえた枠組みの中で、自らの課題を克服して成長していく場です。様々な入所背景を抱え、年齢もバラバラの子どもたちにどのように話しかけたらよいか。仲良しになるための場でもないしな。それぞれの性格や特性を踏まえたうえで関わった方が良いよな。などいろいろなことが頭の中を巡っており、はじめの2週間くらいはうまく打ち解けられずに終わってしまった気がします。しかし、考えすぎでした。そんなことはどうでもいいからとにかく子どもの側にいくこと、五感を使って子どもをよく観察するということ、これが何よりも重要であるということだんだんと分かるようになりました。後半はとにかく子どもといることを意識し、多くの話を聴いて、様々な活動を共にして、児童を知るということに尽力しました。子どもたちともだんだんと打ち解け、新しい一面が見えたりすることが非常にやりがいでした。毎日が新たな発見の中で、様々なことを考えさせられた有意義な実習でした。就職試験勉強とも並行して行っていたため、私の人生の中で最も忙しい1か月であると同時に、大きく自分を成長させることのできた1か月でした。

長くなってしまいましたが、大学生活も残すところ半年ちょっとです。残りの学生生活を今後ともクラスみんなと切磋琢磨しながら、悔いなく過ごしていきたいと思います。

留学生紹介

From Thailand to Japan:
Onward the Next Level

摂食嚥下リハビリテーション学分野 Titi Chotirungsan



Hello! My name is Titi Chotirungsan, you can call me “Ice”. I was born and raised in Thailand. After graduating with an undergraduate degree in 2015, I’ve then decided to work as an instructor in the Faculty of Dentistry of Thailand’s Naresuan University.

From my experience working over the past four years, I’ve found that Thailand’s elderly population has been growing rapidly, and dysphagia is one of their most common problems.

So, what led me here? Japan is a beautiful country with equally beautiful and friendly people. I found myself applying and eventually getting into a doctoral degree in the

Division of Dysphagia Rehabilitation, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences, which also happens to be well-recognized internationally and ranked as one of the top universities in Asia-Pacific. I sincerely hope to gain knowledge and experience in both clinical and research practices in this high-standard, world-caliber organization.

Unfortunately, although my doctoral course started in October 2020, I arrived in Niigata late because of COVID-19 circumstances. All travelers are being requested to self-quarantine for 14 days upon entering Japan. Even though this is a difficult time to enter Japan, Niigata University has been very supportive, and they made my whole

onboarding journey smooth and easy. I am really grateful and appreciated for that help.

When I finally got into Niigata in January 2021, there were many things that I needed to adapt to, such as the weather, culture, language, etc. My first weeks were the winter season, and there were heavy snowfall and strong winds that we never really experience in Thailand. The following season, which was Spring, was very impressive to me! It's truly special as I am a plant and flower lover. In Spring, animals wake up from winter sleep, trees are green again and flowers bloom beautifully. So, in my free time, I usually go out to capture these unforgettable moments through my camera and I get even more inspired living in Japan.

My life in Dysphagia Rehabilitation Divi-

sion has been very productive so far, all of our members are friendly and hardworking. Professor Dr. Makoto Inoue is a great teacher. He is very supportive, warm, accessible, enthusiastic, and caring. In my time, I've learned clinical practice for dysphagic patients and many techniques in the research field, especially surgical techniques in the animal model.

After pursuing Ph.D., I will go back and work at Naresuan University. I will apply the knowledge and experience that I've achieved from Niigata University in my research and academic environment, as well as community services to help improve the quality of life of Thai people and assist in solving the shortage of specialists in the field of Dysphagia Rehabilitation. I also aim to pass on my knowledge from Japan to future students and researchers of Thailand.



A Light Dawns on My Life in Niigata

組織再建口腔外科学分野 Nyein Nyein Chan

I am Nyein Nyein Chan from Myanmar, which is one of the Southeast Asia countries bordering India, Laos, Thailand, Bangladesh and China.

I graduated from University of Dental Medicine, Mandalay (UDMM) and I have served as a teaching staff at the department of Oral and Maxillofacial Surgery (UDMM) from 2014. Consequently, I noticed that the number of oral cancer patients in Myanmar has been increasing due to betel quid chewing, a well-known carcinogenic factor of oral cancer. During treatment, some of the patients had good results but some were not although their clinical conditions were seemed to be the same. I thought that the underlying molecular mechanism might be one of the reasons for different responses. However, the research facility has not been supported enough for molecular study in my university so far. Therefore, I was eager to study the molecular mechanism of oral cancer in other developed countries.

In early 2019, I applied to study in Niigata University. With the endeavor and great support of Ishida sensei, Kobayashi sensei kindly accepted me as a PhD student in his department, Reconstructive Surgery for Oral and Maxillofacial region. Finally, I became a PhD student of Niigata University in October 2019. My professor, all the teachers and the seniors warmly welcomed me. According to my research enthusiasm, Kobayashi sensei introduced me to Tanuma sensei, the head of Oral Pathology depart-

ment. Tanuma sensei kindly invited me to join his lab. Then, I moved to Oral Pathology department to begin my research journey.

The very first memory in Oral Pathology department is the kindness and supportive teachers and seniors. Moreover, I am impressed with their hard work and motivation on research. For me, although I came here for only a reason: to know more about the nature of cancer cells, I have poor knowledge in pathology and biological research. Everything was different from my previous experiences. Fortunately, my supervisor guided me to find my way. Cell culture, immortalized cell lines which I have never dreamed about. But it is very fascinating to study them. Although all are oral cancer cell lines, they have different potentials and nature like human beings. In every step, they gave me new information which attracted me to study more and keep on further step. Of course, my research journey has not been a smooth road. But I love each and every rock on my way and still going on.

Outside the university, the other respectable culture of Japanese people is loving plants and nature. At the end of winter, I can see many people both adults and young, grow plants not only flowers but also vegetables at their homes. Since growing plants and the smell of flowers always make me fresh, I am obliged to those who cultivate the plants and flowers. Moreover, I have been to Yahiko park in autumn

to enjoy the maple leaves and Hakusan park in spring for cherry blossom. Apart from the great beauty of maple leaves and cherry, what actually touch my mind is the protection and appreciation of Japanese people to nature and environment.

All in all, I can learn not only for the university knowledge but also for my life in Niigata. It is not enough for me to mention the positive impacts by having a chance to come to Japan.



Echigo Hillside Park Rose festival, 2021

The Precious Moments in My Life

歯周診断・再建学分野 Hnin Yu Lwin

My name is Hnin Yu Lwin. I came from Myanmar and we, Myanmar citizens, have no "Family name". We use only given name. Let me introduce about my country first. Myanmar, was known abroad as Burma, is located around 2717 miles away from Japan. It has a largely tropical climate with three seasons: Summer, Rainy and Winter Seasons. Although temperatures in Myanmar can vary from place to place, the climate is generally hot throughout the year. I haven't experienced snow in Myanmar. Thus, the climate and cultures are totally different from Japan. I was really worried whether I could adapt or not with new challenges in everything when I decided to study abroad in Japan.

But, these worries flew away since the first day of arrival to Niigata. The person I have first met in Japan is my Professor. He picked me up at the Niigata airport. That made me feel warmly welcomed. When I visited to my department, everyone I met greeted me with the warmest smiles. They all are really kind, helpful and generous. I also had a great dinner on the same day of arrival with my senior, tutor and Professor. That's why I felt secure, comfortable and kind-hearted since I have arrived to Niigata.

Japan is one of the leading nations in scientific research fields. The excellent accessibility, high quality of life standard and safety attracted me a great interest to study in Japan. Thus, I applied Japanese Government Monbukagakusho: MEXT Scholarship Program. When I was accept-

ed, I have chosen Periodontology which is my field of interest.

I have started to learn the protocols and laboratory procedures related with my doctoral research since October, 2019. Although everything was new for me, I had passed the difficulties under the kindly guidance and supervision of my tutor and supervisor. They create a supportive and stimulating environment which helps me believe in myself and focus on learning and improving my skills. I would like to express my special gratitude to Professor, supervisor, tutor and other members from our office for their encouragement, patience and support.

There was no COVID-19 crisis in my first few months in Japan, thus, I had a chance to visit to "Yahiko Park". I had enjoyed "Mojigari", the picturesque view of seasonal change that I haven't seen in Myanmar. Although there are usually many festivals according to seasons in Japan, I could not join these festivals since January, 2020. Because almost all of the festivals are canceled due to the effects of the corona virus pandemic. And also, I think we should refrain from travelling without important reasons and avoid the crowded areas for preventing the spread of COVID-19.

Thus, I could not travel around the Japan to enjoy beautiful nature and cultures of Japan in 2020. However, I have experienced and felt secure and impressive the great effort of Niigata University to prevent spread of infection with relevant notifica-

tions and guidelines regarding the control measures against COVID-19.

But, this year, 2021, I had enjoyed “Sakura Blossom” at Hakusan Park near Asahimachi Campus, Niigata University. It is the scenic and attracting view. I really would like to visit around the Japan after COVID-19 crisis. I hope I will be able to enjoy the na-

ture and cultures of Japan before I go back to Myanmar.

However, I will memorize every moment during the stay in Niigata because of great support of my department and Niigata University. And also, these moments are precious time in my life.



The first experience of the autumn scenery at Yahiko Park



The beautiful Sakura blossom at Hakusan Park in Niigata

医歯学軟式テニス部

軟式テニス部 歯学科3年 大西 雅人

こんにちは。医歯学軟式テニス部です。今年度は2名の1年生部員を迎え、現在部員11名で活動しています。歯学部生は少人数ではありますが、医学部の学生と共に活動しており総勢約70名の部員がいます。今年度で所属して3年目になります。この部活の良さを紹介していこうと思います。

私は過去、中学では野球部、高校では陸上部と、軟式テニスはおろからケットスポーツに本格的に取り組んだことはありませんでした。そんな私が軟式テニス部に入る1番の決め手となったのは先輩方の人柄の良さに尽きます。

大学に入学してどの部活動に所属するか決め兼ねていた私は、様々な部が行っている部活動体験に参加しました。その中でも一際心が惹かれたのが軟式テニス部です。まず驚いたのは、その部員の多さです。主将の号令で部員全員が集めた際に、50を超える部員が集結していた光景には圧倒されました。そして、その部員全員が私たち新入生に対して優しく歓迎ムードで接してくださいました。

私を含め半分以上の部員は大学から軟式テニスを始めた人たちばかりです。特に指導者がいるわけではなく、練習中に経験者が初心者の部員に教えている様子はとても心温まるものでした。初心者でも「うまくできた!」という気持ちになれると、そのスポーツの楽しさに気付いたり、モチベーションの向上に繋がったりとすぐに上達できるきっかけとなります。

その他、先輩方の話を聞いているとほとんどの部員が医学科や保健学科の方ばかりなのです。他の学部の友達を作ることが夢だった私は、ますますこの部活に魅了されました。私の同期は10名いますが、そのうち9名が医学部の学生たちです。

今ではかなり親睦が深まり、プライベートでも親交があります。

ここまでだと仲良しクラブで終わってしまいうのですが、大会ではいくつもの実績を残しています。過去3つの大会では団体戦ベスト4が2度と準優勝、個人戦ではベスト8やベスト4、3位のペアがいるなどかなりの強豪校です。限られた時間の中でよりよい練習ができるように日々取り組んでいます。

ここには書き切れないほど医歯学軟式テニス部には多くの良さがあります。これまで多くの先輩に恵まれ、後輩もできました。学部の垣根を越えてたくさんの知り合いができ、日々切磋琢磨できるチームメイトがいるおかげで充実した部活動ライフを送ることができています。また、大会などで県外に遠征に出かけた際にも歯学部生だけでなく、多くの学部の友人ができました。この部活のおかげで今の自分があると思っています。多くの人にこの部活の魅力が伝わるよう、来年以降も新1年生の勧誘を頑張っていきたいです。

最後になりましたが、来年度のオールデンタルでは個人戦・団体戦ともに優勝して来ますので、どうぞ皆さんの温かい応援をよろしくお願いします!



秋の北医体

歯学部軽音部

軽音楽部 武井 奏一郎

こんにちは。歯学部軽音部Liarsの部長の武井奏一郎と申します。

私たち軽音楽部は年に4回（今年度は6回を予定しています。）のライブを行っていて、そこに向けて日々練習を個々で不定期に行っています。現在の部員数は、男子10人、女子16人の合計26人が在籍しています。昨年は新型コロナウイルス感染症により部活動が停止状態となってしまったため、新歓活動を自粛せざるを得ない状況となってしまいました。しかし、今年の8月に制限付きの活動再開の許可が下りたため、新歓活動を行うことが出来ました。例年における新歓活動は、新1年生を集め、先輩による軽いギター演奏やビラ配りなどが行われたり、花見と呼ばれる1年生と上回生との懇親会のようなものが行われたり、楽器体験会と称して1年生に楽器を触ってもらったり、軽いライブを行ったりと、盛り沢山でした。今年は、感染対策案をふまえ、マスク着用、換気を徹底した状態での小規模による楽器体験会を数回行う、また歯学部学務係の方々に新1年生に向けた限定公開で各部活動の紹介ムービーを作る企画を行っていただいたので、紹介動画を作り、投稿させて頂く事で、1年生の皆さんに軽音部に興味を持ってもらおう！と活動を進めていました。動画には、部員数などの基本的事項から例年行われていた浜コンなどのイベント紹介を画像と音楽を添えた形で作りました。このような活動を行ったことにより、今年は8人の1年生が入部を決めてくれました。コロナウイルスが流行するこの時期に、沢山の1年生が入部してくれて、本当に感謝をしています。例年では、年に4回のライブ活動を行ってきました。ライブハウスでのライブや、スタジオで行われる小規模なライブ、医学部軽音部Medicsさんとの合同ライブなど様々なライブを行ってきました。しかし、新型コロナウイルスによる影響でライブハウスでの活動は自粛せ

ざるを得ない、新2年生（2020年度入学の1年生）の勧誘を行えなかったこと、上級生の卒業などの要因により、大規模なライブ活動を行うことが厳しいのが今の軽音部の現状です。しかし、そのような時であるからこそ部員が工夫してライブ活動を行う、ということが軽音楽部であり、新型コロナウイルスに対する反骨精神を抱くことこそが軽音楽部の矜持たるものと私は思っています。そこで、『ライブの規模を小規模にして、回数を増やそう』という結論に至りました。従って、当分は医学部の音楽鑑賞室による小規模なライブ、医学部軽音部さんとの合同ライブを行うことで感染対策に則った人数不足の状況でもライブ活動を行えるように方針を決定しました。以前に比較すると、部活動の規模が小さくなってしまいますが、新型コロナウイルスの感染が縮小するまでは、『耐え難きを耐え、忍びがたきを忍び』の考えで、でも、楽しむところは楽しんで活動していきたいと考えています。そして、遂に7月11日に音楽鑑賞室で1年生の新歓ライブを行うことが決定しました。少ない人数で行うからと言って、手を抜かず、感染対策も万全で、1年生の皆さんが『入ってよかったな』と思えるようなライブを行えるようにしたいと我々は考えています。



2019年定期コンサートでの集合写真

生体歯科補綴学分野

生体歯科補綴学分野教授 魚 島 勝 美

1. はじめに

早いもので、平成20年（2008年）6月に生体歯科補綴学分野が発足して以来13年が経ちました。発足当初には分野としての理想を掲げはしたものの、なかなか思うように仕事が進まずに苦しんだこともありましたが、多くのスタッフに助けられながら、現在では教員8名、医員4名、大学院8名、研修医1名を擁し、それなりの仕事ができる分野になったと思っております。歯学部の一分野としての使命である教育と研究、臨床系の分野としての使命である良質な歯科医療の提供を同時に行うことは決して簡単ではありません。教育にはとても多くの時間を使う必要がありますし、研究も臨床業務に中断を余儀なくされながら継続することは困難と言わざるを得ません。また、臨床そのものも、その質を担保しながら多くの患者さんの治療を行うことの難しさは、いくら経験を積んでも常に実感するところです。この度歯学部ニュースに分野紹介を執筆する機会をいただきましたので、このような状況の中で日々悪戦苦闘する分野スタッフを代表して当分野の現状をご紹介します。

2. 教育

私が常々言っていることは「後進の育成をおろそかにする集団はいつか必ず衰退する」ということです。したがって、当分野では歯学教育に関する世界の潮流を常に意識して講義・実習内容を常にアップデートし、学習者が将来に亘って生かせる知識と技能を身につけられるよう努力しています。我々が担当する主な教育分野は冠ブリッジ補綴学ですが、現在これ以外にも多くの講義・実習を担当しています。

（1）早期臨床実習Ⅰ

これは1年生に対して各診療科がすべて担当する実習で、開講期間に各自が一度ずつ我々の外来を見学しに来てもらいます。

（2）早期臨床実習Ⅱ

3年生の実習で、基礎系の分野は講義を担当し、臨床系の分野は外来見学や実習を行います。当分野では模型やシミュレーターを使った歯の形成実習を行っています。

（3）歯の形態学

歯の形態に関して総合的に学習するための科目で、講義には多くの分野に参画していただいています。また、歯の鑑別等に関しては解剖学を専門とする大島勇人教授にご担当していただき、当分野は歯型彫刻実習と一部の講義を担当しています。3年生対象です。

（4）歯冠修復学

当分野が担当するメインの講義・実習です。対象は3年生です。動画の視聴による事前学習、毎回の講義と実習の連動、頻回の小テストによる知識の確認、グループ討議、実習、解説とポートフォリオ記入による実習の振り返り、細かい評価など、従来の実習スタイルとは全く異なる方法によって知識と技能の定着を図っています。

（5）欠損補綴学Ⅱ

上記歯冠修復学に引き続いて4年生で行う、ブリッジを中心とした学習をする講義・実習です。この科目には実際の臨床例を題材にしたグループ討議を含み、先進的な技工所の見学もしています。

（6）総合模型実習

本学歯学部が世界に先駆けて取り入れた5年生の実習で、模型を使って患者さんに提供すべき総合的な治療を自分自身で立案し、模型でこれを実行する実習です。4年生までの実習と異なって、

インストラクターの指示通りに進める実習ではなく、それまでに得た知識と技能を総動員して自分で考えることが要求されます。模型を使った実習とこの直後に始まる臨床実習を繋ぐ役割をしています。

(7) ポリクリ

臨床系の分野は全て担当していますが、当分野では模型実習と臨床実習を繋ぐ、より臨床的な知識と技能の確認を目標として各種解説と実習を行っています。

(8) 臨床実習

主に臨床系6分野がインストラクターを担当しています。当分野は冠ブリッジに関する治療の際にインストラクターとして指導します。当分野では歯科医師である私たちすべての教員が参画していますので、それぞれが月に2回から5回担当することになります。また、臨床実習中には私の外来診療およびいずれかの分野スタッフの外来診療をそれぞれ最低1回見学してもらっています。学生自身の診療と私たちの診療との違いを目の当たりにすることに大きな意味があると思っています。

(9) 臨床推論

臨床実習中に行う演習です。実際の臨床症例を題材にしてグループ討議を行い、一口腔単位の治療の必要性を強く意識することを目標としています。臨床実習中に経験できる治療に限りがある現状では、これを補完する意味で非常に重要な演習です。

(10) その他

上記以外にも当分野のスタッフは各種講義に参画しています。歯科理工学、生涯にわたる歯と咬合(PBL)、口腔生命福祉学科の講義などです。

現在は1年生から6年生までの、当分野が担当するすべての科目において、統一電子ポートフォリオへの記入を求め、歯学部在籍中の学生自身の成長を振り返ることができるシステム構築に取り組んでいます。

3. 臨床

歯の治療の最終的な目標は食べる、話すといった機能を回復することです。補綴というのは冠、

取り外しのできる入れ歯、できない入れ歯(ブリッジ)、インプラントなどを患者さんに用いることですから、とても重要な治療の最終段階を担当していると言えます。冠を被せる、取り外しの入れ歯を作る前提として、土台となる、あるいは残っている自分の歯がしっかりしていることが重要なので、単に1本の歯に被せる、入れ歯を入れるだけではなく、患者さんの口の中全体を診て治療を進める必要があります。私たちは常に一口腔単位、一患者さん単位で治療計画を立て、適切に冠、ブリッジ、入れ歯、インプラントを用いることを心がけています。

また、特色ある専門外来として「金属アレルギー外来」と「歯根破折外来」を当診療科が開設しています。歯の治療には様々な材料を用いますが、これら材料が患者さんのアレルギー症状の原因になっていることもあります。我々は特に金属を中心としてアレルギーの検査・診断・治療を行っています。歯根破折外来では、従来抜歯が対応の基本であった「歯根が縦に割れてしまった歯」を一度抜歯して、接着剤による修復をしてから元の位置に植え直す治療に取り組んでいます。今までのところ200本以上の歯を治療していますが、3年経ってもおよそ8割の歯がしっかり機能しています。

4. 研究

現在以下のようなテーマで研究をしています。スタッフそれぞれが非常に活発に研究活動を継続しており、各種学会でも特別講演演者やシンポジストとして招聘されるばかりではなく、多くの学会賞もいただいています。また、科学研究費補助金も今年はすべての申請資格者が採択されており、それなりの成果は上がっていると考えております。

(1) デンタルインプラント関連の研究

デンタルインプラントの生存率は10年後でも90%以上であり、とても良い治療であると考えられる反面、色々なトラブルを抱えることも珍しくありません。インプラントと骨がしっかりと密着する現象、それを維持するための生体反応、問題が起きた時の対処法などに関する研究はまだまだ不十分です。我々はこれらに一生懸命取り組んで

います。

(2) 歯根膜関連の研究

歯根の表面には骨との間に歯根膜というクッションが存在しています。体の中でもとても特殊な組織で、その修復や維持は歯にとってとても重要です。ところが、その特殊性故にまだまだ分からないことが多く、基礎的・臨床的な手法を用いた研究を行っています。

(3) 歯科金属アレルギー関連の研究

歯科金属アレルギーについても分からないことが多い、むしろほとんど分かっていないという現状で、臨床データの収集や細胞レベルの基礎的な研究を行っています。

(4) 歯科理工学関連の研究

歯の治療には様々な材料を使いますので、より良い材料を開発するための研究を行っています。

(5) 歯根破折の治療に関する研究

前述のように、臨床的には成果が上がっているものの、より良い治療法を確立するためにはまだまだ研究が必要です。現在は各種材料を使って、歯根破折の治療に最も適した材料を探しています。

(6) 歯学教育に関する研究

歯学部での学習は生涯学習の第1歩であり、とても重要です。我々は学習方法による学習効果の違い等に関して研究を継続しています。

(7) その他の基礎的・臨床的研究

自家骨移植や人工骨の研究、細胞移植の研究なども行っています。

5. その他の活動

当分野では、仕事ばかりではなく遊びも充実させたいと思っています。このところのコロナ禍で自由になりませんが、過去には以下のような活



2018年夏のプログレスカンファレンス

動をしてきました。

(1) 医局旅行

コロナ禍前には毎年1泊2日でどこかに出かけ、医局員全員が過去1年間にやってきたこと、



2018年夏の遊び ラフティング

これからの1年間にやることをまとめて皆の前で発表し、その後遊びに行っていました。今は大学内での発表のみ1日限りで行っていますが、コロナが去ったら再開します。

(2) スキー合宿

冬には有志でスキー合宿に行っていました。



2018年冬 猪苗代にて

(3) 飲み会



どこかでやった何らかの飲み会 (2018年)

(4) その他



インドネシアでの学会の折のラフティング（2008年）
右端は本物のインドネシア人です。



日本補綴歯科学会にて（2012年）



現在の医局員

6. おわりに

現在当分野に所属する教員はその多くが分野発足当初から仕事を継続してくれています。それぞれが意義のある充実した教育、臨床、研究をしていることは、私にとっては非常にうれしいことでもあります。しかし一方で、できれば私の在任中に外の世界（他大学）に羽ばたいて欲しいと考えていたにも関わらず、月日が経つのは早いもので、13年経ってもそれが実現していないことは、私の不徳の致すところでもあります。教授と准教授以下の教員との年齢差が非常に大きい、つまり年齢的に中間層がないことは、若手への引き継ぎという観点で望ましいことかもしれませ

ん。しかし、逆にこのことがスタッフの自立を妨げたのかもしれないという懸念もあります。私の任期があと3年で、当分野が3年後にどうなっているかは分かりませんが、生物学的な視点を持った補綴歯科学という方向性を継ぐにしろ、全く違う方向に進むにしろ、補綴が歯科の臨床にとって重要なことには変わりありません。新潟大学歯学部補綴学分野でご活躍された過去の先生方が築いた伝統を、これまでの私が生かしかれたかどうかは甚だ自信がありません。しかし、今後当分野が歯学の発展に寄与できることを願いつつ、これからもスタッフ一丸となって一生懸命精進いたしますので、当分野に対する益々のご指導、ご鞭撻を賜れますよう、よろしくお願いいたします。

大学院紹介

組織再建口腔外科 羽 賀 健 太

組織再建口腔外科、羽賀健太です。「大学院へ行こう」というテーマを頂きましたので、大学院生活についてご紹介します。大学院への進学を考えている学生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私は今年の3月で大学院を修了しましたが、この4年を振り返ってみるととても濃密な時間を過ごすことができたと感じています。口腔再建外科では、1年目は教養科目とともに外来・病棟で口腔外科業務に従事しながら上級医の先生方とともに口腔外科領域の様々な疾患について経験していきます。私は経験した症例を学会発表する機会があり、準備を通じてより深く学ぶことができました。そして発表した症例を学会に論文投稿するチャレンジも経験し、ご指導して下さいました先生方のおかげで、口腔外科学会雑誌に掲載することができました。このように臨床的スキルとともに症例と深く向き合う大切さや方法論を学んだ1年目でした。

2年目からは臨床をしながら主に患者さんを対象とした研究を行う臨床研究と実験を中心とした基礎研究のどちらかを選択していきます。私は基礎研究に興味もあったため、生体組織再生工学分野の泉先生のもとで2年目がスタートしました。これまでの臨床とは異なり、昼夜を問わず研究に没頭することができ、基礎研究は全くの初心者であった私も先生方のご指導のもと、細胞培養や実験手技などを学びました。またテーマが口腔癌ということもあり口腔病理学分野の田沼先生のもとでもとても熱心なご指導をして頂きました。このように他分野の先生方とのコラボレーションにより、新しい発見や学びが多く日々の生活はとても刺激的でした。これまで国内外での学会発表を何

度も経験しましたが、学会発表も研究の醍醐味であったと感じています。また口腔再建外科では大学院のうちに口腔外科認定医を目指すこともでき、計画的に症例や学会発表などを準備することで受験資格を得ることが出来ます。私も3年次の冬に受験し、大学院のうちに口腔外科認定医を取得できました。そして4年次には研究の成果を国際誌に投稿するため、論文の執筆を行っていました。

もしかすると、大学院でかつ基礎研究をすると臨床が全くできなくなるのではと思う人もいますが、その中で自らがビジョンをもって行動することで臨床・研究のそれぞれで成果を残すことは十分可能であると思っています。自分の進路を考える際にはその分野を「自分が好きかどうか」と「自分に向いているかどうか」の2つの軸で考えるといいのかもしれませんが。卒業すぐにそれを見つけるのはとても難しいことだと思いますし、長い時間をかけてなんとなくわかるものなのかもしれません。大学院生活は非常にタフであることは事実ですが、大学院の間に広い視野で多くの経験をしてみて、自分が今後どういうことがしたいのかをじっくりと考える期間として大学院は有意義なものになると思います。



2018年10月15日撮影

大学院へ行こう

微生物感染症学分野 磯 野 俊 仁

微生物感染症学分野大学院2年の磯野俊仁です。今回『大学院へ行こう』というテーマで原稿依頼を頂きました。ここでは、私が大学院に進学した理由や大学院へ進学してからの生活について紹介します。

歯学部入学以前より研究に対して漠然とした興味があり、学部3年次に微生物感染症学分野を訪ねたことが研究を始めるきっかけでした。仮説を立て、実験し、考察を行うといったことが思いの外楽しく、主に小田准教授（当時）の指導のもと、毎日のように実験をしていました。そして学部6年次には、歯学部卒業後は大学院に進学し、基礎研究がしたいと考えていました。歯科医師という枠の中で将来が固まっていくことに違和感を抱いていたこともあり、進学先は歯学部の大学院に限らず、薬学部や医学部の大学院も候補として受験準備を進めていました。しかしながら、詳しい事情は記しませんが、最終的には新潟大学大学院医学総合研究科を選択し、微生物感染症学分野で学位研究のお世話になることになりました。

大学院に進学後は、研究センターの生活が始まりました。「植物由来抗菌成分による肺炎球菌性肺炎の治療効果」を最初の研究テーマとしてもらい、実験を始めました。マウス肺炎モデルの確立など、実験条件の検討から論文執筆という研究における一連の流れを経験したことで、学部学生時とは異なり、自身の研究についてより深く考えるようになりました。本格的な動物実験や英語論文の執筆は初めてであり、なかなかうまくいかずに頭

を抱えたこともありました。しかし、それらを乗り越えたことで、研究に必要な表現力や実験力が一歩成長したと思います。そして現在は肺炎球菌性肺炎において誘導される宿主由来の分子と肺炎重症化との関連について研究を進めています。

大学院に進学し、研究することが必ずしも正しい選択ではありません。歯科医院を開業する、もしくは歯科医院や市中病院で歯科治療を行うことで地域の歯科医療に携わることは、歯科医師として重要な社会貢献の一つです。しかし歯科に限らず医療の発展には、臨床上解決すべき問題点や疑問点を研究によって解明し、得られた成果を臨床に還元するという、研究と臨床の両者における双方向性が重要です。したがって研究を行うことは、目に見えやすい形ではありませんが、医療に貢献できる可能性があり、学部卒業後に大学院へと進学し、研究に携わることも進路の一つであると考えます。



実験室での一コマ

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 山 崎 恭 子

皆さんこんにちは。歯周診断・再建学分野の山崎恭子です。この度「大学院へ行こう」というテーマを頂きましたので、大学院での生活等ご紹介したいと思います。進路に悩んでいる学生や研修医の皆さんの助けになれば幸いです。

そもそも私が大学院への進学を考え始めたのは研修医の時でした。学生時から1口腔単位での治療計画を立案することの大切さは何度も教えられてきましたが、実際自分で患者さんを診る立場になったときにその難しさを改めて感じる事が多くありました。その時に何か軸となる専門性を身に着けることでその困難さを解決できるのではないかと考え、専門診療科での治療が学べることに魅力を感じ研修終了後も大学で学びたいと思いました。そして元々保存治療に興味があったため出身である新潟大学の歯周診断・再建学分野でお世話になることにしました。46期は大学院進学者がとても多く、進学への敷居は低かったように感じます。

実際に大学院へ入学してみると、毎日がめまぐるしく過ぎていきました。研究のことは何もわからず、ピペットを触るのも大学2年生の生化学実習以来でしたので最初は四苦八苦しながら研究と向き合う日々でした。しかしながら先生方がやさしく丁寧に指導してくださったお陰でなんとかこなしていくことができました。研究は細胞を培養するにしても実験動物を取り扱うにしても、思うように事が運ぶことは少なく我慢が続く時が多いのですが、自分たちの立てた仮説に合致するようなデータが得られた時の喜びは何事にも代えがたいです。また現在新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン開催となってしまっていますが、国内外の学会に参加し他大学の先生方と交流の機会

が持てたことも大学院での大きな収穫であったと思います。

ここまで研究の話をしてきましたが、大学を卒業したてのころは臨床の技術を磨くことで頭がいっぱいだと思います。歯周診断・再建学分野では定期的に医局会で症例報告を行っており、経験の豊富な先生方から若手までみな発表の機会があります。歯周外科手術後に長期に渡り良好なメンテナンスを継続した症例や全身疾患をもつ患者様への対応の工夫等、教科書を読むだけでは埋められない知識を豊富に学ぶことができるのも、大学院進学の大きなメリットではないでしょうか。

大学院への進学を考えた時、費用や4年という期間の長さに躊躇してしまうことがあるかもしれません。ですが、何か一つ自分の専門と呼べるものを得ることで、今後の歯科医師人生がより豊かなものになると思います。4年間は本当にあっという間に過ぎてしまうので、少しでも興味のある方はぜひチャレンジしてほしいと思います。



学位授与式後に同期と。筆者下段左端。
(写真撮影時のみマスクを外しました。)

学会受賞報告

Healthy Longevity Award-1st prize

AMED/NYAS Interstellar Initiative Healthy Longevity Award-1st prize

高度口腔機能教育研究センター 前川 知 樹

この度、医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業（Interstellar Initiative）において Healthy Longevity Award-1st prizeを受賞いたしましたのでご報告いたします。受賞課題名は「The correlation of ectopic calcification signatures in the ageing eye and cardiovascular system（加齢にともなう異所性石灰化の網膜と心臓血管系との相関）」です。Interstellar Initiativeは、次世代を担う日本の若手研究者が世界各国の若手研究者とネットワークを構築し、国際的かつ学際的な視点から医療分野の研究開発における革新的な新規シーズを創出することを目的として、日本医療研究開発機構（AMED）ニューヨーク科学アカデミー（NYAS）

が共同で実施しています。

本事業では、Healthy Longevity（健康長寿）に関連する研究について事前に選考を受けた世界各地からの若手研究者が国際的・学際的チームを編成し、新しい課題に関して取り組むことを目的としています。選考された研究者は、医学系のみならず工学系、理学系、コンピューターサイエンスや疫学など様々な専門分野をもち、発展的な研究が見込める組み合わせがマッチングされチームが組まれます。私は、コロンビアのアンデス大学 Ricardo Silva博士（脳神経血管薬理学）および国立シンガポール眼センターのAnna Tan博士（眼科学）とのチームとなりました。

本研究では、老化とともに血管や軟組織に認め



アワード（左）とチームメンバー（右）

られる異所性の石灰化に着目しました。これら石灰化は、失明の原因となる加齢性黄斑症や脳卒中、心不全の主な原因となっています。近年、網膜イメージング技術が開発され、詳細な網膜検査が可能となってきました。そこで、網膜と心血管系の石灰化および線維化に相関があれば、非侵襲的な網膜イメージングによる心血管系や他の組織の石灰化および線維化を評価することが可能となり、健康長寿のための先制医療となり得ることが考えられます。すでに、それぞれの共同研究先で臨床研究および基礎研究がスタートしています。

本来であれば2期にわたってニューヨーク・マンハッタンにありますNYAS本部でのワークショップおよびプレゼンテーションが予定されていましたが、新型コロナ肺炎の蔓延によりオンラ

インでの開催となりました。ネット環境が整わない地域からの参加者が多いうえ、時差のためにミーティング時間の調整が必要なことがオンライン会議の大変なところでした。3日間におよびシニアのメンター（日本および海外のPrincipal investigator）を含めた公式ミーティングやプロポーザルの準備等で徹夜が続く大変忙しい毎日でしたが、異なる分野の研究者たちのディスカッションはとても楽しく充実したものでした。その後、2021年2月に行われたPreliminaryデータや今後の研究の展開を含めた発表が高い評価を得ることができ、本受賞に至りました。今後は、企業との共同研究および臨床研究を推進していくためのマッチングに移行する予定です。



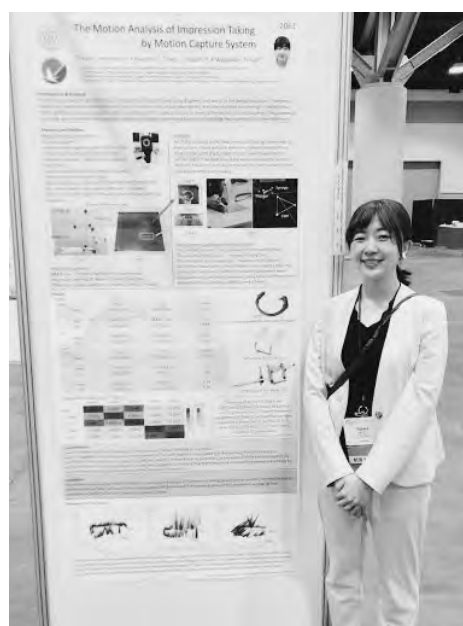
第12回 国際学会研究発表奨励賞 受賞報告

歯科臨床教育学分野 都 野 さやか

この度、「The Motion Analysis of Impression Taking by Motion Capture System」と題して97th General Session & Exhibition of the IADRにて行ったポスター口演が、日本歯科医学教育学会第12回国際学会研究発表奨励賞を受賞しましたので、ご報告させていただきます。

当分野では、歯科診療処置の定量的評価を目的に、モーションキャプチャーシステムを使用した診療動作解析を行ってきました。本演題では、シリコン印象材を使用した印象採得の評価システムの構築を目的に、実験用金属板に設定した窩洞に対する印象採得動作の計測・解析を行いました。その結果、今回想定したパラメータのうち、印象採得用シリンジを動かす速度は、印象採得の結果に影響を与える可能性があることが示唆されました。今後は、他パラメータに関するさらなる計測・解析や、より臨床に近い環境での計測を進め、臨床技術教育で有用となるような評価方法を検討できればと思っております。

最後になりますが、日々ご指導をいただいております藤井規孝教授、並びに共同研究者の皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



バンクーバーにて行われた97th IADRにて

第36回 歯科医学を中心とした総合的な研究を 推進する集い 優秀発表賞 受賞報告

高度口腔機能教育研究センター 生体組織再生工学分野 鈴木 絢 子



このたび、2021年3月に開催されました日本歯科医学会主催「第36回 歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」におきまして、発表演題が優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。

演題名は、「表面をマイクロパターン化した魚うろこコラーゲン製材のヒト上皮組織の欠損再建材としての利用可能性の検証」です。本研究では、歯工連携により魚うろこコラーゲン製足場材表面に50～200 μ mの上皮脚様マイクロパターンを付与し、足場材表面に口腔ケラチノ細胞を播種する“バイオミメティック”な移植可能な培養口腔粘膜の開発を目指しています。現在、in

vitroでは生体近似した構造が確認でき、マイクロパターンサイズを自在にオーダーできるようになりました。また、今回の集いの目的は互いの研究を促進するため、歯科医学を中心に異分野専門領域間で情報交換し、交流の輪を広げるという狙いがあります。そのため、本研究の課題や臨床応用を踏まえたうえで、足場材完成後の非侵襲的評価システムの構築、基底膜用構造付与による高機能化、口腔外組織への臨床応用の可能性や利用価値について発表および議論させて頂きました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたりご指導いただきました、泉健次教授、研究チームの皆様、共同演者の先生方に心より厚く御礼申し上げます。



153rd Annual meeting of Japanese Society of Conservative Dentistry: Excellent Poster Presentation Award report

Razi Saifullah Ibn Belal

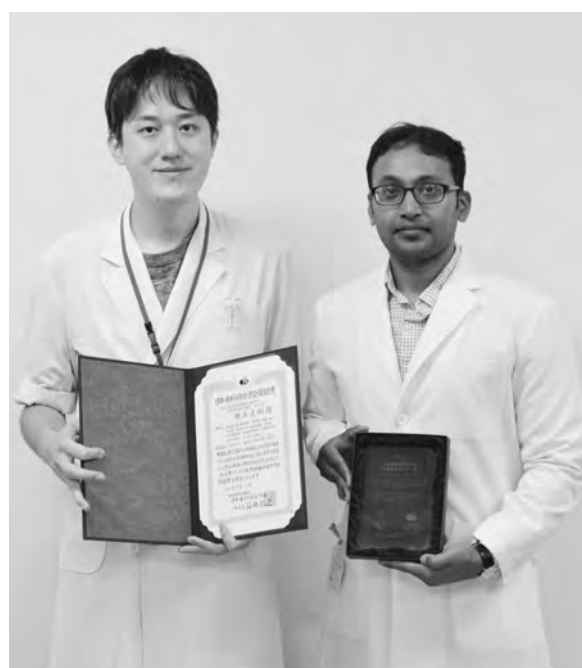
Department of Cariology, Operative Dentistry and Endodontics

On the 153rd annual meeting of Japanese Society of Conservative Dentistry held in November, 2020, I presented my research results and got an Excellent Poster Award.

The topic of the research was "Apatite forming ability of bioceramic based root canal sealers: *in vitro* and *in vivo*". In recent times, the use of bioceramic containing material has gained popularity in endodontics, as a result there is an influx of a variety of materials. Apatite formation is one of the main characteristics of the bioceramic materials through which biological advantages are elicited. Apatite formation helps to improve the success rate of endodontic treatment. However, there is a lack of information regarding the apatite forming ability (AFA) of newly developed materials under *in vivo* condition. We assessed the AFA of 3 different bioceramic based root canal sealers using *in vitro* and *in vivo* models. In the *in vivo* rat subcutaneous implantation model, only one sealer was able to produce apatite on the surface, whereas in the *in vitro* condition using SBF, all sealers had, similar response, formed apatite. This result was very interesting and showed the fact that even though they all are bioceramic, some may have different AFA. We are now assessing the AFA of these materials in a specific *in vitro* condi-

tion to find out an optimum condition that produces *in vivo* like results. We already have promising results from the next project and expect to share the outcome soon.

I would like to thank my parents and my wife for their inspiration. Academically the research would not have been possible without the guidance of my supervisors Assistant Professor Naoki Edanami, Professor Kunihiko Yoshiba and Professor Yuichiro Noiri. I extend my deepest respect and gratitude towards their immense support and patience throughout the research and encouraging me to take part in the excellent poster competition. Thank you.



日本歯周病学会 SUNSTAR Young Investigator Award 受賞報告

微生物感染症学分野 歯周診断・再建学分野 田 村 光

この度、第63回秋季日本歯周病学会学術大会において、SUNSTAR Young Investigator Awardを受賞致しましたのでご報告させていただきます。今回受賞した発表演題名は「エリスロマイシンによるDEL-1誘導を介した破骨細胞の制御」です。

本研究では、マクロライド系抗菌薬エリスロマイシンの歯周炎組織における抗炎症作用の機序を解析しました。

エリスロマイシンはDel-1を誘導することによって、破骨細胞の分化と吸収活性を抑制し、さらに骨芽細胞に対して分化と骨形成能を促進することが明らかとなりました。すなわちエリスロマイシンは歯周炎組織にDel-1を誘導し、歯周炎による炎症性骨破壊を抑制するとともに歯槽骨再生を促すことが示唆されました。この作用は新たな歯周病治療につながる可能性があると考えています。

ご指導いただきました前川知樹先生、多部田康一先生、前田健康先生、また寺尾豊先生はじめと

する微生物感染症学分野の先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



多部田教授（右）、筆者（左）。YIA記念品と。

最終選考優秀賞受賞報告

歯学部歯学科6年 野 口 雅 史

この度、日本補綴歯科学会主催の全国の歯学部生を対象とした学生技能コンペティション「第3回 JPS student clinical skills competition」におきまして、最終選考優秀賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。

課題は、CAD/CAM冠を想定した下顎左側第一小臼歯の支台歯形成でした。形成練習では、適切な形成量やテーパーになるように、形成した歯を一本一本分析し、先生方にご指導いただきながら練習を重ねました。また、形成時の姿勢やポジショニング、レストの位置なども確認し、目標とする支台歯に近づけるように意識しました。1本

の歯をここまで丁寧に突き詰めて形成したことがなかったため、支台歯形成の基本を習得する良い機会となりました。

このコンペティションへの参加を通して歯科治療で求められる技術の精巧さを改めて実感することができ、とても貴重な経験となりました。この経験を今後も活かし、臨床技能向上のため、より一層努力してまいりたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中ご指導していただきました魚島先生、江口先生をはじめとする先生方に心より感謝申し上げます。



ご指導いただいた魚島教授と江口先生と

新潟歯学会賞 受賞報告

口腔解剖学分野 目 黒 史 也

この度2020年度新潟歯学会賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。

発表演題は『Reptinは胎仔上皮におけるDNA損傷応答を介して器官形成を制御する』です。

本研究は、これまで主にガン研究のフィールドで機能解明が行われていたシャペロンタンパクの“Reptin”を上皮組織特異的にノックアウトしたマウス胎仔の表現型解析を通じて、上皮組織やその付属器官の発生について解析を行いました。本研究で最も興味深い点は、母体内で成長する胎仔には一見無関係に思えるDNA損傷が、胎生期の細胞内でも生じており、その修復機構が器官発生に極めて重要な役割を持つことを解明した点にあると思っています。これまでに歯胚等の口腔領域の器官発生とDNA修復応答について述べられた研究報告はありません。4年間という短い研究期間のなかでも、このような新しい知見を見いだせたことを大変嬉しく思います。

4年間の院生生活は楽しいだけの日々ではありませんでしたが、毎日試行錯誤を繰り返し、指導教官である大峯教授、及び佐伯教授とのディスカッションを繰り返した毎日は、これまでのどんな時間より充実した日々だったと思います。この4年の間には歯周診断・再建学分野の先生方、歯科薬理学の先生方、口腔解剖学の先生方、同期や院生の先輩方など、多くの方々のお力添えを頂き

ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最後に、時に苦しい院生生活の中でも、変わらず私を支え続けてくれた妻と息子にも、心より感謝しています。

今後は上記のテーマを更に深く掘り下げながら、より一層研究に励んで行く所存です。

今後ともご指導ご鞭撻の程宜しく御願い致します。



新潟歯学会賞授賞式にて

2020年度新潟歯学会奨励賞受賞報告

微生物感染症学分野 日 吉 巧

この度、2020年度新潟歯学会において、歯学会奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「好中球エラスターゼによる歯周炎重症化メカニズム解析と新規治療法への応用」です。

本研究では、好中球が有するタンパク質分解酵素エラスターゼが、細胞間接着分子を分解し、ヒト歯肉細胞層の剥離を誘導することを明らかにしました。また、歯周炎を誘導したマウス歯肉中のエラスターゼ活性は増加し、同マウスにエラス

ターゼ阻害剤を投与すると、歯槽骨吸収量が抑制されました。このことから、エラスターゼの歯肉上皮バリア傷害作用が歯周炎の重症化に関与し、エラスターゼ阻害剤が新規歯周炎治療薬となる可能性が示唆されました。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました土門久哲先生、前川知樹先生、多部田康一教授、寺尾豊教授をはじめ、研究にご協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。



ご指導くださった土門先生（左）と

コロナ禍での学生ケアなどについて

歯学部学生支援担当 口腔生理学分野 山 村 健 介

一昨年12月に中国で報告され、翌年1月に日本で初の感染者が報告された新型コロナウイルスは世界的な大流行を引き起こし、私たちの生活を一変させました。新潟大学でも3月に予定されていた対面での卒業式や祝賀会、4月の入学式や歯学部主催の新入生研修が中止となりました。授業歴の変更や対面形式の授業の中止も4月になってから決定され、私たち教員も非対面形式の授業準備に右往左往することとなりました。その後マスクでもコロナ禍の中で苦境に陥る大学生の話題が頻繁に取り上げられ、ご子息の状況を案じておられた保護者の方々も多かったと思います。

あれから一年あまりが過ぎ、いまだ感染の収束には至っていない状況ですが、新しい生活様式も浸透し、全く先の見えない状況だった一年前と比べればポストコロナのイメージもわきやすくなった今、歯学部で学生支援を担当している教員の一人としてこの一年を振り返ってみたいと思います。歯学部ニュース編集委員会からは「学生ケア」と題しての執筆を依頼されたのですが、歯学部ではコロナに関連した学生ケアが必要とされた事例がほとんど生じなかったため、それ以外の内容についても私が経験したことを記したいと思います。

1. 学生支援・学生ケア

非常事態と言える一年を過ごした今、まず思うのは歯学部の学生さんと保護者の方々、そして授業を担当された先生方の素晴らしさです。その結果、コロナ関連で私が学生さんのケアに追われるようなことはありませんでした。

そのようなありがたい状況となった最大の要因が学生さんです。三密になるようなイベントへの

参加、県外への旅行や帰省に伴う他人との交流、仲間内での食事や飲み会などで感染し、時にはそのような学生がクラスターの発端となる事例が全国的には報告されていますが、現時点では歯学部での感染は学生、教職員含めてゼロです。全学（新潟大学）や歯学部の学務係を介して様々な注意事項の伝達がなされ、生活の制限も課せられましたが、それに対応して歯学部の学生さんが節度ある生活を送ってくれたことが大きかったと思います。アルバイト収入の減少や他者との交流機会の減少に伴う孤独感、経験のない非対面型の授業に対する対応など、この一年ストレスを全く感じることなく過ごすことができた学生さんはいなかったと思うのですが、そのことが原因で退学あるいは休学した学生さんは一人もいませんでした。学内に出入りできるようになったあとに、私のところに悩み相談に来た学生さんが数名いましたが、それぞれに悩みを抱えながらも、「皆同じ状況だから今は耐えなくてはならない」と前向きに現状をとらえ、ごく一般的なアドバイスを送っただけで、現在も無事に学生生活を送っています。学生さんそれぞれの自律性、私の知らないところで学生さんを支えてくださった保護者の皆様、そして学生さんの相談に対応し、アドバイスを送ってくださった私以外の教職員に感謝しています。そして忘れてはならないのが、学生さん相互の支え合いです。私が常々感じていることですが、学生さんの悩みの解決にもっとも寄与するのは、普段の学生生活を共にしている同級生や先輩からのアドバイスや様々な援助です。これはコロナ禍でも同じであったように思います。学生支援担当の教員が介入せずとも、学生さん同士で様々な悩みが解決されていたことを学生さんから聞いて

ていますし、私自身も実感しています。そのような人間関係が歯学部 of 学生さんの中で構築されていることは私にとってはとてもありがたいことですし、学生さんは誇りに思っていると思います。

このような歯学部 of 学生さんの人間関係を構築する上で私自身が重要だと思っているのが、中止を余儀なくされた歯学部主催の新入生研修です。この研修会は新生全員と学部長をはじめとする歯学部執行部の教員、学務委員会や学生支援委員会に属する教員、その年の新任教員など多くの教職員が一堂に会し、歯学部 of オリエンテーションやグループに分かれた共同作業が行われます。終了後には先輩学生によるクラブ活動紹介も行われます。この会が終わると新生同士、新生と先輩学生、新生と教員の距離が一気に縮まります。この会を経ることなくコロナ禍で半年の学生生活を過ごした新生が非常に心配でしたが、ようやく昨年9月30日に歯学部1年生を対象にした対面でのオリエンテーションが開催され、ほぼ全ての新生と顔を合わせる事ができました。オリエンテーションに先立って行われたアンケートによると「同級生の顔と名前を半分も知らない」「先輩から話を聞く機会が欲しい」のようなクラス内、あるいは先輩学生との人間関係の構築に関する悩みが大多数を占めていました。オリエンテーションでは、企画の中心となった小野学務委員長による「写真で見る歯学部の専門教育」、臨床実習を総括する藤井教授による「患者さんから学ぶ臨床実習」、学生支援担当として私から「クラスの仲間をもっと知ろう」と題した説明を行った後、先輩学生によるクラブ紹介と学務係による履修相談が行われました。解散の際に「同級生や先生方の顔を見ることができて嬉しかった」と言ってくれた学生さんがいたことがとても嬉しかったことが思い出されます。彼らは現在2年生となり、私が担当する授業を元気に(?)受講しており、ホッとしています。

2. 学生教育

このテーマについては他の先生が詳説されると思いますので、簡単に述べるだけにしたいと思います。私が思うのは、新潟大学歯学部は全国の歯

科大学の中でコロナ禍による学生教育へのダメージを最小限にとどめた大学の一つであろう、ということです。臨床実習を総括される藤井教授をはじめとする臨床実習に関わる教員、全ての授業に関わる教員の努力と創意工夫の賜だと思いますが、それを可能にしたのは非常事態を感染者ゼロで乗り切った個々の学生さんの自律性であることは強調しておきたいと思います。そのおかげで完全非対面教育が続く学部もある中、歯学部では「必要に応じての対面授業」をいち早く再開することができました。そのため「非対面授業を原因とする学習の遅れ」についての悩み相談を私が受けることはありませんでした。

教育を提供する側として私自身は、非対面授業のうち「資料配付・課題提出型」「Zoomを使ったリアルタイムオンライン型」「動画配信によるオンデマンド型」を経験し、現在は対面型の授業も再開しています。それぞれにメリットとデメリットがあり、学生さんによって好む(あるいは教育効果が高い?)授業形式が異なることが理解できました。現時点では、教員や他の学生と生で意見を交わすことができる対面授業と工夫を凝らした非対面授業をうまく併用することが教育の質を高めるのではないかというイメージを持っています。授業のあり方を再検討する機会を与えてくれたという点において、コロナ禍は私にとって良い学びの機会を与えてくれた気がします。

3. 学生の課外活動

令和2年度に行われるはずだった第52回全日本歯科学学生総合体育大会は新潟大学歯学部が事務主管でした。この大会は運動部に所属する学生さんにとって、日頃の練習の成果を発揮する場であると同時に、他大学歯学部 of 学生さんと交流し親交を深める貴重な機会です。私自身も運営に関わった関係で、新潟大学歯学部 of 多くの学生さん(特に現5年生、6年生)が忙しい中、大会準備に多くの時間と労力を割いてきたことを知っています。コロナ禍による大会中止は不可避ではありましたが、学生さんの無念を思うとやりきれない気持ちですし、中止の決断に快く同意して、事後処理に奔走してくれた学生さんに感謝しています。

現在もクラブ活動は厳しい制限の中行われていますが、一日も早く、コロナ禍が収束し、通常の活動が再開されることを願っています。

以上まとまりのない文章となりましたが、歯学部ニュースを読んでもくださる方向けに、この一年の私の経験を報告いたします。



歯学科臨床実習の対応

歯科臨床教育学分野／歯科総合診療科 藤 井 規 孝

歯学科では5年次10月から6年次10月までの1年間、医歯学総合病院歯科外来において学生が担当医の一人として患者さんの治療を担当し、診療に参加する臨床実習を行っています。このため、令和2年度は少なからず新型コロナウイルス感染症拡大対策の影響を受けました。ご存じの通り、この新興感染症については未だに深刻で予断を許さない状況が続いていますが、現在、新潟大学医歯学総合病院歯科・歯学部では患者さんはもちろん、歯科に関係する病院スタッフや臨床実習に参加する学生の安全に最大限の注意を払って診療・実習を継続しています。歯学科の臨床実習については、本誌にこれまでに何度かご報告申し上げてきましたが、まずは改めて歯学科臨床実習の概要を説明いたします。

歯学科臨床実習について

新潟大学歯学部歯学科のディプロマポリシー（卒業認定・学士授与の方針）の人材育成目標には、「変化の激しい現代社会のなかで患者の多様な価値観を受け入れ、質の高い医療を提供するために新たな諸課題に関係者と適切に連携しながら問題解決を図って行く能力を備え、全人的医療を実践できる高い歯科臨床能力を有する人材を育成する」ことが掲げられています。また、プログラムの到達目標（目標とする学修成果）として、①知識・理解（歯科医学に留まらずグローバル世界における経済・社会・生物学的な相互関係、自然や人間社会・文化などを含む）、②当該分野固有の能力（歯科医療に必要な基本的な能力）、③汎用的能力（情報収集、問題解決立案に関する能力、周囲と協力する能力）、④態度・姿勢（倫理・道徳・科学的な意思決定、個性の尊重、公益優先）が提示されており、②には歯科医療において適切な感染予防対策を行うこと、歯科医療において安

全を確保することが含まれています。歯学科の最終学年に行われる臨床実習は、これらを診療の現場で確認することを目的のひとつとしています。臨床実習を行う学生は、指導教員の下、医歯学総合病院歯科に勤務する歯科医師が行う業務とほぼ同じ内容で実習を行い、担当した患者さんによってそれぞれに異なる治療のケースを学修します。さらには、各専門診療科における分散実習（高度・特殊な治療の見学および部分的な実践）や紹介状を持たずに本院歯科を初診される方への医療面接（予診）、他の学生の診療介助などを行っており、歯科治療の全容を理解します。ここに令和2年度から導入された全国共用試験（Post-CCPX）や歯学部卒業・国家試験合格後に行う歯科医師臨床研修の準備（6年次6月以降）などが加わるため、その忙しさは容易にご想像願えることと思います。学生にとっては苦勞することが多いかもしれませんが、狭小な口腔内で精密作業を行う歯科治療を現場で学ぶことには重要な意味があり、次のステップとなる歯科医師臨床研修に進む際に大きな自信になることは間違いありません。現在、文科省、厚労省は歯科医師の育成につなぎ目をなくすことを目指して施策を進めており、新潟大学歯学部・医歯学総合病院歯科ではそれに準じて歯学科臨床実習、歯科医師臨床研修の体制整備を図っています。

医歯学総合病院歯科における感染拡大対策措置

令和2年4月、国内および県内での感染者数の動向に鑑み、医歯学総合病院歯科では緊急を要する処置を除き診療を制限することを決め、4月下旬から5月末までの間、本院を紹介された新患の方、急患の方以外の通常の予約診療は一時停止いたしました。その後、6月から曜日毎に診療できる歯科用チェアー（ユニット）を定め、診療する

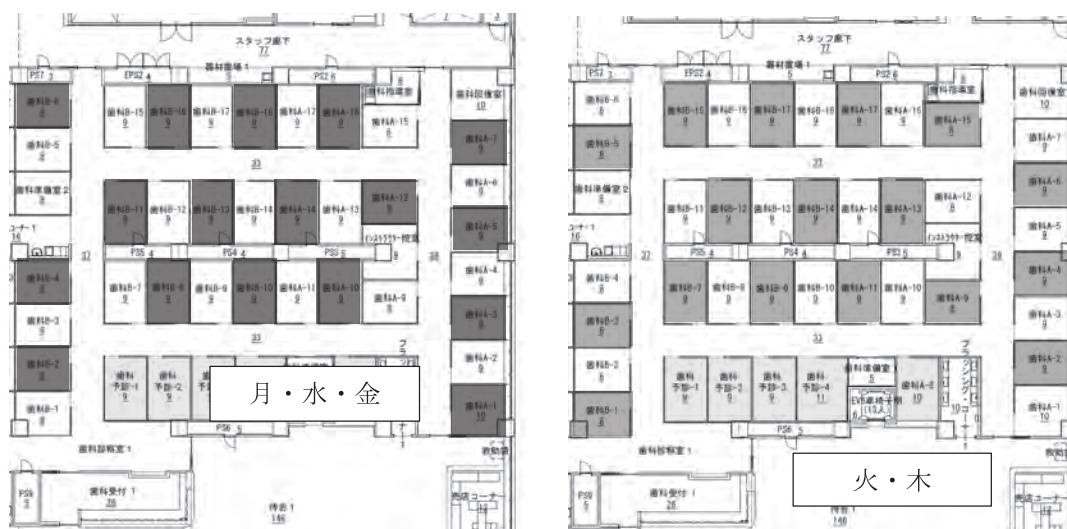


図1 令和2年6月の診療ユニット（臨床実習・臨床研修・歯科総合診療科診療スペース）
月水金は■、火木は■が使用可、□は新患に対する医療面接スペース

ユニットの間を空ける対策を行って診療を再開しました（図1）。6月に大きな感染拡大がみられなかったため、7月より診療ユニットの制限を解除して診療を再開し、現在に至っています。この間、歯学科臨床実習も医歯学総合病院歯科同様の対応を行い、外来での実習を行うことができない学生はレポート作成、様々な技工物の製作などに時間を充てていました。

医歯学総合病院では感染対策作業部会での検討を基に独自に往来を禁止する指定地域を定め、飛沫を伴う治療を行う歯科では受診前の2週間以内に指定地域への移動があった方の治療は控える（予約を取り直す）こととしました。また、学生を含む診療スタッフや院内での交叉感染を防止するために、来院された患者さんに対するスクリーニング（問診や検温）を徹底し、病院HPや玄関に注意文書を掲示して理解を求めました。さらに、歯科治療を行うスタッフには、通常のマスクや手袋に加えて必ず目の保護具（アイガード）、帽子、エプロン（PPE=Personal Protective Equipment：個人防護具）を装着するというルールを設けました。医歯学総合病院に勤務する医療スタッフ全員には、日常生活においても感染対策を徹底した上で毎日の検温や三密を避ける行動が求められており、現在も継続していますが、これらすべては臨床実習を行う学生も例外ではありません。

令和2年度歯学科臨床実習

結果的に令和2年度の臨床実習（歯学科51期生）において学生が診療に参加することができた日数は例年の約73%となったため、修了判定は文科省、新潟大学の方針に従って歯学部教授会で検討した令和2年度用の内容で行われ、全員の修了が認められました。歯科外来での診療が制限されていた期間、各診療科ではレポート課題を作成する、模型実習を行う等の代替を用意しましたが、指導教員にとっても想定外のことであったため十分な準備ができていたわけではありませんでした。しかし、学生もそれぞれに工夫して臨床実習の再開後、さらにはその先に備えるために時間を使ってくれているように思います。診療を制限したことにより、医歯学総合病院歯科に通院なさっている多くの患者さん同様、臨床実習にご協力くださっている患者さんにもご迷惑をおかけしましたが、診療制限開始・緩和のいずれに際しても患者さんから苦情等の訴えはなく、すべての方が臨床実習へのご協力を継続してくださいました。当時、新型コロナウイルス感染症に関しては不明な部分が多く、若年者は感染しても発症しづらいということが報道されたこともありましたが、そのため、一部の患者さんより学生さんの近くに行くのは避けたいとの訴えがあったことは無理もないことと思います。しかし、現在ではほぼ以前と同様に臨床実習が進んでいます。これは、すべての学

生が担当医の一人として診療に加わることの責任や医療人としての自覚、プロフェッショナリズムを持って患者さんに接していたことの表れと考えています。

診療参加型臨床実習を継続するために

令和3年1月、国内において最も深刻な状況下の一つに数えられる大阪府の吉村洋文知事が「コロナウイルスは口の中、唾液に多く含まれている。なのでマスクが有効だし、飲食の場も指摘される。一方で利用者側がマスクができない環境に歯科医院がある。大阪には5500もの歯科医院があるが、クラスター発生はゼロ。感染対策の賜物と思うが、何かある。何か？専門家には、是非分析してもらいたい。」とツイッターに呟っていたそうです。先にも書きましたが、歯科治療は切削片や唾液の飛沫を伴うことが多く、患者さんの歯肉から出血することも珍しくないため、歯科医師や歯科衛生士は常に感染のリスクと背中合わせで仕事をしていると考えることができます。歯科に限らず、医療従事者には標準予防策（SP：Standard Precaution）の徹底が求められます。自分の安全はもちろん、医療従事者が感染症を媒介するようなことはあってはならないためですが、すでに一般化している衛生的手洗い、アルコールによる手指消毒をはじめ、唾液や血液など患者さんの体液との直接的な接触を避けることは臨床実習中の学生も常識的に理解しています。吉村府知事のつぶやきは、臨床実習を通じてディプロマポリシーに提示した歯科医療における感染対策、安全確保を実践してきた本学学生にとっては当然と受け止められたことでしょうか、発言力のある方のこのようなご意見に改めて何かを感じているはずだと思います。

これまでに誰も経験したことのないこのような状況下では、臨床実習を行うことに不安を感じる学生がいてもおかしくはありません。しかし、歯

科医療の安全は術者が気をつけることによって保たれることを実際に確認する機会になっているとも考えられます（今回、他大学の臨床実習の現場を担当する先生と何度か情報交換を行いました。皆一様にこのことを指摘していました）。歯科医師に求められる技術には現場で苦勞しなければ身につかない多くのことがあると思います。現代版ヒポクラテスの誓いと例えられる「新ミレニアムにおける医のプロフェッショナリズム」（すでに少し古くなってしまいましたがこれが最新のもののようです）では、プロフェッショナルとしての一連の責務として10の項目があげられていますが、正直であること、他人の情報を守秘すること、互いに敬意を払い周囲と良好な関係を築くこと、科学的根拠に興味を持つこと、など医師あるいは歯科医師の免許を取得する前に実践することができるものが多いように思います。プロフェッショナリズムを理解していなければプロフェッショナルな行動をとることはできない、という文章を目にしたこともあります。文部科学省や厚生労働省が各歯科大学・歯学部診療参加型の充実を求め続けている理由の一つはここにあると考えられます。

今回、歯学科臨床実習の責任者として私も様々なことを考え、初めての経験をしましたが、本学歯学科の診療参加型臨床実習は歯学部や病院の多くの方々に守られ、たくさんの患者さんのご協力に支えられていることを改めて痛感しました。同時に、このような実習には真摯に歯科医学・歯科医療を学ぶ姿勢を備えた学生と親身に指導に当たる教員がいてこそ、真価を発揮することを再確認しました。まだまだ予断を許さない状況が続いていますが、一日も早い収束を願うと共に本学歯学科臨床実習のますますの充実・発展に尽力したいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

たくさんの笑顔に出会えた1時間

口腔生命福祉学科1年生担任 中 村 健

5月28日に開催した「口腔生命福祉学科1年生交流会（以下、「交流会」という）」について報告します。

新しく始まる学生生活…、たくさんの出会い…、新しい環境での暮らし…、小さな不安と大きな期待を胸に、入学した新1年生たち。本来なら、広いキャンパスを駆け回り、学食のメニューに目移りし、部活動やサークルの勧誘を受け、履修選択に悩み、アルバイトを探し、そして学び、たくさんの仲間たちと親睦を深めながら、学生生活を謳歌する、そんな当たり前が、コロナ禍で当たり前ではなくなっていました。

環境の大きな変化に加え、遠隔授業、外出自粛、移動制限、活動制限、人とのつながりにくさなど、コロナ禍での生活は多くのストレスを生みだし、孤立や孤独につながる怖さもあります。このような学生生活を余儀なくされた学生に、情報交換とつながり構築を目的とし、さらにメンタルケアの観点から、交流の場が必要と考え企画しました。

自由参加とし、18名の学生から参加いただきました。

なお、開催にあたり手指消毒、マスク着用、咳

エチケット、室内換気など新型コロナウイルス感染症対策を徹底しました。

葭原明弘学科長の挨拶で開会し、学科の専任教員が一人ずつ自己紹介を行いました。

学生同士の交流の時間では、4人から5人の小グループに分かれました。初対面同士の学生も多いため、2分間自己紹介およびアイスブレイクで緊張を解きほぐしながら楽しい雰囲気でおしゃべりを楽しんでもらいました。続いて、グループメンバー1人1人を紹介するフリップボード作りに挑戦しました。自己紹介で得た情報だけでなく、メンバーの趣味・特技・好きなモノ・部活・サークルなどをインテーク面接しながら聞き取りし、画用紙へ書き込んでいきました。出身地の話に驚き、好きなタレントや趣味の話に目を輝かせて盛り上がる、そんな光景が各グループで見られました。真剣に、楽しみながら作成に取り組み、イラストも加えるなどして色とりどりのフリップボードが完成しました。

フリップボードを手にして、教室から歯学部中庭へ移動し、最後は参加者全員で記念撮影を行い、閉会となりました。



マスクを外して集合写真撮影

交流会後、参加者にアンケート調査を実施しました。

「交流会で情報交換ができた」は89%が「そう思う・ややそう思う」と回答しました。「つながりを作ることができた」は83%が「そう思う・ややそう思う」と回答しました。「学生生活に不安がある」は交流会参加前は50%が「ややそう思う」と回答しましたが、交流会参加後は22%へ減少しました（前後とも「そう思う」と回答した者はいない）。「次回交流会がある場合はまた参加したい」は全員が「はい」と回答しました。

自由記述では「話したことがない人と話すこと

ができて良かった」という感想が最も多く、「楽しかった」「あっという間だった」「参加して良かった」と肯定的な感想を多くいただきました。「もう少し早くやってほしかった」「他のグループの人とも話をしてみたい」という貴重な意見もあり、次回や来年度の改善点をいただくことができました。

アンケート結果から、交流会開催の目的はおおむね達成できたと考えています。

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せない状況ですが、引き続き交流会開催など、学生同士および学生と教員の関係をつなぐ取り組みを続けていきたいと思っています。



アイスブレイクの様子



フリップボード作成中

教授に就任して

教授就任のご挨拶

口腔生命福祉学講座 口腔保健学分野
濃 野 要



令和3年4月1日より口腔生命福祉学講座口腔保健学分野を担当することになりました濃野要です。出身は新潟県上越市ですが、父の転勤により4歳から新潟市に住むことになりました。

小学校は鏡淵小学校に通い歯学部近くで遊んでいました。まだ路面電車が走っており電車を追いかけてながら白山駅前通りを走ったり、白山公園の池に落ちたりした記憶があります。中学校、高校は上越市に戻りましたが、大学はまた新潟に帰ってきました。それから26年間新潟大学歯学部にお世話になっています。

学部卒業後は大学院生として予防歯科学分野に入局しました。当時はまだ研修医制度もなく卒業後すぐに宮崎秀夫先生のもとで勉強をさせていただきました。宮崎先生が赴任され5年が経った頃で、新潟高齢者調査が始まっておりましたが、予防歯科は「フッ素」のイメージが残っていたように記憶しています。学位研究では佐久間汐子先生の下でそのフッ化物に関わる研究を行いました。う蝕および歯のフッ素症の有病状況とフッ化物摂取量を同一生活地区内かつ利用する水道水フッ化物濃度が異なる地域での調査で、歯科において最も有名な公衆衛生のひとつであるフッ化物応用に係る調査にも関わらず、世界で初の調査でした。このときにご一緒いただいた学内外の先生方と今でも仕事をしていることを考えると、素晴らしい機会をいただいたのだと改めて感謝しています。また、この研究の延長としてイギリスのNewcastle大学に留学をさせていただきました。

私が所属した研究室はイギリス（本人たちはヨーロッパ全体と言っていましたが）でのフッ化物の応用および栄養学的アプローチを行う中心的チームで、スーパーバイザーである歯科医師のAnne先生と栄養士のVida先生のもとでフッ化物摂取に関する多国間共同プロジェクトに参加いたしました。日本においてはフッ化物応用によるう蝕予防は当たり前で、安全に応用のできる確立された方法であると考えていましたが、他の国では当たり前ではないことも多く、安全が確立されていない中での応用であることに驚きました。また、フッ化物洗口は日本がどの国よりも成果を上げており、その代表として佐久間先生の名前を同室のスタッフ全員（フッ化物応用研究班以外も）が知っていたことに感動した覚えがあります。昨年2020年はそのフッ化物洗口が弥彦地域で開始されてから50年の節目の年であり、幸いにも開始当時にプログラムに参加していた方々を対象とした長期にわたるう蝕予防効果の評価に携わることができました。その成果については後日厚生労働省より発表があると思いますので、覚えておられればご覧ください。

また、宮崎先生のもとでは新潟高齢者調査に参加しました。高齢期における口腔と全身の関連を明らかにすることを目的とした疫学調査です。詳細についてはこの歯学部ニュースでも過去に紹介があるため書くことはしませんが、何より人を対象としたフィールド調査の難しさと楽しさを勉強することができました。宮崎先生は寡黙で気楽に何でも聞けるという方ではありませんでしたが、この調査では研究姿勢や考え方などが（行動や背中）雄弁に語られ、私にとって公私にわたる転換点となったことは間違いありません。現在も調査を継続しており、今後の目的は社会の喫緊の問題である超高齢社会において健康で自立した超高齢者のための口腔の意義を明らかにしていくことであると考えています。

そして、この超高齢社会のニーズに応えるべく、口腔保健と福祉に関する深い理解を持った人材の育成のために設立された口腔生命福祉学科を担当することとなりました。2004年の設立当初よりこの学科を支えてこられました先生方の活躍はこれまで至る所で目にしておりましたが、実際に数か月と一緒にすると丁寧かつ親身な教育に改めて驚きを覚え、身の引き締まる思いであります。超高齢社会における地域保健・福祉では課題も多岐にわたり、一面的な知識で解決することは難しく、他職種と連携を行うことは必須となります。そこで活躍する人材には問題の本質を見つける力と、広い知識と適材適所の判断を以てそれを解決する統合力が必要であると言います。2つの分野を学ぶ口腔生命福祉学科の学生は複数の分野・知識を統合する素地を備えて卒業していくと期待しております。そして私自身はその人材育成のために、自立超高齢者の口腔に対する研究や新たな地域保健プログラムの開発を軸に、異なる専門を持つ教員の方々と保健・福祉の教育に邁進したいと考えております。



留学先の指導医、同僚と

この原稿を書いている令和3年はまだ新型コロナ禍中にあります。講義の中で、WHOの提言するこれからの公衆衛生的問題（2019年）として、ワクチンの忌避や未知の「疾病X」（ヒトでの発症が確認されていない病原体が引き起こす深刻な国際的伝染性疾患）を紹介していましたが、それがこんなにも早く、そして直接自分達の生活に降りかかるとは思ってもおりませんでした。自身に限れば、このパンデミックが、まさに手探りの状態からどのように制圧されていくのかを身をもって体験することで、この上ない教育を受けているものと考えております。学生の皆さんも大変な時を過ごしているかと思いますが、その中でも医療人としての学びを得ていただけると嬉しく思います。

最後になりましたが、長年過ごしてきました新潟の地域保健・福祉への貢献、そして新潟大学ならびに歯学部口腔生命福祉学科・歯学科の発展のため、浅学菲才の身ではありますが、全力で職務を全うする所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。



シャモニーにて モンブランの頂を目指す像

素 顔 拝 見



予防歯科学分野

高 昇 将

助教に就任して

2020年4月1日付けで予防歯科の助教を拝命いたしました、高 昇将（たか のりまさ）と申します。この度「素顔拝見」の執筆の機会を頂戴しましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

出身は新潟市東区で、小学校から大学まで進学先が白山から西大畑周辺に固まっており、生まれてから今まで行動範囲がほぼ変わっていない生活を送っております。学部学生の基礎実習で勉強していた頃は補綴が苦手だったのですが、臨床実習を通して補綴に興味を持ち始め、卒後の大学院では生体歯科補綴学分野にお世話になりました。しばらくは生体歯科補綴学分野で臨床と研究を継続していくのだろうと思っていた矢先、予防歯科からお声がけ頂き、知見を広げるために同講座に席を移すことになりました。治療から予防へ、ということで臨床内容に限らず研究内容も大きく異なる分野への移籍となりましたが、今までの臨床で学んだ知識を活かし予防歯科に貢献できるよう努力しているところです。

話は変わって趣味の話になりますが、最近釣りを始めました。毎回釣れるわけではないのですが、釣れた時の喜びが大きいのと、釣った魚を自分で捌いて料理する楽しさ、美味しさを知ってし

まうと中々やめられないなあと感じている自分が居ます。釣りはとても楽しいのですが、一度夢中になっていて磯場から海に転落した事があり、自然の怖さを体感したのでそれ以降の釣行では足場により一層気をつけるようになりました。釣り以外には、冬場にスキーを楽しんでいます。一昨年度は雪がなかったため行くことができず、昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い病院からウィンタースポーツ禁止との指示が出ていたため、人生で初めて2年連続でスキーに行くことができませんでした。今年こそは新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、スキーを楽しむことを期待して冬を待っています。

続いて、研究の話をしていただきます。現在、大学院の頃から研究していた炭化ケイ素繊維を用いた繊維強化型レジンについての研究を進めています。歯科治療において、ガラス繊維強化型レジンが修復材料として使用され始めていますが、デメリットがあるため、それを改良するために炭化ケイ素繊維をガラス繊維の代替として使用できないかを研究しています。また、予防歯科に来てからは、義歯の使用状況が高齢者の栄養状態に及ぼす影響についての研究を始めさせていただきました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、中々対象者が集まらずに苦労しておりますが、ワクチン接種も始まりましたので今年は対象者が順調に集まることを期待して準備を進めております。

最後に、未熟者ではございますが新潟大学歯学部発展のために尽力していく所存です。皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。





組織再建口腔外科学分野

佐久間 英 伸

2020年8月1日付で、組織再建口腔外科学分野の助教を拝命しました佐久間英伸と申します。素顔拝見の執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は山形県鶴岡市（旧東田川群櫛引町）と住所から分かるように田舎で育ちました（ちなみに地図では、山形県のたれ目の位置の町でした）。高校には自転車で30-40分かけて通学するという今では考えられないような健康的な生活を送っておりました。大学は愛知学院大学歯学部です。卒業後は、名古屋第一赤十字病院歯科口腔外科での研修（後期研修を含め3年）後に、愛知学院大学大学院に進学しました。大学院では、摂食・嚥下中枢のリズム活動に関する研究で、新生仔ラット（0-6日）の脳幹スライス標本作製し、舌下神経運動ニューロン活動をパッチクランプ法で記録を取っていました。新生仔ラットを実験で使用するため、自家繁殖で、新生仔が生まれたら実験を行うという、ラット次第の生活を約3年送りました。その間、母親ラットに噛まれ、熱が出たりと色々ありましたが、無事大学院を卒業し、その後は、当時所属していた愛知学院大学顎顔面外科講座の関連病院で口腔外科医として勤務しておりました。お気づきの方もいるかと思いますが、ここまで、まったく新潟と接点のない人生を過ごしていました。人生の転機とはいつ、どこにあるかはわからないものです。今から約5年前ですが、家庭の諸事情（私は次男なのですが、長男と父親がまさかの喧嘩別れ）で実家近くに戻ることを要求されました。その時までは、自分は次男だし、このまま愛知県内の関連病院で口腔外科をしていくつもりでいました。まさかの身内の介入により人生プランの変更を強いられた瞬間でした。そこで、前所属講座の当時教授でした下郷和雄先生にご相談したところ、小林正治教授にお会いする機

会をいただきました。そして、小林教授の御厚意で、2017年4月から組織再建口腔外科学分野でお世話になっております。組織再建外科学講座に入局した当初は、文化の違いではありませんが、手術の作法、使用器具の違いなどに戸惑いましたが、今では新潟色を取り入れながら、日々の臨床にあたっております。また、「県高（けんたか）」と言われ、「県立高田高校？」と誤認するくらい新潟について知らない状態で新潟に来ました（いまでは県高=新潟高校は知っています）。

このように少し変わった経緯で新潟大学に所属することになり、新潟では常識的なこと（？）も色々知らないこともあります。少しでも新潟大学歯学部および医歯学総合病院の発展に貢献できるように、臨床・研究・教育に努め、努力していく所存です。皆様どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



組織再建口腔外科学分野 助教

須 田 大 亮

令和3年5月1日より組織再建口腔外科学分野の助教を拝命いたしました、須田大亮と申します。この度、素顔拝見の原稿依頼をいただきましたので自己紹介をさせていただきたいと思えます。

出身地は長野県ですが、出生から幼稚園まで埼玉県の所沢市に住んでいたことがあります。しかしながら黄色い電車が通っていたことしか覚えていませんので特に語れることはありません。父の仕事の都合で転校を繰り返しており、小学校は長野県諏訪市、長野市、八千穂村（現在は佐久穂町）の3か所の小学校に通っていたことがあります。中学校は八千穂中学校で、高校は野沢北高校です。その後新潟大学歯学部歯学科に入学してから大学院に進学してと、本学部にお世話になり続けて15年が経過しました。改めて考えるとそんなに

長いのかと驚いてしまいました。

この歯学部ニュースが発行される頃にはもう東京オリンピックは閉幕していることかと思いますが、オリンピックイヤーにふさわしい話題として1998年の長野オリンピックの思い出があります。長野オリンピックの頃に長野市に住んでいたため、その空気感を味わうことができたのは貴重な思い出です。小学生だったの私の一番の関心は競技よりもオリンピックのピンバッジでした。大会期間中の大通りには多くのピンバッジの露店が出店され、色鮮やかなピンバッジが数十種類は並んでいたと思います。多くの店でピンバッジ同士の物々交換ができるのも新鮮でした。スノーレツのピンバッジ結構大事にしていたのですがどこに行ってしまったのかな…。同じような思い出がある方がいましたら是非お話ししたいです。

歯学部向けの思い出を挙げるとするならば、中学生のころ虫歯がなくて表彰されたことでしょうか。当時の八千穂村では学生の虫歯が多く問題になっていたようで、村の「福祉と健康の集い」というイベントで虫歯のない学生が表彰されていました。おそらくDMF指数が0の学生が表彰されたのだと思いますが、私の学年では私を含めて2人しか表彰されなかったの親に感謝したことがあります。思い返してみると歯科に興味を持ち、現在に至るきっかけとなった出来事だったかもしれません。おそらく現在も私はDMF指数を0でキープしていると思います。患者の苦しみがわからないとも言えますのであまりよくないと思うのですが今後も頑張って0をキープしたいです。

私を紹介するうえで重要な事柄があるとすれば、それはテニスだと思います。高校生の頃からテニスを始め、本学部の硬式テニス部にも所属していました。高校も大学も大会でよい成績は収めることができなかったのですが、うまくボールを打てた時の爽快感に魅せられて長いこと続けます。週7でテニスをしてもまだ足りないと感じるくらい自分の一部だった頃がありました。最近はやがてプレーすることができないので、テレビで観戦して楽しんでいます。特に私と同年のノバク・ジョコビッチ選手の活躍を見るのが好きです。彼は私の大学時代から現在まで、ずっとラ

ンキングのトップを維持しているすごい選手です。実はこの原稿も、今年の全仏オープンの決勝、ジョコビッチvsチチパスを生で見ながら書いています。たった今ジョコビッチ選手が逆転で優勝しました。ダブルキャリアグラนด์スラムです。強い。強すぎる。彼と同年の私もこれから助教として頑張れる気がしてきました。



顎顔面口腔外科学分野

齋 藤 タ 子

本年4月1日付けで顎顔面口腔外科学分野の助教を拝命いたしました齋藤タ子と申します。

3月31日までは新潟大学医歯学総合病院の病院専任助教でありましたが、本年度より歯学部の教育にも従事させていただくことになりました。今回、歯学部ニュースにおいて、このような機会を頂きましたので、僭越ながら自己紹介をさせていただきますと思います。

私は新潟大学歯学部を卒業後、新潟大学臨床研修センターで1年間の研修を終えて、顎顔面口腔外科に入局いたしました。大学院時代は口腔外科の診療に加え、生体組織再生工学分野の泉健次教授のもとで、ヒト口腔粘膜を用いた低酸素環境における口腔粘膜線維芽細胞の培養研究に3年間従事し、2017年3月に博士の学位を取得いたしました。大学院卒業後は1年新潟県外の病院に勤務し、2018年4月から当院勤務になっております。これまでは、教育というと臨床実習で学生のみなさんに関わる機会が多かったと思いますが、これからはそれ以外の学年のみなさんに関わる機会が増えることとなります。私の学生時代とは教育環境がかなり変わっていると思いますが、少しでも学生のみなさんの力になれるよう頑張っていきたいと思います。ちなみに、口腔外科は組織口腔再建外科学分野と顎顔面口腔外科学分野がありますが、どちらも現役医局員やOBの先生方に“サイトウ”という姓が多く、とても紛らわしい状況になっているかもしれませんが、何卒よろしく願います。

私はそれほどこだわっている趣味はありません

が、気分転換したいなと思うと旅行をすることが多いです。ほとんどが国内旅行になりますが、家族にウィスキー好きがいるため、旅行の際にウィスキーの蒸留所見学に行くことがあります。蒸留所は、室内が非常に清潔に保たれており、貯蔵庫も趣があって、独特の雰囲気漂います。ウィスキーは国内外で広く製造されていますが、日本の銘柄で販売されていても、原酒は海外蒸留所のものを使用しているものもあり、製造の過程は複雑です。熟成にかなりの年数がかかるため、とても根気のいる作業だなと思いますが、熟成する樽の違い、熟成年数の違い、配合するウィスキーの種類の違いによって、全く違う風味がでます。長期に熟成したからといって、必ずしも良いウィスキーになるとは限らず、定期的にティスティングをして、微妙な調整を行っています。実際に飲み比べてみると、味の違いがはっきりわかり、とても興味深いです。蒸留所見学は、製造工場などをみることができる以外に、蒸留所限定のウィスキーの購入や希少なウィスキー試飲をすることができますので、それほどウィスキーに詳しくない方でも十分楽しめるのではないのでしょうか。私は余市蒸留所や山崎蒸留所に行きたかったのですが、現在はCOVID-19の影響で県外・国外への移動はなかなか難しい状況ですので、実現できないのが非常に残念です。

最後になりましたが、これまでは口腔外科分野における外来診療、病棟業務、研究などに従事しておりましたが、今年度からは歯学部教育にも携わる機会を頂きました。少しでも歯学部教育に貢献できるよう、微力ながら尽力して参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



歯科総合診療科

中 村 太

助教に就任して

2020年9月1日付で助教を拝命いたしました中村太と申します。この度「素顔拝見」の執筆をご依頼賜りましたので、この場をお借りして改めて自己紹介をさせていただきます。

出身は柏崎市で、冬場は自分の身長より高く雪が積もるような山の中で育ちました。幼少期から体を動かすことが好きでいろいろ手を出しましたが、高校から大学にかけてはハンドボールに熱中していました。当時柏崎高校は新潟国体に向けたハンドボールの強化指定校になっていましたが、そんな状況など露知らず、何か新しいスポーツを始めたいなと部活に入ったが最後、その後の3年間はハンドボール漬けの毎日でした。新潟大学入学後は歯学部ハンドボール部がなかったため、五十嵐キャンパスで全学のハンドボール部で活動をしていましたが、同期が皆4年生で卒業したタイミングで引退をいたしました。その後は登山にはまり、仲間と旅行先で登山をした後温泉に浸かるという何とも贅沢な行いを趣味としていました。屋久島で縄文杉を見に往復9時間程かけて登山をしたり、水上温泉でラフティングに興じたり、筑波でハイキング後にコテージを借りてBBQを楽しんだりと今でもいい思い出です。そんな大学時代の登山仲間もだんだんと新潟を離れ、それに伴い私の体重も日に日に増加して参り

ました。現在では研修終了後から20kg体重が増え、まさに名は体を表す状態になっています。

研修終了後は藤井先生にお誘いいただき歯学教育研究開発学分野（現歯科臨床教育学分野）の大学院生として歯科総合診療科に入局させていただきました。大学院時代のエピソードではバイト先で探針が足首にささり、そこから *Streptococcus* に感染し10日ほど中央病院に入院したことがとても大変でした。受傷後は皮膚科を受診し抗菌薬を飲んで経過をみていましたが、歩くのに苦労するほど痛みが強く、皮膚症状が出る数時間前はひどい悪寒と発熱がみられました。受傷後10日ほどでくるぶし付近の皮膚が壊死し、消毒した針で切開したところ血と膿がどぼどぼと出てきた際はことの重大さを実感しました。翌日整形外科経由で即入院、手術となりましたが、寝台で点滴を打たれたまま関係各所に電話で連絡を取ったことを覚えています。担当の先生からはCRPが23を超えていたと聞かされ、よく普通に動けたねと呆れられました。現在は経過も良好で特に支障はありませんが、しばらくは皮膚が引っ張られるような感覚で、足首の可動範囲も非常に狭くなっていました。現在はICMも拝命しておりますが、経験談から言わせていただくと、針刺しの際は流水で洗浄後患部をヨードで消毒することを強くお勧めさせていただきます。

まだまだ未熟者で足りない所が多々あり、ご迷惑をおかけすることが多いと思いますが、日々努力しながら成長していきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



う蝕学分野 助教

井 田 貴 子

2021年5月1日付で、う蝕学分野の助教を拝命致しました井田貴子と申します。この度、素顔拝見の執筆機会を頂きましたので自己紹介と近況に

ついて述べさせていただきます。思い返せば、歯学部ニュースは大学院生になって以降3度原稿依頼を頂いており、今回は約2年ぶり4度目の執筆になります。長年にわたり新潟大学で仕事ができていることはとても感慨深いことだと改めて感じております。

出身は鳥取県境港市です。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ゲゲゲの鬼太郎の作者である水木しげるさんの出身地でもあります。新潟大学歯学部への進学が決まり、新潟に移り住んで10年以上が経ち、今や新潟の地にすっかり馴染んでいます。ただ、新潟の冬の寒さはいまだ苦手です…。

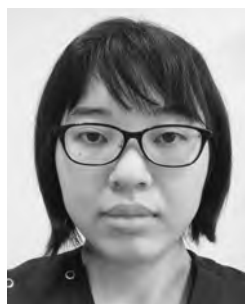
新潟大学歯学部41期生として入学し、卒業後1年目の前半半年間は福島県の病院に勤務し、残り半年間は新潟大学冠ブリッジ診療科で研修を行い、そのまま生体歯科補綴学分野の大学院へ進学しました。大学の補綴専門診療科ということもあり、多様な症例を担当させて頂き、日夜勉強させて頂きました。また、他の診療科の先生方とも連携しながら治療を進められたことも非常に有難いことでした。

学位研究では魚島勝美教授、加来 賢准教授のご指導のもと、骨質（Bone Quality）が骨代謝関連細胞に与える影響を解析しました。国内外の学会で発表する機会を何度か得て、The 9th Congress of Asian Academy Osseointegration (AAO) にてBest Oral Presentation Awardを、学位論文については日本補綴歯科学会奨励論文賞を受賞することができました。また、米国の大学を訪問し、米国の歯学部教育や補綴学に関連する基礎研究に触れる機会も頂きました。さらに、大学院4年目から2年間、日本学術振興会特別研究員に採用して頂き、研究に専念させて頂きました。2020年4月からは高度口腔機能教育研究センターに所属し、前田健康歯学部長、佐伯万騎男教授のご指導のもと基礎研究に従事しました。

2021年4月よりう蝕学分野へ異動となり、早いもので2か月が経ちました。野村由一郎教授をはじめ、う蝕学分野の先生方には温かく迎えて頂き、大変感謝しております。新たに新潟大学へ赴

任された先生を含め、新任教員3名で切磋琢磨しながら診療、研究、教育に携わる日々を送っております。

現在の自分があるのは、学部学生のところからご指導頂いている先生方をはじめ、先輩・後輩の先生方とも各診療科・分野の垣根を越えてコミュニケーションが取れる環境に恵まれていたからであり、これからは母校である新潟大学およびお世話になった諸先生方に少しでも恩返しができるよう精進していきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



う蝕学分野 助教

外 園 真 規

2021年4月1日付でう蝕学分野の助教を拝命いたしました外園真規（そとこのまき）と申します。素顔拝見の執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

私は兵庫県尼崎市の出身です。尼崎市は兵庫県の南東部に位置しており、非常に交通の便の良い場所です。中学・高校は奈良県へ自宅から片道1時間半ほどかけて通っていました。現在は奈良まで乗り換えなしで行くことが出来ますが、私が高校生の頃はまだ路線が開通しておらず、電車を取り継いで通学していました。大学は大阪大学歯学

部を卒業し、大阪大学歯学部附属病院の歯科保存学教室で研修医、大学院とお世話になりました。

私が保存修復治療・歯内治療に興味を持ったのは6回生の臨床実習でした。痛みを訴えて来院される患者さんに対して原因を特定し、その原因に対して様々な器具、機器を用いて治療を行う先生方の姿に憧れ、入局を決めました。

大学院では睡眠とデンタルバイオフィルムに関する研究を行っていました。睡眠をテーマとしていたため、実験サンプル採取が夜中になることもあり、大学に泊まり込んで実験をしていたのもいい思い出です。今後もデンタルバイオフィルム、口腔バイオフィルムに関して研究を続けていきたいと考えています。

関西を離れて生活することになり、非常に緊張していましたが、野杵教授をはじめう蝕学分野の先生方や病院のスタッフの皆様のおかげで診療、研究、教育と充実した生活をおくっております。新潟大学歯学部の教育はとても充実していると感じます。特に、治療計画を自分で立てて治療を実践する総合模型実習は私もやりたいくらいです。

新潟に来て思ったことは、ご飯がおいしい（お米だけでなく、魚・肉・野菜全部おいしい、そして安い）ことでした。スーパーにたくさんの産地のお米が売っていることも驚きでした。1種類ずつ試していますが、完全制覇はまだまだ先になりそうです。

最後になりましたが、う蝕学分野と新潟大学の発展に貢献できるよう、日々精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

歯学部長 前田健康

教授人事について

令和3年3月末で定年退職した高木律男先生（顎顔面口腔外科学分野）の後任に、富原圭先生（富山大学医学部准教授）が選考されました。富原先生は本学歯学部歯学科を卒業後（31期生）、

札幌医科大学大学院を修了し、米国テキサス大学サンアントニオ校に留学した経験を有しています。発令は7月1日付。

名誉教授称号授与について

本年3月31日で本学を定年退職した高木律男先生（顎顔面口腔外科学分野）、山崎和久先生（口

腔保健学分野）に名誉教授の称号が授与されました。

世界大学学術ランキング2021について

Shanghai Ranking Consultancy（上海交通大学大学研究センター）より、「Shanghai Ranking's Global Ranking of Academic Subjects 2021 (AD)（世界大学学術分野ランキング）」が公表されました。新潟大学歯学部は2021年度版ランキング Dentistry & Oral

Sciences部門において、一昨年、昨年に引き続いて世界50位以内にランクインしました（本年度、世界45位）。国内の歯学部では、3位に高い評価を受けました（<http://www.shanghairanking.com/rankings/gras/2021/RS0403>）。

歯科医師による新型コロナワクチンの接種協力について

新型コロナワクチン接種を安全かつ迅速に行う必要がある中、地域により接種にあたる人材の確保が困難な状況にあることから、歯科医師によるワクチン接種を認める必要性が指摘されていまし

た。しかしワクチン接種は医療行為であり、歯科医師がワクチン接種を行うための違法性の阻却について議論されていました。

その結果、違法性が阻却される要件として、1)

医歯学総合病院臨床研究推進センターから

新潟大学医歯学総合病院臨床研究推進センターから —治験・臨床研究を通じて新しいエビデンスを創出する—

実施管理部門長 特任助教 宮 沢 春 菜

臨床研究推進センターは、治験及び臨床研究の研究相談、開発支援、教育等を総合的に行う組織です。わが国の大学病院に広く設置され、新しいエビデンスの創出を通じて医療の発展に貢献しています。

当院では、1999年に新潟大学医学部附属病院下に開設された「ちけんセンター室」が原点であり、2003年の生命科学医療センター設立時に「ちけんセンター部門」として改組されました。2015年には、治験に加えて臨床研究を支援する「プロトコルデータセンター」が発足しました。そして、2017年にこれらが統合されて「臨床研究推進センター」が誕生しました。2021年4月に部門改組を行い、新体制をスタートさせています。

歯学部の皆さんにはあまり馴染みがない組織と思いますが、この度本稿執筆の機会を得て、当センターの概要についてご紹介します。

1. 組織体制およびスタッフ構成

当センターは大きく4つの部門で構成され、下記のような業務を行っています。

○開発促進部門：学内外のシーズ発掘や、実用化を見据えた研究開発の戦略的助言

○データ支援部門：高品質なデータ取得・管理ができる試験計画策定や、統計解析・モニタリング等の実施

○実施支援部門：治験コーディネーター（CRC）を中心とする倫理・安全面に配慮した治験及び臨床研究の実施支援

○実施管理部門：治験審査委員会の運営、企業

治験・医師主導治験事務局業務、製薬企業や研究者との契約締結

これらの各部門が連携し、医療イノベーションの創出及び先進的医療の提供を通じて社会に貢献することを目指し、研究開発の初期段階から治験・臨床研究へまで一貫通貫の支援を行っています。

当センターは約50名のスタッフを擁し、医師4名、歯科医師2名、薬剤師7名、看護師（CRC）11名、臨床検査技師2名に加え、臨床研究の品質管理に欠かせない統計解析・データマネジメント・モニタリングの専門家や治験関連事務を行う専門職員、システムエンジニア等から構成されています。現在は、医薬品医療機器総合機構（PMDA）や日本医療研究開発機構（AMED）での勤務経験がある医師、歯科医師が部門長に就き、当院で計画・実施される治験及び臨床研究が適切に実施されるべく統括しています。



実施管理部門長の前任（旧歯学部附属病院薬剤部所属）丸山精一先生を囲んで

治験・臨床研究支援業務のため、歯学部棟と病院間を頻回に往来し、歯学部の皆さんとすれ違っているスタッフ一同です。よろしくお願い致します。

（21. 4. 27 撮影時のみマスクを外しています）

2. 歯学部との関わり

治験・臨床研究の実施件数は医学部の方が多いですが、歯学部でも過去ミコナゾール、トラフェ

ルミン（遺伝子組換え）製剤、歯周病体外診断薬の治験や、イトリゾール、シタフロキサシン、レボフロキサシン、テルダーミスを用いた臨床研究の実施にあたり、当センターが支援してきました。また、シタフロキサシン、レボフロキサシン、デノスマブ（遺伝子組換え）、トラフェルミン（遺伝子組換え）製剤に関する製造販売後調査についても歯学部多くの先生方にご協力いただきました。

現在、歯学部の先生方からも、臨床研究に係る法規制、研究開発の計画立案、統計解析、薬事、研究費獲得等に関する相談が寄せられ、随時対応しています。また、最近では、橋渡し研究（translational research）、医工連携に繋がる研究、医師主導治験へと発展する研究も増加傾向にあり、2021年度は2件AMED事業に採択された課題を支援し、当センター職員として大変やりがいを感じています。

当センターは、2020年11月に旧歯学部附属病院の跡地を改築した「新潟大学ライフイノベーションハブ」に移転しました。個人的には、ポリクリ・臨床実習、研修医、大学院時代と頻回に行き来していた旧外来を想起し、歯学部との縁も感じながら仕事をしています。旧1補綴、2補綴外来のあったエリアが当センターのオフィスとなり、今春には歯学部裏の美しい桜も鑑賞できました。また、旧1保存、2保存外来のエリアは、学内外の研究者や企業との共創的研究発展のため、新たな交流の場となるモダンな「コワーキングスペース」として生まれ変わりました。当該スペース

は、新型コロナウイルス感染症の状況を考慮しつつ、可能な限り早期のオープンを予定しており、その際には歯学部の先生方にも広くご利用いただきたいと願っています。

3. 当センターの利用について

ホームページ（<https://www.ctrn.niigata-u.ac.jp>）には、センター紹介、支援業務の詳細が掲載されているほか、「研究者の方へ」のページから「お問い合わせ」をクリックしていただくと入力フォームがあります。企業から治験の依頼が入り、実施に興味をお持ちの場合には、同フォームにてご連絡ください。また、研究相談は、臨床研究全般について受け付けています。先に記載した相談事項に加え、治験・臨床研究実施に関するだけでなく、ご自身の研究のシーズを臨床研究に繋げる前段階での基礎研究・非臨床研究の進め方、臨床研究を始めるための準備、将来の社会実装を見据えたProof of conceptの取得、薬事承認を目指すための方向性の相談など、どのようなことでも構いません。研究相談は、開発促進部門企画戦略室が対応し、私を含め、各部門長も兼務しています。必要に応じて研究企画推進部・研究推進課、地域創生推進機構、基礎・臨床研究支援課への仲介等も行い、当センターのドアをノックすれば、研究進捗に役立つヒントを必ず持ち帰っていただけるような支援体制を整えています。

また、私は診療のため外来ブロック2エリアに



当センター オフィス（旧1補綴・2補綴外来）



コワーキングスペース（旧1保存・2保存外来）

時々ありますし、オフィス場所の関係上、歯学部
校舎も往来していますので、どうぞ遠慮なくお声
がけください。歯科医師が所属していることで、

皆さんから当センターや治験・臨床研究を身近に
感じていただけますと幸いです。



当センターによる支援実施の一例（HPにも掲載）

同窓会だより

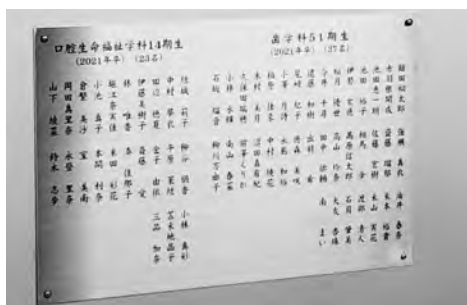
同窓会だより

副会長 野 内 昭 宏

新型コロナウイルス感染症の収束もまだ先のようにも思えますが、それでも「新しい生活様式」に則って、徐々に活動の場を広げています。

1. 卒業生ネームプレート

卒業式を間近に控えた3月中旬に、この春に卒業した歯学科51期生、口腔生命福祉学科14期生のネームプレートを歯学部4階の渡り廊下に設置しました。



ネームプレート

2. 慶事

令和3年春の叙勲で、歯学科1期生の吉田元彦先生が旭日双光章を受章されました。保健衛生功労の功績が認められたことによるものです。

また、4月には以下の4人の先生が各大学の教授に就任されました。

- ・山本恒之先生（歯学科13期） 北海道大学大学院歯学研究院口腔機能解剖学教室
- ・増本一真先生（歯学科24期） 浜松医科大学歯科口腔外科学講座
- ・濃野要先生（歯学科31期） 本学口腔生命福祉学分野
- ・羽下・辻村麻衣子先生（歯学科35期） 日本

歯科大学新潟生命歯学部解剖学第二講座

そして7月には、歯学科31期の富原圭先生が、本学顎顔面口腔外科学分野教授に就任されました。

規約に則り、各先生方には当会から慶祝の品を贈呈しました。先生方の益々のご活躍をお祈りいたします。



山本恒之 先生

増本一真 先生



濃野要 先生

羽下・辻村麻衣子 先生



富原圭 先生

3. 学会開催支援金贈呈

この10月に、第155回 日本歯科保存学会秋季学術大会が、本学う蝕学分野の主管で開催されます。規約に基づき、支援金を野杵教授にお渡ししました。



支援金を受け取られる野杵教授

4. 総会と学術講演会

4月24日（土）に、この1年間の活動方針を決める総会を行いました。

その後の学術講演会では、生体組織再生工学分野の泉健次教授から「異分野連携がもたらす口腔粘膜ティッシュエンジニアリング／再生医療の発展」と題して、再生医療関係の講演がなされました。

5. 学術セミナー

5月30日（日）午前に、「シンポジウム『漢方を知る』～口腔疾患における漢方医学～」と題して、遠藤奈央先生（株式会社ツムラ）、伊藤加代子先生（新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科）、田中裕先生（新潟大学医歯学総合病院歯科麻酔科）の3先生から、ご講演をいただきました。

6. クラス代議員会議

6月19日（土）夜に、各卒業期の代表者同士の情報交換会を行いました。

学部の性格上、卒業生は全国にいらっしゃいます。そんな中で、6年間 or 4年間で共に過ごした仲間の繋がりはまた別物で強固なものです。

この会を通じて、クラスの仲間に思いを馳せて、その結びつきの重要性を再認識した方も多かったと思います。

「4. 総会と学術講演会」と「5. 学術セミナー」と「6. クラス代議員会議」は、いずれもZoomを介しての開催でした。このコロナ禍故にすっかり確立されてしまった講演様式ですが、全国津々浦々で活躍している同窓生を瞬時につなげてくれて、感覚的な距離をほぼ無くしてくれる便利なものです。

まだまだ対面事業は難しい面もありますが、ICTを駆使して工夫をして、今までと同等もしくはそれ以上の活動を考えていきます。

新潟大学歯学部同窓会学術講演会 を拝聴して

歯学科21期 棟 方 隆 一

2021年4月24日に開催されました、歯学部同窓会学術講演会に、Zoomを用いて参加いたしました。

新潟県外に住まう者としましては、今回のようなZoomによるオンライン開催は、時間的および空間的制約を受けずに参加することができます。その結果、多くの情報を享受することができ、きわめて有用でありました。

講演内容につきましては、演者ご本人が総括するでしょうから、私からは触れませんが、3部構成という形をとり、歴史的背景を含めての講演はわかりやすく、おそらく聴衆も引き込まれたのではないかと想像します。

個人的には、大学院時代に細胞培養を用いた研究をしておりましたので、接点も多く、そして苦労もわかるつもりです。先生がご指摘なさってい

る、三次元培養や共培養技術の重要性はさらに増し、先生が用いている培養系が、この分野を牽引していくものと確信しています。

先生の最終目標のひとつは、臨床応用を通して治療につなげ、患者に福音をもたらすことでしょう。そこに至るまでの学問的体系の確立も完成間近ではないでしょうか。

この分野の第一線に身を置く泉教授が発信する最新の知見に触れ、身震いする思いでございます。学術的環境の外にいる身としましては、30年ぶりにさびを落とし、そしてわずかにバージョンアップした自分がおります。と同時に、教授と毎晩のように飲み歩いた日々が懐かしく思い出されます。平安閣のケーキ食べ放題も男二人で行きましたね。お互いにダイエットとは対極の位置にいたことを誇りに思っていたのではないのでしょうか。

制約の多いコロナ禍におきましても、ご講演の労をお取りくださった泉教授、そして講演会を開催してくださった同窓会本部の皆様方に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。



シンポジウム「漢方を知る」
～口腔疾患における漢方医学～
を受講して

歯学科30期 杉 田 佳 織

5月30日（日）オンラインでおこなわれたシンポジウム「漢方を知る」を受講させていただきました。以前から漢方医学には興味がありましたが、漢方薬は口腔乾燥症の患者さん以外処方することがなく、理解を深めたいと思い今回受講を決めました。

株式会社ツムラ営業本部の遠藤奈央先生からは「漢方薬の概念」について、口内炎などの炎症が起こっている場合、また炎症が長引き慢性化した場合に漢方医学的に考えられる原因とその治療方法を具体的に教えていただきました。今までは漢方医学というと病態を把握することが難しいものであると考えていましたが、今回教えていただいた指標の「気・血・水」は、症候から原因をとらえやすく、必要な漢方の処方構成を理解しやすいと思いました。また体の不調は生体のバランスが崩れることにより起こり、それを整えるために漢方薬が有効であるということを知ることができました。

口腔リハビリテーション科の伊藤加代子先生からは「口腔乾燥症への東洋医学的アプローチ」について、口腔乾燥症の診断や治療、味覚障害などわかりやすく教えていただきました。口腔乾燥を訴える高齢患者さんが多い診療所に勤務している私にとっては、口腔乾燥症を学び直す良い機会と

なりました。口腔乾燥症では、自律神経性・薬剤性・心因性など何が原因なのか判断することが大切で、漢方薬はほとんどの原因で利用可能であるということでした。また舌の大きさ、色、舌苔の色などは患者さんの体質をみるのに重要だということなので、私も普段の診療時に舌の状態を観察することを習慣づけていきたいと思いました。

歯科麻酔科の田中裕先生からは「漢方薬と痛みの治療」について、病名処方、歯科保険適応薬、クリニカルエビデンス、口腔顔面痛など多様な視点から教えていただきました。漢方医学では症状があれば治療ができるため、漢方薬は原因不明で診断がつかない口腔内の痛みの患者さんにも使いやすいものの、漢方処方は患者をみて証を合わせることが難しく、経験が必要なため敷居が高いと感じている方が多いというお話でした。私もやはり処方にためらうことがあったため、まず1～2種類の漢方薬を病名から処方して、雰囲気慣れてきたら証や生薬の勉強をしてはどうか、という先生のアドバイスを実践して経験を積んでいきたいと思いました。

今回のシンポジウムでは、漢方の基本的な知識から処方の仕方まで3人の先生から様々な角度で説明していただき、あらためて漢方の魅力を感じることができました。使いやすいと教えていただいた立効散、排膿散久湯、五苓散などから処方をしてみて、まずは漢方に慣れるところから始めたいと思います。

ご講演いただいた先生方、そしてセミナーの開催を企画していただいた学術委員の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。



歯学部を支える方々

事務室からこんにちは

歯学部事務室学務係長 山 崎 和 彦

昨年（令和2年）の4月に学務係に異動してまいりました山崎と申します。こんにちは。どうぞ、よろしくお願いいたします。

歯学部は20年ぶり2度目の勤務となります。当時の事務室は、「総務係、会計係」と「学務係」は部屋が別々でした。また、歯学部附属病院の事務もあったため、宿直や当直勤務もあったそんな時代でした。

当時既に教授でいらっしゃったのは、前田学部長と高木教授だったと記憶していますが、この3月に高木先生も定年を迎えられ、時の流れの速さ、人の移り変わりの速さを痛感しているところです。

さて、昨年の4月と言えば、新型コロナウイルスが国内にまん延し出し、日本全国に緊急事態宣言が発せられた、そんな頃でした。入学式等大学に関わるイベントの中止はもとより、大学の根幹を成す授業そのものも開始できないという大学職員生活初の未曾有の事態を歯学部で経験することになりました。

そのような中、開始の遅れた授業は全て非対面

でスタートしましたが、感染状況の改善が見られると、必死に対面型授業の実施を模索し、少しでも質の高い教育を学生に提供しようと尽力される歯学部の先生方のお姿を間近で拝見し、私自身もその一端を共に担えればと思い仕事をさせていただいた一年でした。

残念ながら、6月現在、この新型コロナウイルスの流行は未だ終息が見えない状況ですが、昨年の経験を生かしながら、全ての学生の皆さんに満足いく新潟大学歯学部での学生生活を提供できるよう業務を遂行していきたいと思っています。

私ごとですが、趣味は、馬を眺めること、釣った魚を料理して食べること、日本のちょっと辺鄙なところを旅することです。20代、30代の頃は主に離島や湿原を旅していましたが、4代になってからは山深い地の古い寺社仏閣や鄙びた温泉地に足が向くようになりました。コロナ禍が落ち着いたら、熊野から吉野への古道巡りや津軽、下北の温泉地をゆっくり再訪できたらなと思っています。

新潟歯学会報告

令和3年度 第54回新潟歯学会総会報告

令和3年度新潟歯学会集会幹事
摂食嚥下リハビリテーション学分野
辻村 恭憲

令和3年度 第54回新潟歯学会総会が4月17日（土）に開催されました。昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言の発出の影響を受けて、「総会」を延期して「第1回例会」とともに7月に開催されたので、4月の総会開催は2年ぶりでした。例年会場としていた歯学部講堂は感染症対策のために使用できなかったため、場所を新潟医療人育成センターに移し、会場の参加者は演者と評議員に限定しました。

総会では、会務報告、昨年度の会計決算報告・会計監査報告に続き、今年度の事業計画案と予算案が承認されました。その後、高木律男先生と山崎和久先生が名誉会員として承認され、名誉会員証が授与されました。2020年度の新潟歯学会賞は目黒史也先生（歯周診断・再建学分野）、新潟歯学会奨励賞は日吉巧先生（微生物感染症学分野）に授与されました。おめでとうございます。

総会議事に続き、午前10時10分から4題の一般

口演が行われ、次いで午前11時から「これからの口腔保健（オーラルヘルスプロモーション）戦略」と題して、小川祐司先生（予防歯科学分野）による教授就任講演が行われました。

当日は、学外9名を含む72名（Zoom参加22名）の参加がありました。全国でもオンライン形式やハイブリッドの学会の開催が増えたことでリモート参加の周知が容易になったとはいえ、昨年度と比べてZoom参加者が倍増しており、一般会員の皆様の参加が増えたことを嬉しく思っております。座長をお引き受けくださった先生方、演者および参加された皆様、ありがとうございました。

令和3年度第2回例会は11月6日（土）に同会場で開催予定です。新型コロナウイルス感染拡大状況によっては、開催場所等が変更となる可能性もありますので、詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください（<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>）。



開会の辞 前田歯学部長



新潟歯学会賞授与 目黒史也先生（左）と前田歯学部長



教授就任講演 小川祐司先生

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R3.2.28	米 田 博 行		包括歯科補綴学分野助教
定年退職	R3.3.31	高 木 律 男		顎顔面口腔外科学分野教授
定年退職	R3.3.31	山 崎 和 久		口腔生命福祉学科教授
定年退職	R3.3.31	奥 田 一 博		歯周診断・再建学分野准教授
退職	R3.3.31	齊 藤 一 誠		小児歯科学分野准教授
退職	R3.3.31	奥 村 暢 旦		歯科臨床教育学分野講師
退職	R3.3.31	久保田 悠		予防歯科学分野助教
退職	R3.3.31	岩 瀬 陽 子		小児歯科学分野助教
退職	R3.3.31	TRAKANANT SUPALUK		口腔解剖学分野助教
退職	R3.3.31	渡 邊 賢 礼		摂食嚥下リハビリテーション学分野助教
退職	R3.3.31	三 上 俊 彦		組織再建口腔外科学分野助教
任期満了	R3.3.31	大 墨 竜 也		う蝕学分野助教
任期満了	R3.3.31	戸 川 瞳		包括歯科補綴学分野特任助教
任期満了	R3.3.31	長谷川 真 奈		歯科臨床教育学分野特任助教
昇任	R3.4.1	濃 野 要	口腔生命福祉学科教授	医歯学総合病院予防歯科講師
昇任	R3.4.1	中 村 由 紀	小児歯科学分野准教授	小児歯科学分野助教
昇任	R3.4.1	米 澤 大 輔	口腔生命福祉学科准教授	口腔生命福祉学科助教
昇任	R3.4.1	山 崎 学	口腔病理学分野講師	口腔病理学分野助教
採用	R3.4.1	外 園 真 規	う蝕学分野助教	大阪大学歯学部附属病院
配置換	R3.4.1	中 島 努	小児歯科学分野助教	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科助教
採用	R3.4.1	笹 川 祐 輝	小児歯科学分野助教	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科医員
配置換	R3.4.1	齋 藤 夕 子	顎顔面口腔外科学分野助教	医歯学総合病院顎顔面口腔外科助教
配置換	R3.4.1	那小屋 公 太	摂食嚥下リハビリテーション学分野助教	医歯学総合病院摂食嚥下機能回復部助教
採用	R3.4.1	吉 原 翠	摂食嚥下リハビリテーション学分野助教	医歯学総合病院摂食嚥下機能回復部医員
配置換	R3.4.1	村 上 和 裕	包括歯科補綴学分野助教	医歯学総合病院義歯診療科助教
採用	R3.4.1	松 本 明日香	口腔生命福祉学科助教	

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	R3.4.1	井田 貴子	う蝕学分野特任助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	R3.4.1	北見 恩美	歯科薬理学分野特任助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	R3.4.1	山本 徹	歯科麻酔学分野特任助教	
採用	R3.4.1	鈴木 絢子	高度口腔機能教育研究センター特任助教	
採用	R3.4.1	日吉 巧	高度口腔機能教育研究センター特任助教	
昇任	R3.5.1	高橋 直紀	歯周診断・再建学分野准教授	医歯学総合病院歯周病科講師
配置換	R3.5.1	大川 純平	包括歯科補綴学分野助教	医歯学総合病院義歯診療科助教
配置換	R3.5.1	須田 大亮	組織再建口腔外科学分野助教	医歯学総合病院口腔再建外科助教
採用	R3.5.1	井田 貴子	う蝕学分野助教	う蝕学分野特任助教
採用	R3.5.1	市木 貴子	口腔生化学分野助教	カリフォルニア工科大学
採用	R3.5.1	LAY THANT	高度口腔機能教育研究センター特任助手	
昇任	R3.6.1	金子 昇	医歯学総合病院予防歯科講師	予防歯科学分野助教
昇任	R3.6.1	金谷 貢	生体組織再生工学分野講師	生体組織再生工学分野助教
採用	R3.6.1	佐藤 拓実	歯周診断・再建学分野助教	医歯学総合病院歯科総合診療科医員
採用	R3.7.1	富原 圭	顎顔面口腔外科学分野教授	富山大学医学部

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	R3.3.1	牛木 真理	歯学部事務室学務係派遣職員	
配置換	R3.4.1	櫻井 拓仁	財務部財務管理課学系等契約係	歯学部事務室学務係
配置換	R3.4.1	林 尚人	学術情報部情報企画課主任	歯学部事務室総務係主任
配置換	R3.4.1	中川 滋貴	歯学部事務室総務係主任	自然科学系工学部事務室学務係主任
採用	R3.4.1	池田 恵美	歯学部事務室学務係	
採用	R3.4.1	橋本 真由	包括歯科補綴学分野科学技術振興技術者	
任期満了	R3.4.15	椎谷 亮子		歯学部事務室総務係派遣職員
育休復帰	R3.4.16	鈴木 香織	歯学部事務室総務係	
退職	R3.5.31	牛木 真理		歯学部事務室学務係派遣職員
任期満了	R3.6.30	笠原 由佳		生体歯科補綴学分野事務補佐員
採用	R3.7.1	中島 はづき	歯学部事務室学務係派遣職員	

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R3.3.8	西 真紀子		予防歯科助教
退職	R3.3.31	坂 井 幸 子		歯科放射線科助教
退職	R3.3.31	遠 間 愛 子		歯の診療科助教
任期満了	R3.3.31	後 藤 理 恵		口腔リハビリテーション科特任助手
昇任	R3.4.1	濃 野 要	医歯学系（口腔保健学）教授	予防歯科講師
配置換	R3.4.1	中 島 努	医歯学系（小児歯科学）助教	小児歯科・障がい者歯科助教
配置換	R3.4.1	齋 藤 夕 子	医歯学系（顎顔面口腔外科学）助教	顎顔面口腔外科専任助教
配置換	R3.4.1	村 上 和 裕	医歯学系（包括歯科補綴学）助教	義歯診療科助教
配置換	R3.4.1	那小屋 公 太	医歯学系（摂食嚥下リハビリテーション学）助教	摂食嚥下機能回復部助教
採用	R3.4.1	永 田 量 子	歯の診療科助教	
昇任	R3.5.1	高 橋 直 紀	医歯学系（歯周診断・再建学）准教授	歯周病科講師
配置換	R3.5.1	須 田 大 亮	医歯学系（組織再建口腔外科学）助教	口腔再建外科専任助教
配置換	R3.5.1	大 川 純 平	医歯学系（包括歯科補綴学）助教	義歯診療科助教
昇任	R3.6.1	金 子 昇	予防歯科講師	予防歯科学助教
採用	R3.6.1	隅 田 賢 正	顎顔面口腔外科専任助教	顎顔面口腔外科医員
採用	R3.6.1	高 村 真 貴	歯科放射線科助教	歯科放射線科医員
採用	R3.6.1	皆 川 久美子	予防歯科助教	予防歯科医員
採用	R3.6.1	兒 玉 匠 平	義歯診療科助教	顎口腔インプラント治療部医員
採用	R3.6.1	都 野 隆 博	高度医療開発センター特任助教	歯周病科医員
採用	R3.7.1	竹 内 涼 子	口腔再建外科助教	口腔再建外科医員
採用	R3.7.1	吉 村 将 悟	義歯診療科助教	義歯診療科医員
採用	R3.7.1	長谷川 真 奈	歯科総合診療科特任助教	歯科総合診療科医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R3.3.31	佐々木 薫		東3階病棟副看護師長
任期満了	R3.3.31	阿部 弘美		歯科衛生部門歯科衛生士
昇任	R3.4.1	寶 來和呼	看護管理室副看護部長	東3階病棟看護師長
採用	R3.4.1	佐藤 美優	東3階病棟看護師	
採用	R3.4.1	関 沢 有芽	東3階病棟看護師	
採用	R3.4.1	原 初月	東3階病棟看護師	
採用	R3.4.1	邊 見 真梨奈	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	R3.4.1	畑 田 美登里	外来（歯科）看護師	総合リハビリテーションセンター看護師
所属換	R3.4.1	儀 同 真由美	外来（歯科）看護師長	東8階病棟看護師長
所属換	R3.4.1	川 村 都子	東3階病棟看護師長	外来（歯科）看護師長
所属換	R3.4.1	佐久間 充子	東6階病棟副看護師長	外来（歯科）副看護師長
所属換	R3.4.1	渡 辺 雅史	東3階病棟副看護師長	手術部副看護師長
所属換	R3.4.1	田 中 千香子	東3階病棟看護師	東9階病棟看護師
所属換	R3.4.1	村 田 真奈美	東6階病棟看護師	外来（歯科）看護師
所属換	R3.4.1	内 藤 薫子	東3階病棟看護師	西4階病棟看護師
所属換	R3.4.1	伊 藤 由美	東3階病棟看護師	西10階病棟看護師
所属換	R3.4.1	阿部 香織	外来（歯科）看護師	外来（医科）看護師
育児休業復帰	R3.4.1	井 上 愛恵	東3階病棟看護師	
育児休業復帰・所属換	R3.4.1	星 野 苑美	手術部看護師	外来（歯科）看護師
育児休業復帰	R3.4.11	堀 舞	東3階病棟看護師	
育児休業	R3.4.17	飛田野 奈美		東3階病棟看護師
所属換	R3.5.9	櫻 田 仁美	東11階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	R3.5.9	堀 口 航平	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師
所属換	R3.5.9	板 垣 文佳	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師
育児休業	R3.5.10	藤 巻 麻未		東3階病棟看護師
任期満了	R3.5.31	小 林 さやか		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	R3.6.1	平 原 茉結	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	R3.6.6	後 藤 ひかる	集中治療部看護師	東3階病棟看護師
所属換	R3.6.6	櫻 田 仁美	東3階病棟看護師	東11階病棟看護師

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	R3.4.1	八百板 正 樹	総務部企画課長	基礎・臨床研究支援課長
配置換	R3.4.1	土 田 秀 樹	医歯学系総務課長	総務課長
配置換	R3.4.1	島 田 彰	総務課長	医事課長
配置換	R3.4.1	小 黒 健 児	基礎・臨床研究支援課長	経営企画課副課長
配置換	R3.4.1	長谷川 亨	医事課長	経営企画課副課長
配置換	R3.4.1	小 川 貴 弘	研究企画推進部産学連携課知的財産係長	基礎・臨床研究支援課主任
配置換	R3.4.1	櫻 井 毅	財務部財務企画課財務分析係長	経営企画課財務企画係長
配置換	R3.4.1	野 口 竜 介	財務部財務管理課副課長	医事課専門員（安全管理）
配置換	R3.4.1	齋 藤 真 紀	学務部教務課学校教員研修係長	医事課患者支援係長
配置換	R3.4.1	山 崎 利 弘	人文社会科学系学務課副課長	医事課副課長
配置換	R3.4.1	渡 邊 健一郎	人文社会科学系学務課経済学部学務係長	経営企画課主任
配置換	R3.4.1	丸 山 浩 一	医歯学系脳研究所事務局共同利用係長	医事課医事総括係長
配置換	R3.4.1	小 池 歩	総務課総合臨床研修係長	総務課主任
配置換	R3.4.1	小 島 清 市	経営企画課副課長	人文社会科学系学務課副課長
配置換	R3.4.1	登 松 司	経営企画課副課長	医歯学系総務課副課長
配置換	R3.4.1	高 橋 譲	経営企画課財務企画係長	財務部財務企画課主任
配置換	R3.4.1	山 本 伸	管理運営課副課長	財務部財務管理課副課長
配置換	R3.4.1	木 伏 哲 夫	管理運営課管理係長	基礎・臨床研究支援課外部資金係長
配置換	R3.4.1	伊佐早 貴 子	管理運営課契約係長	総務課総合臨床研修係長
配置換	R3.4.1	及 川 俊 哉	基礎・臨床研究支援課外部資金係長	管理運営課管理係長
配置換	R3.4.1	服 部 正 人	医事課専門員（安全管理）	管理運営課契約係長
配置換	R3.4.1	井 部 達 也	医事課副課長	管理運営課副課長
配置換	R3.4.1	目 黒 恵 美	医事課専門職員（がん診療）	医事課救急医療係長
配置換	R3.4.1	戸 松 真 紀	医事課専門職員（入院係長兼務）	医事課専門職員（診療請求係長兼務）
配置換	R3.4.1	伊 藤 憲 興	医事課医事総括係長	医歯学系脳研究所事務局共同利用係長
配置換	R3.4.1	吉 田 淳 一	医事課外来係長	医事課診療管理係長
配置換	R3.4.1	木 津 孝 明	医事課患者支援係長	総務部労務福利課共済係長

令和3年度歯学部内委員会

令和3年4月1日

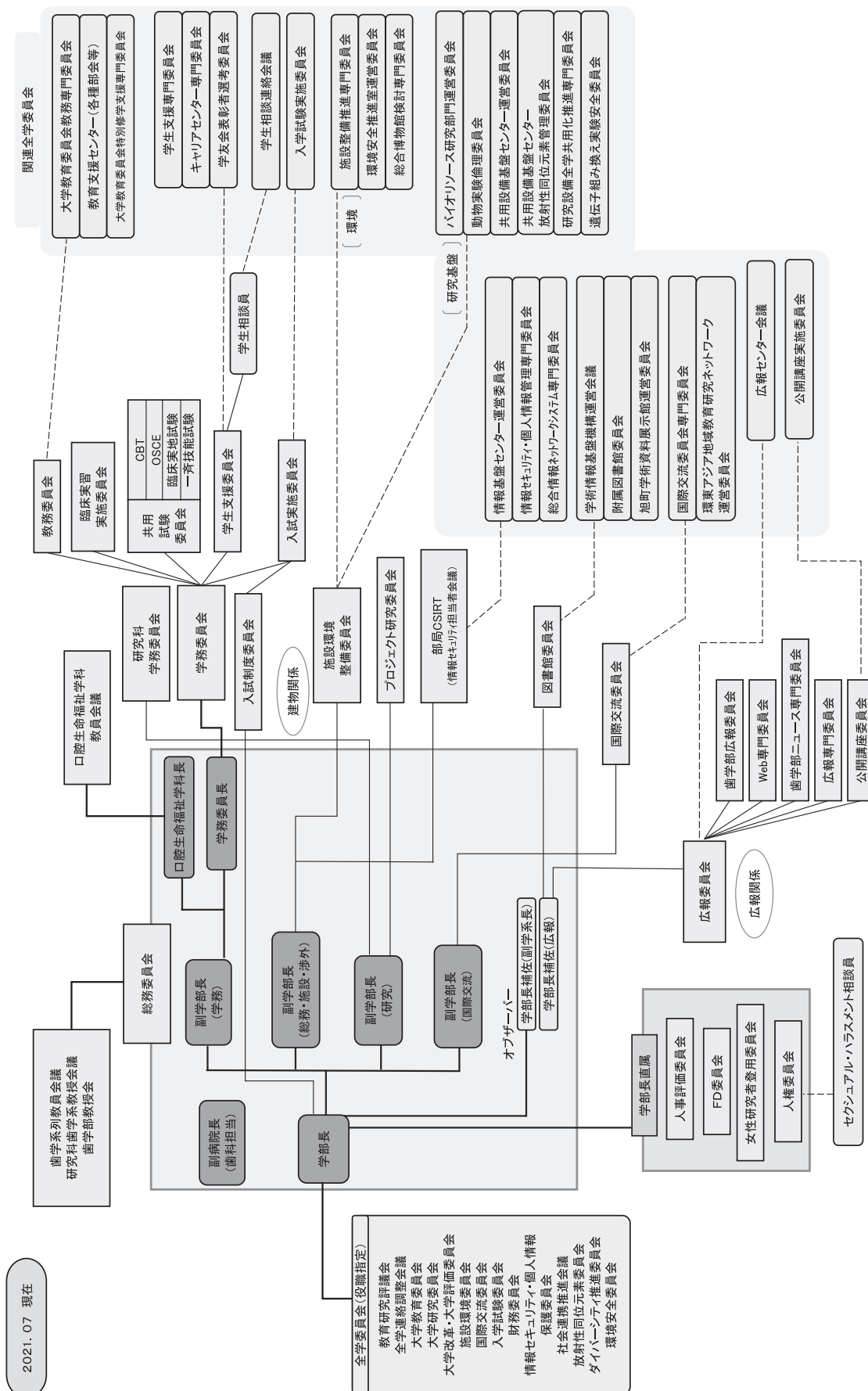
委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田健康	系列長		任期 R3.4.1～R5.3.31
総務委員会	前田健康	歯学部長・歯学科長		総括
	小林正治	副病院長		歯科担当
	小野和宏	副学部長・学務委員会委員長・評議員		学務
	多部田康一	副学部長		総務・施設・渉外
	井上誠	副学部長		研究
	照沼美穂	副学部長		国際交流
	大内章嗣	学部長補佐・評議員		副学系長
	寺尾豊	学部長補佐		広報
	葭原明弘	口腔生命福祉学科学科長		
学務委員会	小野和宏	学務委員会委員長	大学教育委員会教務専門委	総括
	井上誠	大学院学務委員会委員長		大学院学務
	田沼順一	入試実施委員会委員長	入試実施委	入試
	山村健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井規孝	臨床実習実施委員会委員長		臨床実習
	葭原明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	濃野要	教務委員会委員長		教務
	濃野要	教務委員会委員長		総括
教務委員会	小野和宏			オブザーバー
	林孝文			教育課程（歯学科系）
	大内章嗣			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	ステガロユ・ロクサーナ			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	大峽淳			◎共用試験（CBT）
	伊藤晴江			◎共用試験（OSCE）
	多部田康一	（臨床実地試験 総括）		◎共用試験 （診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験）
	吉羽邦彦	（一斉技能試験 総括）		◎共用試験 （診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験）
	藤井規孝	臨床実習実施委員会委員長		◎歯学科臨床実習・臨床予備実習総括
	吉羽邦彦			◎口腔生命福祉学科臨床実習Ⅱ総括
臨床実習実施委員会	柴田佐都子			◎口腔生命福祉学科臨床実習Ⅰ総括
	伊藤晴江			歯科総合診療部
	竹中彰治			予防・保存系診療科
	秋葉奈美			摂食機能・補綴系診療科
	大島邦子			小児・矯正系診療科
	齋藤直朗			口腔外科系診療科
	大峽淳	CBT		必要な都度委員を指名
	伊藤晴江	OSCE		必要な都度委員を指名
共用試験委員会	多部田康一	臨床実地試験 総括		必要な都度委員を指名
	吉羽邦彦	一斉技能試験 総括		必要な都度委員を指名
	山村健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
学生支援委員会	依田浩子			歯学科
	小松康高			歯学科
	秋葉奈美			歯学科
	諏訪間加奈			口腔生命福祉学科
	佐伯万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
	伊藤晴江			研究科
学生相談員	山村健介			
	依田浩子			

委 員 会 名	氏 名	職 名	対応する全学委員会	備 考
入試制度委員会	前 田 健 康	学部長（歯学科長）		
	大 内 章 嗣	学部長補佐		
	多部田 康 一	副学部長		
	葭 原 明 弘	口腔生命福祉学科長		
	田 沼 順 一	入試実施委員会委員長		
	小 野 和 宏	副学部長（学務）・学務委員会委員長		
入試実施委員会	山 村 健 介	学生支援委員会委員長		
	田 沼 順 一	入試実施委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	佐 伯 万 騎 男	前入試実施委員会委員長		補佐
	吉 羽 邦 彦			
研究科学務委員会	小 川 祐 司			オブザーバー
	井 上 誠	副学部長		総括
	泉 健 次			学生支援
	濃 野 要			
国費優先配置特別プログラム運営委員会	石 田 陽 子			オブザーバー（留学生支援）
	前 田 健 康	学部長		
	照 沼 美 穂	副学部長		
	井 上 誠	副学部長		
	大 峽 淳	研究科長		
	小 川 祐 司			
施設環境整備委員会	石 田 陽 子			
	多部田 康 一	副学部長		総括
	大 峽 淳		動物実験倫理委員会	
	佐 伯 万 騎 男		施設整備専門委	
	寺 尾 豊		遺伝子組換え実験安全委	
	高 橋 直 紀			
共通施設専門委員会	加 来 賢		総合博物館検討専門委	
	堀 一 浩			
	多部田 康 一	副学部長		
部局環境安全衛生管理室	土 門 久 哲			
	高 橋 直 紀			
	前 田 健 康	学部長		役職指定
	片 桐 涉			環境安全管理担当者
部局CSIRT（情報セキュリティ担当者会議）	近 藤 正 一			事務室長・衛生管理者
	丸 山 俊			
	前 田 健 康	部局CSIRT責任者		
	西 山 秀 昌	部局CSIRTリーダー	情報基盤センター運営委	総括
	鈴 木 一 郎	部局CSIRT副リーダー		IT一般
	黒 川 孝 一	部局CSIRT副リーダー		
図書館委員会	丹 原 惇	部局CSIRT副リーダー		
	近 藤 正 一	部局情報セキュリティ事務担当者		
	寺 尾 豊		附属図書館委	
国際交流委員会	土 門 久 哲		附属図書館委	
	吉 羽 邦 彦			
	照 沼 美 穂	副学部長	国際交流委員会専門委	
	井 上 誠	副学部長		
	多部田 康 一	副学部長		
	小 川 祐 司			
	泉 健 次			
広報委員会	前 川 知 樹			
	高 橋 直 紀			
	石 田 陽 子	オブザーバー		
	寺 尾 豊	学部長補佐		総括 ◎歯学部ニュース専門委
	多部田 康 一	副学部長		◎広報専門委（学部）
	ステガロコ・ロクサーナ			◎広報専門委（学部）
公開講座実施委	吉 羽 邦 彦			◎広報専門委（研究科）
	黒 川 孝 一			口腔生命福祉学科
	丹 原 惇			◎学部広報web専門委
	堀 一 浩			研究科広報web
			公開講座実施委	◎

委 員 会 名	氏 名	職 名	対応する全学委員会	備 考
歯学部広報委員会 We b 専門委員会	寺 尾 豊	学部長補佐		総括
	黒 川 孝 一			
	竹 中 彰 治			
	米 澤 大 輔			
	丹 原 惇			
	齋 藤 直 朗			
歯学部ニュース専門委員会	寺 尾 豊	学部長補佐		他の委員は准講層、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	寺 尾 豊	学部長補佐		学部
	ステガロウ・ロクサーナ			学部
	吉 羽 邦 彦			研究科
歯学部公開講座委員会	堀 一 浩		公開講座実施委	
プロジェクト研究委員会	井 上 誠	副学部長		
	多部田 康 一	副学部長		
	照 沼 美 穂	副学部長		
	野 杣 由一郎			
	泉 健 次			
	岡 本 圭一郎			
	前 川 知 樹			
臨床系実習室管理委員会	小 野 高 裕	委員長		共同技工室、実習準備室
	吉 羽 永 子			臨床基礎実習室、臨床技能評価室、臨床示説室
	小 林 哲 夫			臨床基礎実習室
	魚 島 勝 美			臨床基礎技能実習室
	加 来 賢			臨床技能自習室
	藤 井 規 孝			臨床実習技工室
	黒 川 孝 一			歯科行動科学相互実習室
人事評価委員会	前 田 健 康	系列長		
	山 村 健 介	任期制教員で基礎系の教授		任期 R2.4.1～R4.3.31
	林 孝 文	任期制教員で臨床系の教授		任期 R2.4.1～R4.3.31
	丹 原 惇	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		任期 R2.4.1～R4.3.31
	竹 中 彰 治			任期 R2.4.1～R4.3.31
FD委員会	秋 葉 陽 介	委員長		
	吉 羽 永 子			
	新 美 奏 恵			
	真 柄 仁			
	伊 藤 晴 江			
	大 川 純 平			
	高 橋 直 紀			
	川 崎 真依子			
	前 田 健 康	顧問		
	小 野 和 宏	オブザーバー		
	井 上 誠	オブザーバー		
女性研究者登用委員会	前 田 健 康	学部長		
	多部田 康 一	副学部長		
	照 沼 美 穂	副学部長		
	寺 尾 豊	学部長補佐		

◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

《歯学部各種委員会》



編 集 後 記

はじめに、お忙しい中、原稿執筆にご協力いただいた学内外の皆様には感謝申し上げます。今回初めて歯学部ニュースの編集に携わせていただき、至らない点多かったとは思いますが、歯学部ニュースが多くの方々のご協力により作りあげられていることを改めて認識することができました。コロナ禍で歯学部関係者との対面でのやりとりも少なくなってしまった昨今、本号歯学部ニュースが少しでもお互いを知れる機会の一つとなってくればなによりです。今後も歯学部ニュースが新潟大学歯学部の内外の活性化につながる広報誌であることを願っています。

口腔病理学分野 阿部 達也

まず初めに、この度はお忙しい中、原稿執筆にご協力いただいた先生方、学生さんに感謝申し上げます。歯学部ニュースは、執筆依頼を頂き寄稿させていただいたことは何度もありましたが、依頼する側として編集に携わることで、この広報誌を作る為に多くの方が尽力していることを改めて実感しました。歯学部ニュースがこれからも、歯学部の更なる発展と活躍を報告する場として役立って欲しいと願います。微力ながら今号の歯学部ニュースの編集に携わせて頂きまして、誠にありがとうございました。

組織再建口腔外科学分野 齋藤 大輔

この度初めて編集委員を担当させていただきました。学外出身者である私にとって、歯学部ニュースは学内の情報を知ることができるとも貴重な広報誌で、時にはバックナンバーも含めて楽しく読ませていただいております。今回編集に携わり、改めてたくさんの先生方、学生さんの協力のもと成り立っているのだと実感しました。お忙しい中で寄稿いただいた皆様に心より感謝申し上げます。今後もこの歯学部ニュースが活発な情報発信の場であることを願っております。

高度口腔機能教育研究センター
歯周診断・再建学分野 原 実生

この度はお忙しい中、原稿の執筆にご協力いただきました先生、学生の皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。今回、初めて歯学部ニュースの編集に微力ながら関わらせていただき、大変良い経験になりました。歯学部ニュースは、本学の卒業生ではない私にとって、本学のことをよく知ることができる貴重な機会であり、毎号楽しく読ませていただいております。これからも充実した内容を期待して、また次号を楽しみにしております。

微生物感染症学分野 平山 悟

歯学部ニュース139号は、コロナ第4派が到来し、医療従事者へのワクチン接種がはじまった2021年4月に、編集者一同が会することなく、メールのやり取りのみで始動しました。そして現在7月末ですが、とても順調に編集作業が進行し終わりが見えてきたので、編集後記をしたためています。

原稿依頼、入稿、校正等、殆どの作業が前倒しで進んだことは、ひとえに著者の皆様と編集委員の先生方の御尽力の賜物だと思います。新潟大学歯学部構成員の真面目さ、誠実さを感じました。ご多忙の中、ご寄稿くださった方々、編集に携わってくださった編集委員4名の先生方、編集責任の寺尾先生、そして本誌を読んでくださった皆様へ、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

包括歯科補綴学分野 長谷川 陽子

歯学部ニュース

令和3年度第1号（通算139号）

発行日	令和3年10月1日
発行者	新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者	長谷川陽子、寺尾 豊
編集委員	阿部 達也、齋藤 大輔 原 実生、平山 悟
印刷所	(株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：上堰潟公園

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／
絞り：F4・シャッター速度：2,000分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：佐渡海峡（越佐海峡）

使用機材：OLYMPUS PEN-F／M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO／
絞り：F6.3・シャッター速度：250分の1秒

コメント：今号では、新潟の風景ではお馴染みの角田山を背景として、表紙では上堰潟公園のコスモスを、裏表紙では白波を立てて疾走するジェットフォイルの姿を写し撮りました。表紙では前景と背景とのバランスをとる様に、標準ズームの広角端を用いて最短撮影距離付近まで被写体の花に極力近づきつつ、絞りを開放にしました。また裏表紙では望遠端を用いて、手前から無限遠までピントが合うように絞りを絞り気味にしましたが、シャッター速度があまり下がらないように気を遣いました。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：SONY α 900 (DSLR-A900)・OLYMPUS PEN-F

レ ン ズ：Distagon T* 24mm F2 ZA SSM・M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮 影 者：林 孝文

